

# 大宰府史跡

平成3年度発掘調査概報



平成4年3月

九州歴史資料館

# 大宰府史跡

平成3年度発掘調査概報

平成4年3月

九州歴史資料館

## 序

史跡観世音寺境内および子院跡を発掘調査対象とする大宰府史跡第4次5ヶ年計画は本年をもって終了する。

諸般の事情から調査は、当初の目標を達成したとは言いがたいものの古代の西海道を代表する観世音寺の実像解明への一歩とは成り得たものと思う。

本書では、平成2年度調査の講堂跡の概要および平成3年度調査の大宰府政庁跡両側の官衙推定地区の緊急調査の概要を報告する。

平成4年度からは、新たに第5次計画を実施する運びとなるが、次年度の概報では現在進行中の観世音寺南門跡などの調査を含め第4次計画の一応のしめくくりをつけたい。

大宰府史跡調査研究指導委員会の委員各位、文化庁の関係者各位、観世音寺御住職石田琳圓氏をはじめ大宰府市教育委員会・地元観世地区の方々には、様々なかたちで御指導・御協力を頂いた。ここに深甚の謝意を表するしだいである。

平成4年3月31日

九州歴史資料館長 田村圓澄

## 例 言

1. 本概報は平成3年度に福岡県が国庫補助を受けて九州歴史資料館が実施した大宰府史跡発掘調査の概報である。ただし第126次調査は平成2年度に実施した調査であるが、未報告であるので報告する。また、第132次・135次調査については顕著な遺構が検出されなかったので報告は割愛した。

さらに、第130次および第137次調査以降については現在出土遺物整理中であるので、報告については次年度にゆずる。

2. 遺構実測図は国土調査法第II座標系をもとに基準点を設けて作成した。(昭和51年度発掘調査概報参照)
3. 検出遺構および出土遺物については大宰府史跡調査研究指導委員の指導と教示を得た。
4. 出土した近世陶磁器については、九州陶磁文化館学芸課長大橋康二氏の教示を得た。
5. 本文中の挿図は、土器・陶磁器類は3分の1、瓦埴類は4分の1の大きさを原則としている。
6. 遺構・遺物の写真はすべて学芸第一課の石丸洋の撮影による。
7. 本概報の執筆、編集は調査課の栗原和彦、橋口達也、横田賢次郎、赤司善彦、吉村培徳が行った。また遺物の整理については齋部麻矢、田崎道子、大田千賀子、小西恵子の協力を得た。



# 目 次

	頁
I 調查計画	1
II 調査経過	2
1 概要	2
2 第126次調査	6
検出遺構	6
出土遺物	14
小結	69
3 第129次調査	75
検出遺構	75
出土遺物	79
小結	96
4 第131次調査	98
5 第133次調査	99
検出遺構	100
出土遺物	101
小結	108
6 第134次調査	109
検出遺構	109
出土遺物	111
小結	112
7 第136次調査	115

# 挿 図 目 次

頁

第1図	大宰府史跡発掘調査地域図	折込
第2図	第126次調査遺構配置図	折込
第3図	第I期講堂概念図	7
第4図	SB3800第I期足場穴柱掘形断面図	8
第5図	SB3800A・B・C・D、SB3755出土土器・陶磁器実測図	14
第6図	SD3715・3725・3787、SK3759・3792出土土器実測図	17
第7図	SK3770出土土器実測図	19
第8図	SK3775・3777出土土器・陶磁器実測図	20
第9図	SK3791、SX3741・3771・3788・3794出土土器・陶器実測図	22
第10図	その他の遺構、層位出土土器・陶磁器実測図	23
第11図	茶褐色砂層・IV層黒色土層・瓦整地層・褐色土層出土土器・陶磁器実測図	25
第12図	暗褐色土層・黄褐色土層・茶褐色土層出土土器・陶磁器実測図	28
第13図	講堂跡・回廊跡出土軒丸瓦拓影1	30
第14図	講堂跡・回廊跡出土軒丸瓦拓影2	31
第15図	講堂跡・回廊跡出土軒丸瓦拓影3	33
第16図	講堂跡・回廊跡出土軒丸瓦拓影4	34
第17図	講堂跡・回廊跡出土軒丸瓦拓影5	35
第18図	講堂跡・回廊跡出土軒丸瓦実測図	37
第19図	講堂跡・回廊跡出土軒丸瓦拓影6	38
第20図	講堂跡・回廊跡出土軒平瓦拓影1	39
第21図	講堂跡・回廊跡出土軒平瓦拓影2	40
第22図	講堂跡・回廊跡出土軒平瓦拓影3	42
第23図	講堂跡・回廊跡出土軒平瓦実測図	43
第24図	講堂跡・回廊跡出土軒平瓦拓影4	45
第25図	SB3800D整地層出土軒瓦	46
第26図	SK3777出土軒瓦	47
第27図	SK3774出土軒瓦	48
第28図	講堂跡基壇版築土中から出土の瓦片拓影	49
第29図	講堂跡出土丸瓦M075拓影・実測図	50

第30図	講堂跡出土丸瓦M087拓影・実測図	51
第31図	観世音寺所蔵丸瓦M005拓影・実測図	52
第32図	講堂跡出土平瓦H102拓影・実測図	54
第33図	講堂跡出土平瓦H105拓影・実測図	55
第34図	観世音寺所蔵平瓦H035拓影・実測図	56
第35図	講堂跡出土丸瓦・平瓦の叩打痕跡拓影	57
第36図	講堂跡出土平瓦一枚作り関連資料拓影・実測図	58
第37図	講堂跡・回廊跡出土文字瓦拓影	59
第38図	観世音寺所蔵丸・平瓦および講堂跡・回廊跡出土丸・平瓦の刻印拓影 1	60
第39図	観世音寺所蔵丸瓦の刻印拓影	61
第40図	講堂跡・回廊跡出土丸瓦・平瓦の刻印拓影 2	61
第41図	講堂跡・回廊跡出土丸瓦・平瓦の刻印拓影 3	62
第42図	講堂跡・回廊跡出土軒瓦の刻印ヘラ描拓影	63
第43図	講堂跡出土寛永銘鬼瓦実測図	65
第44図	講堂跡・回廊跡出土土道具瓦拓影	66
第45図	講堂跡出土文様埴拓影	66
第46図	銅銭拓影	68
第47図	土製品・石製品実測図	68
第48図	講堂の基壇前面部・断面図	70
第49図	各期の講堂変遷図	折込
第50図	第129次調査遺構配置図	76
第51図	第129次調査掘立柱建物柱掘形断面図	78
第52図	SB2005・3820出土土器実測図	79
第53図	SD3825・3835・3836・SK3834出土土器・硯実測図	81
第54図	SK3813・SX3822・3830出土土器実測図	83
第55図	SX3833出土土器実測図	84
第56図	SX3838出土土器実測図(1)	85
第57図	SX3838出土土器実測図(2)	87
第58図	SX3838出土土器実測図(3)	89
第59図	SX3838出土土器実測図(4)	90
第60図	SX3838出土土器実測図(5)	91
第61図	SX3838出土土器実測図(6)	93
第62図	SX3838出土陶器・硯実測図	93

第63図	整地層・黄褐色土層出土土器・陶器実測図	94
第64図	第129次調査出土瓦拓影・実測図	95
第65図	第129次調査出土平瓦拓影	96
第66図	第76・129次調査遺構概念図	97
第67図	第131次調査出土瓦拓影・実測図	98
第68図	第133次調査遺構配置図	99
第69図	SE3910実測図	100
第70図	SE3910出土土器・陶磁器実測図	102
第71図	SE3910出土土器実測図	103
第72図	SE3915・3920、SX3919出土土器実測図	104
第73図	第133次調査出土鈎型実測図	106
第74図	第134次調査遺構配置図	110
第75図	SD3930・3931、SX3928出土土器・陶磁器実測図	111
第76図	第134次調査出土軒瓦拓影	113
第77図	第136次調査区実測図	115

## 図 版 目 次

図版 1	観世音寺伽藍古図
図版 2	観世音寺本堂を中心にして 正面から (空中写真)
図版 3	第126次調査区全景 (空中写真)
図版 4	(上) 第126次調査 講堂跡調査区全景 背面から (空中写真)
	(下) 第126次調査 講堂跡調査区全景 正面から (空中写真)
図版 5	(上) 講堂跡SB3800東側部分 (南から)
	(下) 講堂跡SB3800東側前面部 (西から)
図版 6	(上) 講堂跡SB3800東側前面部 (東から)
	(下) 講堂跡SB3800正面東側階段 (南西から)
図版 7	(上) 講堂跡SB3800東側部分 (北から)
	(下) 講堂跡SB3800東側部分 (東から)
図版 8	(上) 講堂跡SB3800西側部分 (南から)
	(下) 講堂跡SB3800西側前面部 (東から)
図版 9	(上) 講堂跡SB3800西側部分 (北から)
	(下) 講堂跡SB3800西側部分近景 (北から)

- 図版10 (上) 講堂跡SB3800背面部 (北から)  
 (下) 講堂跡SB3800背面部 (北西から)
- 図版11 (上) 講堂跡SB3800背面部 (北東から)  
 (下) 講堂跡SB3800背面部 (東から)
- 図版12 (上) 講堂跡SB3800背面北西隅部 (北から)  
 (下) 講堂跡SB3800基壇西側断面 (北東から)
- 図版13 (上) 北面回廊跡SC3730 講堂との取り付き部 (南から)  
 (下) 北面回廊跡SC3730 講堂との取り付き部 (東から)
- 図版14 (上) 講堂跡SB3800A基壇西側西南部 (西から)  
 (下) 講堂跡SB3800A西南部基壇化粧近景 (西から)
- 図版15 (上) 回廊跡SC3720・3730東北隅部全景 (南から)  
 (下) 東面回廊SC3720と雨落ち溝SD3715 (南から)
- 図版16 (上) 北面回廊SC3730と雨落ち溝SD3745 (西から)  
 (下) 回廊西北隅調査区全景 (北から)
- 図版17 (上) 土壌SK3770 (東から)  
 (下) 土壌SK3777 (北から)
- 図版18 講堂跡SB3800第I期足場穴柱掘形
- 図版19 (上) 第129次調査区全景 (西から)  
 (下) 掘立柱建物SB3815・3820 (北から)
- 図版20 (上) 掘立柱建物SB3820 (西から)  
 (下) 掘立柱建物SB2005 (南から)
- 図版21 (上) 掘立柱建物SB2005 (北から)  
 (中・下) 掘立柱建物SB2005柱掘形
- 図版22 (上) 第133次調査区全景 (南から)  
 (下) 井戸SE3910 (東から)
- 図版23 (上) 井戸SE3910 (西から)  
 (下) 土壌SK3915 (南から)
- 図版24 (上) 第134次調査区全景 (北から)  
 (下) 溝SD3930 (西から)
- 図版25 (上) 第136次調査区全景 (西から)  
 (下) 第136次調査区東北部の谷 (南から)
- 図版26 第126次調査 SB3800、SD3715・3725・3787出土土器・陶磁器
- 図版27 第126次調査 SK3770出土土器

- 図版28 第126次調査 SK3775出土土器
- 図版29 第126次調査 SK3777出土土器・陶磁器
- 図版30 第126次調査 SK3777、その他の遺構・層位出土土器・炉壁
- 図版31 第126次調査 SK3791、SX3741・3771・3788・3794出土土器・陶磁器
- 図版32 第126次調査 茶褐色砂層、黒色土層、瓦整地層、褐色土層出土土器・陶磁器
- 図版33 第126次調査 暗褐色土層、黄褐色土層、茶褐色土層出土土器・陶磁器
- 図版34 第126次調査 講堂跡・回廊跡出土軒丸瓦(1)
- 図版35 第126次調査 講堂跡・回廊跡出土軒丸瓦(2)
- 図版36 第126次調査 講堂跡・回廊跡出土軒丸瓦(3)
- 図版37 第126次調査 講堂跡・回廊跡出土軒丸瓦(4)
- 図版38 第126次調査 講堂跡・回廊跡出土軒丸瓦(5)
- 図版39 第126次調査 講堂跡・回廊跡出土軒丸瓦(6)
- 図版40 第126次調査 講堂跡・回廊跡出土軒丸瓦(7)
- 図版41 第126次調査 講堂跡・回廊跡出土軒丸瓦(8)
- 図版42 第126次調査 講堂跡・回廊跡出土軒平瓦(1)
- 図版43 第126次調査 講堂跡・回廊跡出土軒平瓦(2)
- 図版44 第126次調査 講堂跡・回廊跡出土軒平瓦(3)
- 図版45 第126次調査 講堂跡・回廊跡出土軒平瓦(4)
- 図版46 第126次調査 講堂跡・回廊跡出土軒平瓦(5)
- 図版47 (上) 第126次調査 講堂跡基壇版築土中出土瓦片  
(下) 第126次調査 講堂跡出土丸瓦M075
- 図版48 (上) 第126次調査 講堂跡出土丸瓦M087  
(下) 観世音寺所蔵丸瓦M005
- 図版49 (上) 第126次調査 講堂跡出土平瓦H102  
(下) 第126次調査 講堂跡出土平瓦H105
- 図版50 (上) 観世音寺所蔵平瓦H035  
(下) 第126次調査 講堂跡出土平瓦一枚作り関連資料
- 図版51 観世音寺所蔵、講堂跡・回廊跡出土文字瓦など
- 図版52 観世音寺所蔵、講堂跡・回廊跡出土丸瓦・平瓦刻印(1)
- 図版53 (上) 観世音寺所蔵、講堂跡・回廊跡出土丸瓦・平瓦刻印(2)  
(下) 第126次調査 講堂跡出土雲文軒平瓦にみられる刻印
- 図版54 (左上) 第126次調査 講堂跡出土軒平瓦にみられる刻印  
(上右) 第126次調査 軒平瓦凹面にみられる布目端

- (下) 第126次調査 講堂跡・回廊跡出土道具瓦
- 図版55 第126次調査 SK3777出土鬼瓦
- 図版56 (上) 第126次調査 SK3777出土鬼瓦の銘文
- (下) 第126次調査 講堂跡出土文様磚
- 図版57 第126次調査 各遺構・層位出土銅製品・土製品・石製品
- 図版58 第129次調査 SB3820、SD3825・3835、SK3813・3834、SX3830出土土器・陶磁器
- 図版59 第129次調査 SX3830・3838出土土器(1)
- 図版60 第129次調査 SX3838出土土器(2)
- 図版61 第129次調査 SX3838出土土器(3)
- 図版62 第129次調査 SX3838出土土器(4)
- 図版63 第129次調査 SX3838出土土器・陶器・硯・竈(5)
- 図版64 第129次調査 各層位出土土器・陶磁器
- 図版65 第129次調査 出土瓦類
- 図版66 第131次調査 出土瓦類
- 図版67 第133次調査 SE3910出土土器・陶磁器・竈
- 図版68 第133次調査 SE3910、SK3915、SX3919出土土器・土製品
- 図版69 第133次調査 SK3915・3920、SX3919出土土器・陶磁器・平瓦
- 図版70 第134次調査 SD3930・3931、SX3928、層位出土土器
- 図版71 第134次調査 出土瓦類



第1圖 大寧府史跡發掘調查地域圖

0 300m



# I 調査計画

昭和62年度から第4次5ヶ年計画（史跡観世音寺及び同子院跡の調査）は、本年度最終年を迎えた。第1年次は子院の1つである金光寺跡推定地、観世音寺南門前面域の調査、第2年次には戒壇院前面域・観世音寺東南部の調査、第3年次には観世音寺東辺中央部・北辺中央部の調査を実施した。

第4年次からは、大宰府史跡調査研究指導委員会の指導と助言により観世音寺の講堂跡・金堂跡・塔跡などの主要堂宇の調査研究に主眼を置くこととなった。今日まで調査結果から得られた成果は多いとは言えないが、講堂跡の調査では、先学の調査成果を追認するとともに現在の基壇を含め5回にわたって南側に拡張されていること、回廊東北隅を確認し「筑前国観世音寺資財帳」（以下、「資財帳」と記す）の記載にほぼ近いこと、築地推定地の調査では、東西の長さは「資財帳」に近いこと、現宝蔵の北側の調査で築地推定線の内側で棟方向が伽藍中軸線に直交ないしは平行する奈良時代の掘立柱建物を調査出来たことなどをあげ得る。同時に、今日までの南面築地の痕跡を確かめ得ていないなどの問題も残している。しかし、なによりも計画調査は特別史跡大宰府跡の南側の大宰府政庁官衙推定地（未指定地）で観世音寺地区土地区画整理事業が進行したことに伴う緊急調査が急増したことに影響され、思うように進んでいない状況がある。

平成3年5月15・16日に開催した大宰府史跡調査研究指導委員会では、計画調査の遅延について報告するとともに本年度の調査計画について審議して頂き下記のとおり了承を得た。

なお、同指導委員会では平成4年度から出発する第5次5ヶ年計画についても審議頂き、大筋での了承を得たが第5次計画の主眼点は次のとおりである。

1. 特別史跡大宰府政庁地区・正殿の調査と報告書の刊行
2. 特別史跡水城跡の諸施設の解明

の2点である。なお、第5次計画については、現在太宰府市教育委員会が特別史跡水城跡の指定域拡張計画を地元を示していることから、発掘調査をこの計画の推進と合わせて実施すべきであるとの強い発言が指導委員からあった。

調査回数	調査地区	地区面積(m <sup>2</sup> )	調査期間	備考
129	6AYM-B	500	4月～5月	不庁地区官衙
130	6KKZ-B	800	4月～6月	観世音寺南門跡・南辺部
131	6KKZ-B	700	11月～3月	観世音寺金堂跡・塔跡・回廊跡
132	6AYM-A-W他	2000	4月～10月	大宰府政庁南側 日吉・不庁・大筋・広九地区

## II 調査経過

### 1. 概要

平成3年度の計画調査は、特別史跡大宰府政庁南側官衙推定地（未指定地）で進行している観世音寺区画整理事業地での緊急調査9件を実施したことで、計画調査が大幅に遅れる結果となった。

平成2年11月から開始した第126次調査（観世音寺講堂跡）は、4月に実測に入っていた。講堂跡の調査では、講堂の規模や基壇が時代を追って南に広がること、回廊の講堂へのとりつきかたなどの先学の調査結果を追認するとともに、前面に階段が3ヶ所想定できること、講堂から僧房への通路が多数で造られていたこと、回廊の東北隅を確認出来たことなどの調査成果を得ている。講堂跡の実測調査を進める間に、第130次調査として第122次調査の西隣接地を調査区として設定した。この調査区は、民家が立ち退いたために発掘調査が可能となった場所であるが、第122次調査で南面築地の痕跡を確かめることが出来なかったため、これを確かめたいことと合わせて調査区に隣接する南門についても調査を実施することになった。しかし、第126次調査は第4次5ヶ年計画の柱となる調査であり実測図作成後、かなりのためおし調査が必要であった。さらには大宰府政庁前面の区画整理事業地の住宅建設計画を前年度から待って頂いている状況もあり、第130次調査は表土を剥ぎ終った段階で中止し、4月20日から第129次調査に着手した。第129次調査は、太宰府市観世音寺大字大楠に所在する。第76次調査（1981年調査）の東隣接地である。掘立柱建物3棟・南北方向の溝3条などを検出している。これらの遺構は奈良時代後半頃のもので瓦・土器類の出土量もこの地区としては比較的多い状況であった。第129次調査を開始した直後、太宰府市観世音寺大字不丁で区画整理事業による換地の結果、第58次調査区（1978年調査）の北側で第73次調査区（1980年調査）の東側に接した部分約30㎡が民家に組込まれることとなった。この部分は、さきの二つの調査結果からは後世瓦用の粘土が掘り取られた状況が報告されており、奈良時代には大宰府政庁前面の広場として儀式の折などに使用されたと推定されている。重機を用いて調査区全面の排土を行ったが、前記調査と同様の状況であり、瓦片を採集し埋め戻している。第131次調査である。

第129次調査を6月中旬に終了した後、区画整理事業地の西端、御笠川に近い部分太宰府市観世音寺および通古賀の約850㎡の調査を行った。第132次調査である。この部分は区画整理前の地形図から御笠川の氾濫原と推定される部分も含んでいたため、重機を利用してトレンチ調査を実施した。調査では地山面まで掘り下げて遺構が遺存していないこと、御笠川に近づくにつれて地山面が深くなっていることを認めた。遺構はすでに削平されたものであろう。ために、

第132次の調査結果については概要報告から割愛した。7月に入り第133次調査を太宰府市観世音寺字広丸で実施した。調査では平安時代の掘立柱建物・井戸などを検出している。調査区が狭いこと、周辺が未調査であることなどあって遺構配置や性格などの理解には、今後周辺の調査が必要である。第129次～第133次調査と併行して第126次調査を進めたが、実測終了後、礎石振形・基壇のたちわり・基壇南側3列の石列（基壇拡張部）・現基壇東側階段下の石列チェック・回廊部分のだめおしを行ったのち埋め戻しと現基壇の復旧作業を実施してきた。第133次調査と同時にお盆前に終了している。

第134次調査は、7月に表土除去作業を終了していたが発掘調査は8月下旬から開始した。太宰府市観世音寺字不丁で特別史跡大宰府跡の前面にあたり、第87次調査区（1984年調査）の東側・第81次調査区（1982年調査）の北西にあたる。第87次調査ではSD2340と名づけた天平年間の本簡が出土した南北溝が検出されている。この溝以東の調査では建築遺構は非常に少ないことから、大宰府政庁前面の広場と考えていた地域である。発掘調査では、奈良・平安時代の遺構は検出されず、11世紀以降粘土を採集したと考えられる痕を広く認めたことから、奈良・平安時代には政庁前面の広場であったものと想定している。第134次調査と併行し、史跡観世音寺および子院跡、観世音寺北側の山ノ井池の北東に現状変更申請（家屋新築）があり文化庁から発掘調査を実施するよう指示のあった場所についての調査（第135次調査）を実施した。調査地点は観世音寺山ノ井の山ノ井池東北隅法面にあたる。

トレンチ調査の結果、地表下約2.5mでようやく旧表土に達した。旧地形図を現在の地形と重ねると山ノ井池北側では6～7mの盛土が観世団地の造成時に行なわれている。発掘区内での遺構検出も実施したが遺構・遺物の発見はなかった。このことから、今回の概要報告からは除いている。

第134次調査の終了した10月上旬から、第134次調査区の東南、第58次調査区（1978年調査）の南側を調査した。太宰府市観世音寺字不丁地区である。第136次調査の結果では地上上に整地土を認めたものの、整地土・地山面からも建築遺構などは検出されていない。大宰府政庁前面の広場にあたる部分である。なお、旧地形図によると調査区南東部に旧市道が弧を描いているが、発掘の結果この部分は御笠川の氾濫した痕であることを認めている。

第137次調査は、太宰府市観世音寺字広丸で実施した。第29次調査区（1973年調査）の北側で県道筑紫野～古賀線に面した場所である。この地区は、字日吉地区・字不丁地区が本簡の出土状況や建築遺構の配置状況などから官衙地区と推定されてきたのに対し、官人の居住区と推定してきた地域に入る。発掘調査では、調査区の東側3分の2近くには目立った遺構は存在しなかったが、西側で大きな柱穴掘形と、径40cmに近い柱根10数本を残す奈良時代の南北棟建物遺構2時期分が重なって調査できている。柱根や柱穴掘形が立派であることや2回目の建物も前の建物に重ねて建設していることなどから、住居と考えるよりも官衙の1部と考えることもあ

り得るものとも思う。官衙の一部と結論するには、今回得た資料の分析や今後の調査に待たなければならないが、一つの可能性として考えておきたい。

11月上旬から、第137次調査と併行して太宰府市観世音寺宇大楠で第138次調査・第139次調査を実施した。第138次調査および第139次は、第129次調査区と第133次調査区の間に位置している。第138次調査では、奈良・平安時代の井戸・溝などが調査され、第139次調査では溝・柱穴などが調査出来ている。しかし、調査面積が狭いこと・隣接地が未調査であることなどの条件から、これ等の遺構を理解するためには今後周辺部の発掘調査の進捗にまたなければならない。なお、第137・138・139次の発掘調査は12月いっぱいまで終了している。

1月からは、表土剥ぎ作業だけで中断していた第130次調査にもどり、現在も調査進行中である。1月には、特別史跡水城跡東門付近で現状変更申請に対し文化庁から発掘調査を実施するよう指示のあった住宅改築予定地の発掘調査を実施した。この地点は、国道3号線と市道(旧道)が分岐する地点にあたるが、現在、旧道の東側に水城東門の礎石が残っており、また、1968年(昭和43年)には、市道部分で水道管理設工事が実施され東門跡の礎石が工事に伴って発見されている。住宅改築予定地ではトレンチ2本の調査を実施したが、その1つから、東門の基壇か道路敷のためと思われる版築痕跡を調査している。

以上、平成3年度の発掘調査概況を記したが、本書での報告は調査成果の分析と遺物整理の都合上、第136次までを報告することとした。

なお、平成3年度には、特別史跡水城跡の指定拡張の問題があり、第5次5ヶ年計画の実施方法などについて5月の指導委員会終了後、平野邦雄(大宰府史跡調査研究指導委員長)・横山浩一(同副委員長)両先生には7月末重ねての御指導を頂いている。

また、11・12月にかけて旧事務所の位置に文化庁の御了解を得て、事務所棟・整理棟を新営した。第4次5ヶ年計画の残された時間は少ないとは言うものの指導委員の先生方の御指導にそって第4次計画の調査目的を果たしたいものである。

調査次数	調査地区	地区面積(㎡)	調査期間	備考
126	6KKZ-B	800	901105～910809	観世音寺講堂・北面・東面回廊
129	6AYM-B	383	910420～910611	政庁前面官衙城
130	6KKZ-B	1500	910401～	観世音寺南門・南面築地
131	6AYI-D	30	910426	政庁前面広場
132	6AYQ-A-M・N	60	910619～910621	官人居住域推定地
133	6AYM-D-N	88	910711～910813	官人居住域推定地
134	6AYM-A-W	412	910823～911007	政庁前面広場
135	9KKK	80	910826～910919	観世音寺寺院地区
136	6AYM-A-T	140	911007～911022	政庁前面広場
137	6AYM-D-V	600	911008～911216	官人居住域推定地
138	6AYM-C-M	120	911121～911226	官人居住域推定地
139	6AYM-C-P	130	911203～920121	官人居住域推定地
水城20次	6AMK	21	920109～920124	水城東門跡



第135次調査区遠景

## 2. 第126次調査

本次調査は観世音寺の講堂および講堂に取り付く北面・東面回廊の確認を主たる目的として行った。講堂跡については昭和27年に鏡山猛氏を中心に九州文化史研究所と福岡県教育委員会により一部発掘調査が実施され、礎石の抜き取り穴や、基壇の一部が確認されている。その後、昭和32年に福山敏男氏を団長とする調査団によって講堂・東回廊・中門の調査が実施されている。この調査の契機は菩薩院跡に仏像収蔵庫を建設するための事前調査であった。その時の調査結果では現存する礎石から、桁行7間(99尺)、梁行4間(50.5尺)が確認され、側柱礎石の心から8尺の距離で基壇の側石列が検出されている。また、講堂側面の中央礎石の南北両側に1個づつの小礎石が遺存することや、それに対応する旧基壇外側で認められる列石から、回廊は講堂側面の中央部に取り付いていたと判断されている。このとき前面部に後世の基壇拡張の列石が確認されたが、それに相当する建物については調査されていなかった。

以上が、過去に実施された講堂および回廊の調査経緯の概略である。今回の調査は過去に実施された調査結果の追認とその時点では未調査であった再建や、前面部にみられた基壇の拡張との関連の確認、それに講堂側面の中央部に取り付く回廊の規模の確認を主たる目的として実施した。

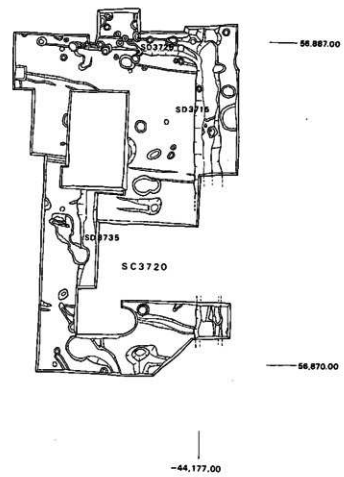
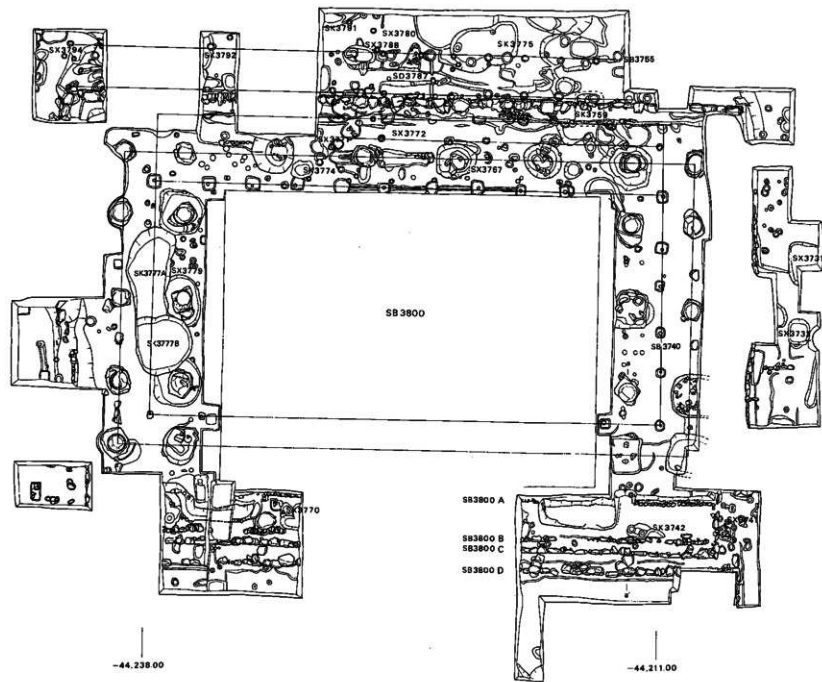
調査は平成元年11月19日に開始したが、調査区設定にあたっては、樹木等の関係で調査範囲がかなり制約され、遺構の確認にはある程度の困難さが予測された。

まず、講堂の規模確認のため、現本堂の周囲より着手した。そして、検出した遺構の状況により、逐次トレンチを拡張設定しながら可能な限りの調査を行った。講堂の調査がほぼ終了したのは翌平成2年1月下旬で、その後回廊の調査に移った。2月下旬には回廊の調査を終了、3月13日気球による空中写真撮影、その後細部写真を撮り、3月28日より遣り方、実測を開始し、5月中旬に実測を終了した。6月4日から基壇部分の断面観察や一部拡張する等の補足調査を行いながら、部分的に埋め戻しを行った。調査および埋め戻し作業が完全に終了したのは8月初旬である。調査地の地番は太宰府市観世音寺132である。調査面積は約800㎡である。

### 検出遺構

#### 講堂跡 SB3800A・B・C・D・E

先述したように講堂跡については過去2回の調査により、現存する礎石をもとに建物および基壇規模について復元がなされている。そして、現礎石が「延喜5年(905)観世音寺資財帳」記載の規模との比較検討などから創建期のものとして、ほぼ確定されている。そして、今回の調査結果においても、大部分については過去の調査と大幅な矛盾はみられず、再確認することとなった。

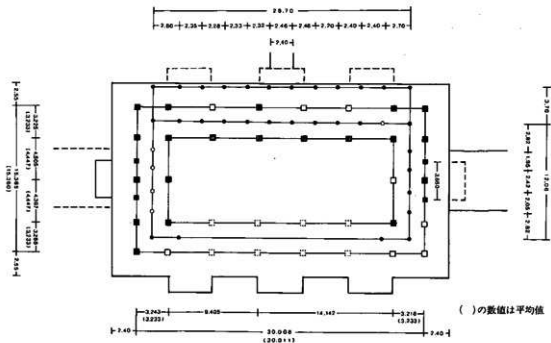


第 2 图 第 126 次調查遺構配线图

今回、新たな遺構の検出として報告できるのは、正面部において再建に伴うとみられる3時期3列の基壇化粧石列を検出したことである。この石列から少なくとも3回の建て替えなし、基壇の拡張が行われていることが判明した。建て替えや基壇拡張がなされていることについては過去の調査により、既に指摘されていた事ではあるが、その時点では調査範囲が狭いこともあって、必ずしも明確にはされていなかった。今回の調査で新たに3列の基壇化粧石列を検出したことにより、創建時と現本堂〔元禄元年(1688)再建〕を合わせると計5列の礎石を確認したことになる。再建された(現本堂を除いた)講堂建物が如何なる構造を有していたかについては必ずしも詳らかでない点が多いが、ここでは基壇化粧石列の構築の時期差によって、便宜的に講堂を大きく5期に区分した。以下、この区分に従って記していくことにする。

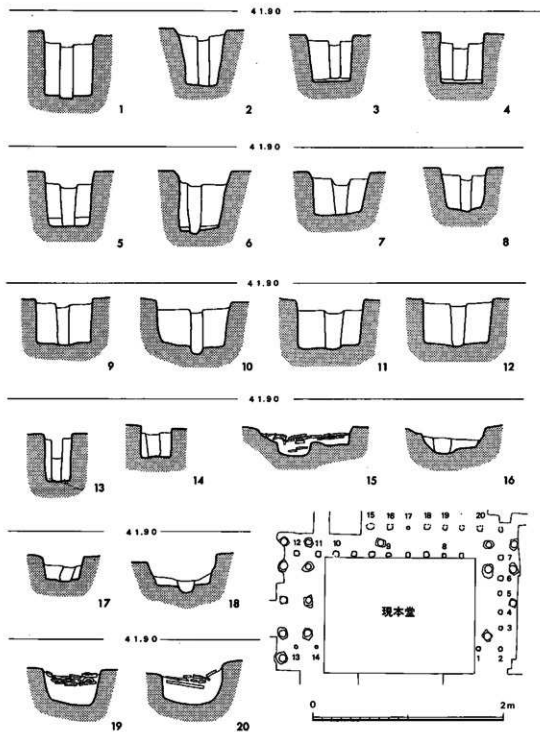
### 第I期講堂 SB3800・A

今回検出した遺構の最古期に属する。現在、地表面に露出し確認できる礎石は16個(昭和32年調査時と同数)であるが、鏡山猛氏の研究によれば昭和6年寺地整備に際し、現本堂下のボーリング調査で入側柱礎石4個を確認されており、それによると合計20個の礎石の存在が報告されている。しかしながら、今回の調査においては鏡山氏報文の北入側柱礎石の中央4個については現本堂の基壇下に入るため確認できなかった。過去の調査では、この残存している礎石



第3図 第I期講堂概念図





第4図 SB3800第I期足場穴柱變形断面図

から桁行7間、梁行4間の講堂建物が復元されている。柱間は両隅の間が狭くなっており、隅の間の寸法については平均3.233m(11尺)で桁行・梁行柱間の寸法は等間である。桁行柱間をみると中央5間の柱間については礎石1個しか現在確認できるものがないが、礎石間の心々距離は2柱間で9.405mとなり、それから1間分の距離を割り出すと、4.70m強となる。梁行については平均4.447m(15尺)であり、桁行柱間より若干狭くなっている。

『資財帳』には「講堂。瓦葺。長十丈。広五丈一尺。高一丈三尺。戸六具」とある。今、講堂の桁行・梁行の総柱間距離を計測すると、桁行30.008m・梁行15.365mとなり、記載数値にはほぼ一致する(柱間計測値については第3図参照)。なお、柱間寸法および単位尺等については後章の小結の項で若干の検討をしたい。

基壇については正面と西面において基壇地覆石を一部検出している。正面の地覆石は南側柱礎石心より2.55m、西面は2.40mを測る。これからすると基壇規模は東西34.808m、南北20.465mに復元できる。正面には中央と両側1間の間隔を置いて、合わせて3個所に階段が付設される。今回、検出したのは両側の2個所だけで、中央階段については確認しなかった。地覆石は残存しておらず(西側の階段で地覆らしき瓦積が一部みられる)、積土が認められるだけである(積土の中には縄目の叩きを有する瓦片が混入している)。階段の出や段数については不明である。また、階段積土は傾斜をもっているが、最も高くなった基壇縁との境界に幅0.35m、深さ0.35mの溝状の掘り込みがある。この掘り込みについては判然としないが、基壇との境界を仕切る羽目石の抜き取りともみられる。因みに各礎石上面のレベル差は1cm内外での精度を保っている。そして、基壇地覆石下面と礎石上面のレベル差は約1.30mである。

講堂の東・西面の間柱中央礎石を挟んで、小礎石が各2個ある。東面は心々で3.680mであるが、西面については両側の1個が後世に移動されたようで、これとは合致しない(基壇面との間に瓦片が入り、浮いている)。この小礎石は回廊との取り付けを示すものとして大きな根拠となっており、今回の調査において回廊を検出したことにより再確認し得た。

礎石および基壇積土が創建期のものであるのかどうかについては、基壇の断面観察からは積み直した状況はみられない。積土中から瓦の小片がわずかに出土しているが、いずれも8世紀前半代に考えられるものである(第28図)。ただ、正面の東側基壇地覆石の近くで出土した須恵器杯蓋小片(第5図1)は9世紀前半代を示すもので、これからすると基壇化粧の補修がこの時期に行なわれた可能性も十分考えられ、また西面の礎石の掘形が上面から観察出来るものと、そうでないものがあり、基壇面の化粧土の補修的なものが当然あったと推定することはあながち否定できないであろう。

足場穴(SB3040) 入間柱礎石を囲む形で巡る掘立柱列である。柱掘形は入間柱と間柱の礎石のはほぼ中央に位置しており、柱筋も講堂の建物と合わせている。そして、後面では間柱礎石を股く形で対応する柱穴があり二重になっている。柱掘形は概略隅丸方形をしており、径45.0~70.0

cm・深さ35.0~70.0cmでほとんどに柱痕跡がある。その痕跡から柱の径は15.0~20.0cmとみられる。柱間寸法は1.95~2.82mと一定しておらず規則性はみられない。とくに、後面の二重になった柱列の外側の柱掘形は基壇積土の端に位置しており、柱掘形がほぼ中央でカットされている。この切断面の掘形内上部に榎斗瓦風の瓦を数枚重ねているが、これは、基壇化粧の際、積土の切断による軟弱な掘形埋土を補強したものであろう（第4図15・19・20を参照）。

**通路状遺構（SX3780）** 講堂後背部の建物中軸線上で検出した南北方向の通路状の遺構である。幅2.40mで両側には埴を立て仕切りを設けていたとみられ、2枚の埴が横位置で立てた状態で残存していた。そして、部分的であるが、その埴の線上および、その東側に平行した幅10.0cm強の浅い溝を検出している。また、土層の観察からも2条の溝で挟まれた部分と周囲とはやや違いがみられ、若干の積土が行なわれていた可能性が窺われる。

講堂の後背部には約17.0mの距離をおいて僧房の遺構が確認されており、これを講堂と僧房を継ぐ通路とみることは無理ではなかろう。調査範囲では約5.0m分を検出したのみであるが、これはさらに発掘区外へ延びている。

#### 第Ⅱ期講堂 SB3800・B

第Ⅰ期講堂の基壇の正面を約2.0m南へ拡張し、側面を内側に約0.5m各々縮小した基壇を有する。正面の基壇を拡張した部分には原位置（若干傾いている）を保つ礎石1個が残存する。正面の基壇拡張と残存する礎石から孫庇が設けられていたとみられる。残存する礎石と第Ⅰ期正面側柱礎石の心々距離は約3.9m（13尺）で第Ⅰ期礎石の南北方向で柱筋を合わせている。拡張基壇礎石の上面の高さは第Ⅰ期礎石上面より40.0cm低い。基壇化粧石の残存状況は余り良好とは言えず、面も揃っていない。第Ⅱ期講堂建設に際して正面の拡張基壇部に新たに礎石を設けた他は第Ⅰ期礎石を移動もしくは新たに据えられた形跡はみられないことから第Ⅰ期礎石をそのまま使用したと考えられる。正面の階段については発掘した範囲内では、その痕跡がなかった事からすると未発掘部分の中央に付設されていたとみられる。背面についても不明である。

#### 第Ⅲ期講堂 SB3800・C

正面の基壇を第Ⅱ期のそれより更に70cm弱拡張している。側面・背面については第Ⅱ期と同様である。第Ⅱ期のように拡張に伴って新たに礎石を据えた痕跡はみられないことから第Ⅱ期の礎石をそのまま使用したと考えられる。基壇化粧石は残存状態もよく第Ⅱ期より大きな石を用いており、整然としている。

第Ⅲ期講堂が全面的な建て替えか、部分的な基壇の修復的なものかは明瞭でないが、もし、全面的な建て替えを行ったとしても、第Ⅱ期講堂と規模・構造に大きな違いはみられない。

**足場穴（SB3755）** 講堂背後の3列の柱穴列である。3列とも講堂建物に平行しており、南北方向も柱筋を合せる。柱穴は円形で径30~60cmで必ずしも一定していない。柱間寸法は東西方向で1.88m等間、南北方向で2.4m・2.1mである。中央の柱穴掘形は第Ⅳ期講堂基壇化粧石の

下に一部入り、時期的にそれより古期になる。基壇上にある柱穴列は9間で終わっているが、削平されたことは考え難く疑問のあるところでもある。これが第Ⅱ期に伴うものか、第Ⅲ期であるのかは確定できない。

#### 第Ⅳ期講堂 SB3800・D

第Ⅲ期講堂の基壇を正面で1.0m強、側面で1.5m、背面で0.60m強を拡張している。第Ⅰ期の側柱礎石心からの距離は正面で6.25m、背面で3.00m、側面で3.20mである。この期の基壇は前期の基壇より全体に一回り大きくなっている。また、新たに正面では礎石が配置され、背面においても、基壇化粧石上に一回り大きな石を置き礎石としている。正面では4個確認したが、礎石の大きさは第Ⅱ期礎石と比べて約2分の1程小さい。第Ⅰ期南側柱礎石との心々距離は5.50mである。やや柱間が広いので、第Ⅱ期の礎石を使用した可能性が高い。第Ⅱ期礎石を使用したとすると、正面の柱間は3.9m、1.6mとなる。礎石上面の高さは第Ⅰ期礎石上面と比べると約80.0cm低く、第Ⅱ期拡張基壇の礎石と比較すると約40.0cm低くなっている。礎石が一回り小さいことからすると床束の礎石と考えることもできる。

背面の基壇化粧石の上の礎石は側柱礎石心から2.9mを測る。この化粧石上にある礎石上面の高さは第Ⅰ期礎石の上面とほぼ同じ高さである。側面については基壇の拡張に伴って新たに据えた礎石は検出してない。西面においては化粧石の残存状況は悪く、もし背面と同様の基壇化粧石上に礎石が置かれていたとしても既に削平されていたとみられる。また、東側では樹木のため未発掘で確認できていない。

#### 第Ⅴ期講堂 SB3800・E

現在の本堂と呼ばれている建物を指す。現本堂は『観世音寺重興記』によれば元禄元年(1688)に柱立があり、同2年に落慶供養が行なわれている。本堂の規模は『福岡県の近世社寺建築』によれば、3間×2間、裳階つき入母屋作本瓦葺で、正面16.09m(53.1尺)、奥行11.60m(38.28尺)とⅠ～Ⅳ期講堂より一回り小さくなっている。そして、現在は本堂の周囲に正面19.7m、奥行15.2m、高さ約30～50cmの石組の基壇が設けられている(昭和6年寺地整備)、そして、さらにその基壇端から南方15.7mの位置に石垣が設けられている。この石垣は東側から北側へと巡り、東面と背面は第Ⅳ期講堂SB3800・Dの基壇化粧石に連続している。この石垣の東面と背面は調査前までは埋没ないし覆土により明瞭でなかったが、この部分は周囲より(正面では1.5mのレベル差がある)一段高くなっていた。

調査の結果、東面および背面は第Ⅳ期講堂の基壇化粧石をそのまま利用し、正面の拡張部分が後世に構築されたものであることが確認できた。この正面部の石垣が構築された時期については詳らかでないが、第Ⅳ期が寛永期にも使用された可能性が高いこと、『筑前国統風土記』や明治32年に描かれた絵図をみると、現況に近い風景が読みとれることなどから、かなり古い段階、すなわち元禄の再建時頃に既に現在のような石垣が構築整備されていたとも考えられる。

もちろん部分的に後の補修が加えられた事は推察するに難くない。

## 回廊

北面回廊・東面回廊 SC3720・3730

講堂の側面中央に回廊が取り付くことは既に昭和32年の調査により、講堂側面の小礎石および玉石積みの基壇化粧の検出からほぼ確定されていた。しかしながら回廊の規模等については調査面積が限られていたこともあって必ずしも明らかとはなっていなかった。

『資財帳』によれば北面回廊の規模は「長貳拾丈柒尺、広一丈五寸」とある。これによれば、北面回廊は講堂の側面に20丈7尺の2分の1、すなわち10丈3尺5寸の回廊が東・西面に取り付いていたことになる。発掘区設定に際し、講堂の東・西面の側柱礎石心から各々10丈3尺5寸の距離をとり、東面回廊との接続部と推定される範囲を可能な限り調査することを計画した。西側については現在池があり、わずかな空地しか残されていない。この部分については幅2.0m弱のトレンチを南北に設定し調査したが、回廊の痕跡を示す遺構の検出はなかった。

東側では北面回廊SC3730が東面回廊SC3720と交わる想定位置で2条の溝SD3725・3735を検出した。外側の溝SD3725は発掘区北端で直角に南へ折れ、ほぼ直線的にのびる(SD3715)。SD3725は発掘区の西端近くで浅くなり消滅する。またSD3715は幅1.30m、深さ30～50cmで明瞭な掘形を有する。16.0m分を検出したが、さらに発掘区外の南へのびている。

内側の溝SD3735は幅1.0m、深さ30cm前後で約8.0m分検出した。溝SD3725とSD3735の心々距離は6.2m、溝で狭まれた部分は5.0mを測る。また、回廊の東北隅と講堂との中間に設定したトレンチで、幅1.0m、深さ20cmの溝SD3745を検出しているが、これは発掘区外の東・西へのびており、西方では玉石積みの基壇化粧と同一線上にのる。東方では南へ折れ、SD3735に連続するとみられるが、その屈曲部については削平されたためか、その痕跡はなかった。

回廊の基壇幅は講堂の側面の小礎石と、その東側で検出した玉石積みの基壇化粧から5.90mが復元可能である。SD3715とSD3735の心々距離は6.2mであり、基壇化粧を考慮すると先述の回廊幅5.90mの復元規模とはほぼ一致する。因みに講堂側柱礎石心から東面回廊SC3720心までの距離は29.40m、また外側柱推定線までは31.12mを測る。

北面・東面回廊の雨落ち溝SD3715・3725・3735・3745の埋土中から出土した遺物には8世紀後半～9世紀前半代までのものがある。このことから雨落ち溝は遅くとも9世紀前半代には埋没していたことになるが、北面・東面回廊が、この時期に廃絶したものであるのかについては判断し難い。

## その他の遺構

### 土壌

講堂および回廊付近から多数の土壌を検出したが、ここではその主たるものについて記す。

SK3770 第I期の正面西側の階段付近で検出した不整形の土壌である。大部分は発掘区外の

東へ広がっている。南北長1.40m、東西長1.0m以上、深さ20cm前後である。土壌中からは9世紀前半代の完形の土師器杯や甕破片が出土している。第I期講堂に伴うものである。

**SK3775** 講堂の後背部で検出した。上層では東西長12.0m以上の拡がりがあり、落ち込み状になっており、発掘区外の北・東へ広がっている。下層では摺鉢状の形状になり、最終的には長径3.0m、短径2.0mの長円形を呈する土壌となる。深さ50cm前後あり、埋土中からは14世紀後半代の完形品を多く含む土師器の杯・小皿が多量に出土している。他の器種を含まず、年代的にまとまっていることから一括投棄されたとみられる。

**SK3777-A・B** 講堂の西側柱礎石列と入側柱礎石列の間で検出した重複する土壌である。切り合いは明瞭にできなかったが、北側の長円形 (SK3777A) が古く、南側の円形 (SK3777B) が新期になる。

SK3777Aは短径2.20m、長径4.70m以上、深さ80cm。壁は垂直に近い状況である。土壌内から瓦片とともに炉壁がかなりの量出土しているので、この位置に仮設の工房が設けられていたとみられ、廃棄時に瓦片も投げ込まれたと考えられる。

SK3777BはSK3777Aを切る径3.0m、深さ0.90mのほぼ円形の土壌である。SK3777Aと同様に瓦片が重なる様に密な状況で埋まり、短時間に一括投棄された様子が窺われた。とくに注目されるのは、この土壌から「寛永」の年号をへら描きした鬼瓦1点 (第43図・図版55・56) が出土していることである。寛永の何年かは欠失しているため不明であるが、記録に残る寛永七年大風による倒壊後、翌年に飯堂が建てられるが、それとの関連を示唆する貴重な資料である。

この二つの土壌は位置からみて現本堂の建設時か、それ以後に掘られたものである。古期のSK3777Aからは炉壁がかなり出土したことから元禄元年の現本堂再建時に炉の廃棄時に掘られたとみられる。そして、新期のSK3777Bは量的には必ずしも多くはないが、陶磁器片が出土しており、それは18世代の肥前系のもを中心として、最も新しいものとして19世紀前半代に考えられるものがある。この年代を重視すれば、その土壌が掘られた上限をこの時期に設定しなければならぬ。記録の上から文政年間と安政年間に修理を行っていることが知られるが、陶磁器の年代を考慮するならば文政年間の修理に伴う土壌を考えることが出来よう。

**SK3791** 講堂背後の基壇外で検出した。深さ25cm前後で大部分は発掘区外に拡がる。

**SK3746** 正面の東側拡張区的最南端で検出した。大部分は発掘区外へ拡がり、その一部を検出したのみである。土壌内には多量の瓦が埋まり、一種の瓦溜りである。

**SK3774** 創建期基壇の上面にある。現講堂の北側で中央やや西寄りで見出された。径1.20m、深さ0.50m前後の土壌である。

#### 火床穴遺構

SK3772・3779、SK3777付近と現本堂の周囲で検出した。残存状態は余り良好でなく、SK3777付近で検出したものは一部この土壌により壊されている。現本堂の建設時に伴うものであろう。

## 出土遺物

### SB3800A出土土器 (第5図・図版26 別表1)

#### 須恵器

蓋(1) 口縁部の小破片である。内面の体部と口縁部の境は不明瞭である。SB3800A基壇積土と裏込めとの境界から出土したものであるが、出土位置からみると基壇修復時の化粧石の裏込めに伴う可能性がよい。

杯(2) 体部と底部との境はあまり明瞭でない。底部内面はナデ調整する。また、内面には漆が付着している。基壇東北部の積土中から出土した。小片のため復元口径はやや不確実。

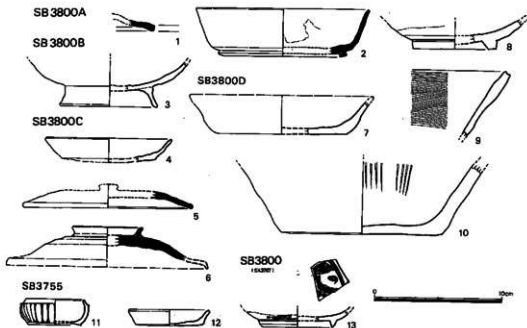
### SB3800C出土土器 (第5図・図版26 別表1)

#### 土師器

皿(4) 口径10.0cm、器高1.9cm。底部外面はヘラ切り未調整。底部内面はナデ調整する。

#### 須恵器

蓋(5・6) 5は口縁端部を丸く仕上げ、内面にはわずかに沈線状の段をもつ。天井部内面はナデ調整。小片のため復元した口径にはやや不安が残る。6は環状の撮をもつもので口縁部は欠失する。天井部は回転ヘラ削り調整。内面は粗くナデ調整する。撮は外傾し、端部は横に摘みだす。胎土には黒色粒子を多く含む。4～6はSB3800基壇化粧石列B・C間より出土。



第5図 SB3800A・B・C・D、SB3755出土土器・陶磁器実測図

**SB3800D出土土器 (第5図・図版26)**

講堂背面の基壇化粧石列の裏込から出土したものである。

**土師器**

杯(7) 口縁部は欠失する。糸切り。底部内面はナデ調整し、板状圧痕を伴なう。

**中国陶磁器**

**青磁**

碗(8) 淡茶白色のやや粗い胎に黄味の強い淡緑色の釉を施す。全面に細かい貫入がみられる。外面下半は露胎となる。

**瓦質土器**

鉢(9・10) 9の内面は横方向の刷毛目調整、外面には不明瞭ではあるがタテ方向の刷毛目調整が施されている。胎土は明灰色で硬質。10は体部と底部の内面に4本単位の筋目を入れる。底部内面は使用のため摩滅している。外面は暗灰色、内面は淡茶灰色を呈する。

**SB3755出土土器 (第5図・図版26 別表1)**

SB3800Cに伴う足場穴から出土したものである。

**中国陶磁器**

**白磁**

合子(11) 合子の身で型造りによる連弁文を配したものである。濁白色の胎にやや青味をおびた白色の釉を施す。口縁部と底部は露胎となる。

**土師器**

皿(12) 口径6.4cm、底径5.3cm、器高1.3cm。糸切り。

**SB3800礎石抜き穴出土土器**

**染付**

皿(13) 高台部の破片である。見込みに二本の界線を巡らせ、その内側に文様を描く。また高台部外面にも二本の界線が巡る。明代。

**SD3715出土土器 (第6図・図版26 別表1)**

溝の埋土を上層(茶褐色土)と下層(灰褐色砂層)にわけて取り上げたので、ここでは上層・下層にわけて報告する。

**上層出土土器**

**土師器**

杯(2・3) 口径12.2~12.6cm、底径6.6~8.2cm。2の体部は直線的に立ち上がる。3は内彎気味に立ち上がり、口縁端部は丸く肥厚する。底部はともにへら切り未調整。

甕(4) 復元口径27.6cm。口縁部内面は横方向の、体部外面は縦方向の刷毛目調整。体部内面はへら削り調整する。



塩壺(5～7) いずれも胴部の破片である。内面には布目が、外面には指頭圧痕が明瞭に残る。色調は赤褐色。

#### 下層出土土器

##### 土師器

杯(8・9) 8は復元口径12.4cm、器高3.4cm。9は口径15.3cm、器高3.8cm。8・9とも底部内面をナデ調整し、底部外面はヘラ切り未調整。

皿(10) 復元口径16.6cm、器高1.9cm。底部はヘラ切り未調整。

##### 黒色土器A

鉢(11) 小片のため傾きは確実ではないが鉢形になるものと思われる。内面のみ黒色に焼し、内外面とも横方向にみがきを施す。外面下半は回転ヘラ削り調整を行なう。

##### 須恵器

杯(1・12) ともに底部はヘラ切り離しのままである。12の底部内面はナデ調整し、底部外面・高台畳付には板状圧痕が残る。

SD3725出土土器(第6図・図版26)

##### 土師器

碗(13) 体部は外上方に直線的にのび、高台は高い。体部下位は回転ヘラ削り調整し、体部の内外面は回転ヘラミガキ調整する。

##### 須恵器

杯(14・15) 無高台の14と有高台の15がある。14の底部はヘラ切り未調整で底部内面はナデる。15の口縁部はやや外反し、底部には断面四角形の高台を貼付する。

鉢(16) 鉄鉢形の口縁部の破片である。内面はナデ調整し、口縁部外面はヨコナデ、胴部外面は回転ヘラ削り調整する。

SD3787出土土器(第6図・図版26 別表1)

##### 土師器

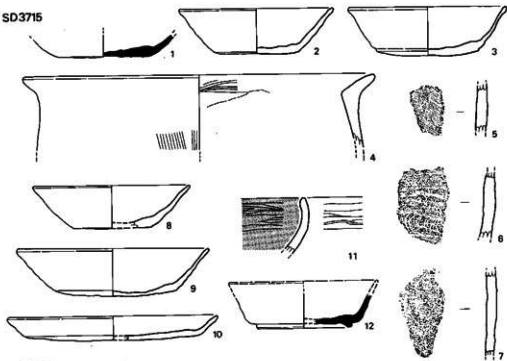
皿a(17・18) 口径7.6・8.1cm、底径5.0・6.4cm、器高1.6・1.3cm。ともに糸切りで底部内面はナデ調整、板状圧痕を伴う。

SK3759出土陶磁器(第6図)

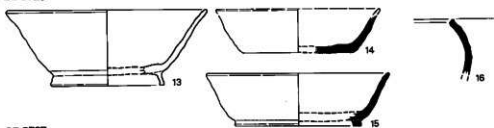
##### 染付

皿(19) 純白の胎にやや青みをおびた釉をかける口禿の皿である。口縁の内外面と内面見込みに界線をまわす。肥前系。16世紀後半代。

SD3715



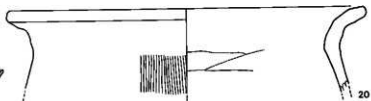
SD3725



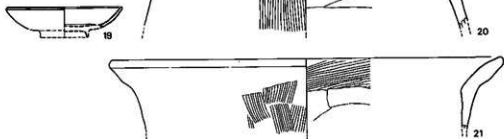
SD3787



SK3792



SK3759



第6图 SD3715·3725·3787、SK3759·3792出土土器实测图

SK3792出土土器 (第6図)

土師器

甕 (20・21) 胴部が張る20と張らない21がある。ともに体部外面は縦方向の刷毛目調整、体部内面はへら削り調整を行う。21の口縁部内面は横方向の刷毛目調整。器壁が薄い。

SK3770出土土器 (第7図・図版27 別表1)

土師器

杯 (1~6) 1は口径10.4cm、器高2.7cm、2~6は口径12.5~13.8cm、器高3.0~3.7cm。3は体部が外反しながら開く。2~5の底部外面はへら切り未調整で、底部内面はナデ調整。6は体部下半から底部にかけて回転へら削り調整する。すべて油煙が付着する。

1・3・4・6は茶褐色、2は暗黄褐色、5は淡黄灰色を呈する。

皿 (7~9) 口径14.4~16.6cm、器高1.4~1.8cm。7は口縁部が外反する。底部はへら切り未調整。内面を磨く。8は体部内外面を回転へらミガキ、底部内面にミガキを施す。体部下半から底部にかけては回転へら削り調整を行う。7は暗黄褐色、8・9は茶褐色を呈する。

碗 (10) 体部は直線的に上外方にひらき、体部と底部の境に高台を貼付する。底部内面はナデ調整。色調は黄褐色を呈する。

甕 (12・13) ともに胴部があまり張らないものである。口縁部は比較的薄手である。体部外面は縦方向の刷毛目調整、内面はへら削り調整する。

図化できなかったもののなかに、土師器の杯 (あるいは皿か) と燹破片に墨書されたものが出土しているが判読はできない (a・b)。

須恵器

杯 (11) 有高台杯の底部の破片である。底部外面には「佛」とへら描きされている。

SK3775出土土器 (第8図・図版28 別表1)

土師器

皿a (7~15) 口径7.6~8.4cm、底径5.5~7.2cm、器高1.1~1.3cm。すべて糸切り。

皿b (1~6) 口径6.2~7.0cm、底径4.0~5.2cm、器高1.3~1.7cm。全て糸切り。

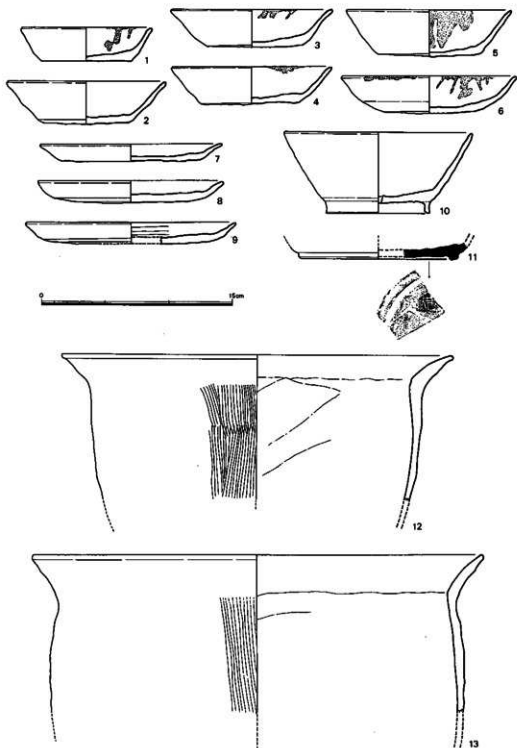
杯a (16~27) 口径11.6~12.6cm、底径7.0~9.4cm、器高2.6~3.0cm。体部の開きが比較的大きい。すべて糸切りで底部内面はナデ調整。20・24・25以外は板状圧痕を伴う。27は口径15.0cm、底径8.2cm、器高3.6cm。他に比べ法量が大い。

SK3777出土土器 (第8図・図版29 別表1)

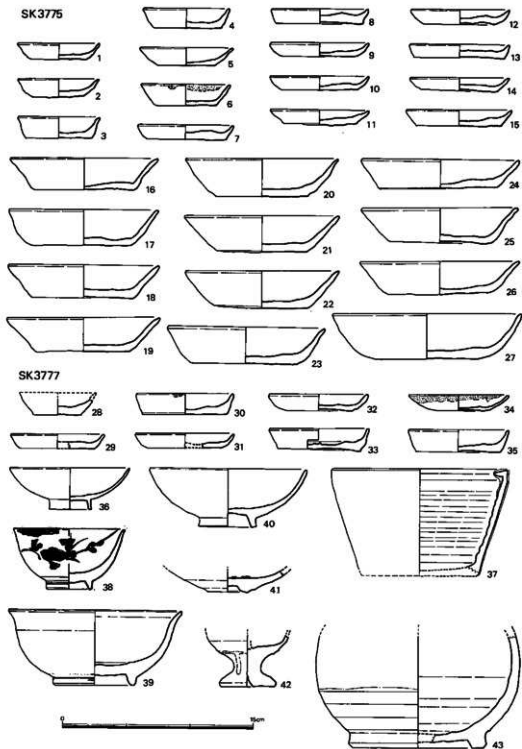
土師器

皿a (29~35) 口径7.4~8.0cm、底径3.7~6.7cm、器高1.2~1.8cm。すべて糸切り。30・32・34には油煙が付着し、とくに32は付着が著しい。

皿b (28) 口縁部を欠く。底径3.9cm。糸切り。



第7图 SK3770出土土器实测图



第8图 SK3775·3777出土土器·陶磁器实测图

## 日本陶磁器

### 白磁

皿 (36) 純白の胎にわずかに黄色味のある白色釉を施す。器壁は薄い。高台畳付は露胎となる。ここでは皿としたが碗蓋の可能性もある。肥前系。18世紀前半～中頃。

### 青磁

香爐 (37) 直線的な体部はやや開き気味で、口縁部は内側に折れ曲がり、口縁部は平坦になる。外面と口縁部内面には厚い釉がかけられる。内面の露胎部分は淡茶色に発色している。肥前系。17世紀後半～18世紀代。

### 染付

碗 (38) 淡赤茶色の胎に乳白色と赤褐色の釉を施す。染付はやや青みのある薄墨色で、外面に梅花文が描かれ、高台外面に二本の界線が描かれている。肥前系。18世紀中頃～末。

### 陶胎染付

碗 (39) 体部は丸みをもって立ち上がり、口縁部は外反する。茶褐色の粗い胎に灰白色の釉を薄めにかけている。見込みは輪状に掻き取り、高台畳付も露胎となる。陶器と磁器の中間的なものである。18世紀後半～19世紀前半。

### 陶器

皿 (40・41) 40は京焼風陶器。淡茶色の胎にやや黄味のある淡茶色の薄い釉を施す。見込み部分は釉を輪状に掻き取っており露胎となる。体部内面には染付がある。肥前系。18世紀前半～中頃。41は淡茶灰色の胎土に緑灰色の釉を施す。外面の体部下半以下は露胎となる。見込みと高台畳付には砂目が残る。唐津系。17世紀前半代。

獨台 (42) 芯受は欠失する。淡茶色の胎に黒褐色の釉を施し、脚台部は露胎となる。底部は糸切り。17～18世紀代。

壺 (43) 球形の体部に高台が付くものである。外面には黒褐釉をかける。唐津系。18世紀代。なお、調査時にはSK3777の上面を瓦が覆っており、切り合い関係は確認出来なかった。そのため出土物は一括して取り上げたが、その後、平面プラン・出土物の検討により二つの土壌が重複しており、北側のもの(A)が南側のもの(B)に切られていた可能性がある。32・34・36・38～40・42はBから、その他はAから出土した。

### SK3781出土土器 (第9図・図版31 別表1)

#### 土師器

皿a (1～4) 口径7.2～8.0cm、底径5.8～6.8cm、器高1.2cm。すべて糸切り。底部内面はナデ調整で板状圧痕を伴う。

杯a (5～9) 口径12.4～13.4cm、底径7.1～9.4cm、器高2.7～2.9cm。すべて糸切り。底部内面はナデ調整で9以外は板状圧痕を伴う。

杯b (10) 口径に比べ底径が小さくなるものである。口径13.4cm、底径6.6cm、器高3.6cm。  
底部内面はナデ調整する。

SX3771出土土器 (第9図・図版31 別表1)

土師器

皿 (11~15) 口径5.9~7.2cm、底径3.5~5.4cm、器高0.9~1.6cm。15のみ底部内面をナデ調整する。

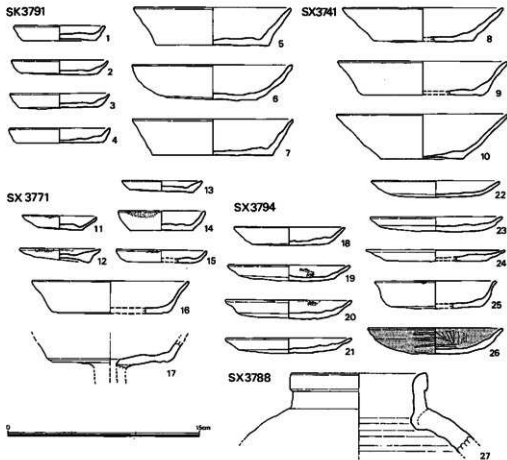
杯a (16) 口径12.4cm、底径8.2cm、器高2.6cm。底部内面はナデ調整し板状圧痕を伴う。

器台 (17) 杯部と脚部が同じ形になるものと考えられる。杯部の下半のみ残存する。

SX3794出土土器 (第9図・図版31 別表1)

土師器

皿 (18~25) 口径8.8~11.0cm、器高0.9~1.5cm。底部外面はすべてヘラ切り未調整。21・



第9図 SK3791、SX3741・3771・3788・3794出土土器・陶器実測図

23の底部内面はナデ調整する。24は器高が低く口縁部が大きくひろく。19・20には油煙が付着する。25は深い皿で体部は外反気味に立ち上がる。口縁端部は丸くなる。油煙が付着している。

#### 黒色土器B

皿(26) 口径10.6cm、器高2.1cm。内外面ともミガキを加えており、内面は外面に比べて密にみかく。黒灰色を呈する。

#### SX3788出土土器(第9図・図版31 別表1)

#### 陶器

壺(27) 壺の口縁部から肩部にかけての破片である。丸みをもった肩に直口する口縁がつく。内面にはロクロ目が顕著である。色調は赤褐色で肩部には黒茶色の釉がかかる。備前系。

#### その他の遺構出土土器(第10図・図版30)

#### 中国陶磁器

#### 白磁

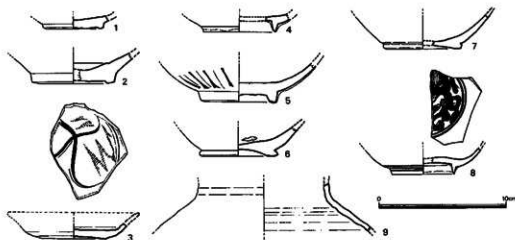
小椀(1) やや灰色味のある濁白色の胎に灰白色の釉を施す。礎石抜き穴より出土。

椀(2) V型の底部破片である。濁白色の胎に灰白色の釉を施す。講堂後背部のビツから出土した。

#### 青磁

皿(3) 淡灰色の胎に透明度のある灰緑色釉を施す。見込みにはへらと櫛状工具で施文している。同安窯系。

椀(4-7) 4は赤茶色の胎に淡緑色の釉を施す。釉は厚い。5は淡灰色の胎土に厚めのガラス質の釉を施す。底部外面には焼き台の跡が残る。4・5ともに龍泉窯系。6・7は越州



第10図 その他の遺構、層位出土土器・陶磁器実測図



窠系で、底部が円盤状になるものである。6は黒色粒子を含む淡灰色の胎土で内面は黄味の強い淡緑色、外面は暗茶色味の強い釉を施す。見込みには目跡が残る。7は暗灰色の胎に黄味の強い淡緑色の釉を施す。6は黒色土層、7は暗黄褐色土層から出土した。

#### 朝鮮製無釉陶器

壺(9) 壺の頸部破片である。内外面ともヨコナデ調整し、特に内面のロクロ目は著しい。器壁は3~6mmとひじょうに薄い。胎土は精良で白色粒子をわずかに含んでいる。色調は器表が暗灰色を、器内は赤茶色を呈する。外面には自然釉がかかる。

#### 染付

皿(8) いわゆる饅頭心型の底部をもつもので、内面見込みには二重の界線の中に蛟龍文を描く。胎土は白色で精選されており、やや青みを帯びた釉を施す。高台壘付は露胎となる。16世紀後半代。

#### 層位出土土器

##### 講堂前面部

SB3800Aの前面を覆う堆積土の下層を茶褐色砂層、上層を第Ⅳ層黒色土としてとりあげたものである。第Ⅳ層黒色土は階段部を覆っており、これは第Ⅱ期講堂に伴う整地層と考えられる。またこの層には炭化物を多く含んでいた。

#### 茶褐色砂層出土土器(第11図・図版32 別表1)

##### 須恵器

蓋(1) 天井部は低く、外面には回転ヘラ削り調整を施す。硯に転用されており、天井部内面は平滑になる。胎土は精良。

##### 土師器

丸底の杯(2) 深めの丸底の杯で口縁はやや外反する。底部はヘラ切り離し。内外面ともみかいている。胎土は精良で、色調は淡黄褐色を呈する。

杯(3) 底部のみ残存する。底部はヘラ切り未調整。

椀(4) 高台貼付部から直線的にのびる体部をもつ。底部内面はナデ調整。

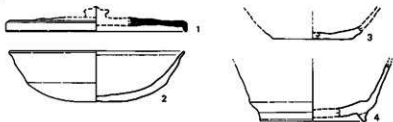
#### 第Ⅳ層黒色土層(第Ⅱ期整地層)出土土器(第11図・図版32 別表1)

##### 土師器

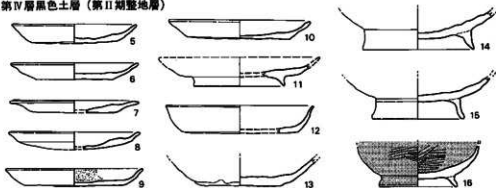
皿a(5~10) 口径9.8~11.2cm、器高1.3~1.5cm。すべてヘラ切り未調整で、5・7以外は底部内面をナデ調整する。8には板状圧痕を伴う。8・9には油煙が付着する。7は口縁内端部に沈線をもつ。

杯(12・13) 12は口径11.7cm、器高2.2cm。底部はヘラ切りで底部内面はナデ調整。あるいは皿に入れるべきかも知れない。13は底径が小さく、体部は内彎しながら立ち上がる。その他に杯の底部破片で底部外面の中央部寄りに墨書がみられるものがあるが、判読できない。

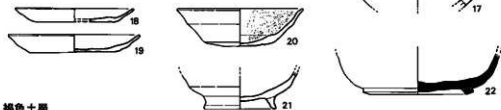
(講堂前面部)  
茶褐色砂層



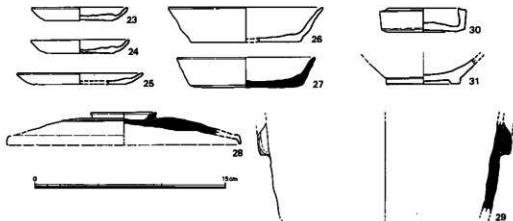
第IV層黑色土層 (第II期整地層)



(講堂後背部)  
瓦整地層



褐色土層



第11圖 茶褐色砂層・IV層黑色土層・瓦整地層・褐色土層出土土器・陶磁器実測図

碗 (14・15) 14は体部内外面ともヨコナデ、内面には油煙が付着する。15の体部は内外面ともみがく。

#### 黒色土器Ⅱ

碗 (16) 内外面とも黒色に焼した小型の碗で体部は丸みを帯び、ハの字に開く高台がつく。底部はへら切り未調整で板状圧痕を伴う。内外面とも粗いミガキを施す。

#### 中国陶磁器

##### 青磁

碗 (17) 淡茶灰色の胎土に光沢のある茶味をつよい緑色釉を施す。口縁部は内に屈曲し、内面に稜をもつ。越州窯系。

#### 講堂後背部

#### 瓦葺地層出土土器 (第11図・図版32 別表1)

##### 土師器

皿a (18・19) 口径10.4・9.4cm、底径7.0・6.0cm、器高1.1・1.4cm。ともにへら切り未調整で、底部内面はナデ調整。19には板状圧痕を伴う。

杯 (20) 小型の杯で体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は外反する。底部外面には板状圧痕が残る。内面には油煙が付着する。

小碗 (21) 口縁部を欠く。底径5.7cm。

##### 須恵器

杯 (22) 体部と底部との境が不明瞭である。高台畳付は斜めになる。

#### 褐色土層出土土器 (第11図・図版32 別表1)

##### 土師器

皿a (23~25) 口径7.6~10.0cm、底径5.2~7.1cm、器高0.9~1.1cm。24・25は糸切りで底部内面はナデ調整、板状圧痕を伴う。油煙が付着する。

杯 (26) 口径12.2cm、底径8.8cm、器高2.8cm。糸切り。底部内面はナデ、板状圧痕を伴う。

##### 須恵器

杯 (27) 底部はへら切り。底部内面はナデ調整。

蓋 (28) 環状の縁をもつもので口縁部は欠く。天井部外面は回転へら削り、天井部内面はナデ調整する。

鉢 (29) 鉢の胴部破片でタテ長の把手をもつ。把手以下は回転へら削り、それ以上はナデ調整する。内面はヨコナデ調整。

## 中国陶磁器

### 白磁

合子 (30) 合子の身。胎土は黒色粒子を含む白色である。底部と口縁部は露胎となる。底部外面には墨痕が残るが判読できない。

### 青磁

碗 (31) 淡茶色の胎にやや黄味のある茶色釉が施される。高台登付は露胎。越州窯系。

暗褐色土層出土土器 (第12図・図版33 別表1)

### 土師器

皿a (3~10) 3~5は糸切り。口径7.6~7.8cm、底径5.6~6.2cm、器高1.0~1.1cm。6~10はヘラ切りで、6以外は底部内面をナデ調整、8・9・10には板状圧痕を伴う。

皿b (1・2) 口径6.9・7.5cm、底径4.2・4.8cm、器高1.5・2.8cm。ともに糸切り。1には油煙が付着する。

九底の杯 (13) 口径14.9cm、器高3.4cm。内外面とも丁寧なミガキを施す。

杯 (11・12) 口径11.4・12.6cm、底径7.2・8.4cm、器高2.9・2.7cm。ともに糸切り。底部内面はナデ調整。板状圧痕を伴う。

### 土師質土器

釜 (14) 口縁部~肩部にかけての破片である。内外面とも刷毛目調整を行う。

### 瓦質土器

壺 (15) 球形の胴部にやや内傾する口縁がつくものである。口縁部と胴部外面はヨコナデ調整し、胴部内面には指頭圧痕が残る。胎土は灰白色で精良。

### 陶器

甕 (16) 口径44cmほどに復元できる。口縁は外方に折曲げ、さらに端部を上方につまみあげている。外面から口縁部内面にかけてヨコナデ調整し、内面はナデ調整する。内面の頸部と肩部の境には粘土帯の接合のための指頭圧痕が残る。色調は橙灰色を呈する。常滑産。

黄褐色土層出土土器 (第12図・図版33 別表1)

講堂後面の基壇化粧石列を覆うものである。

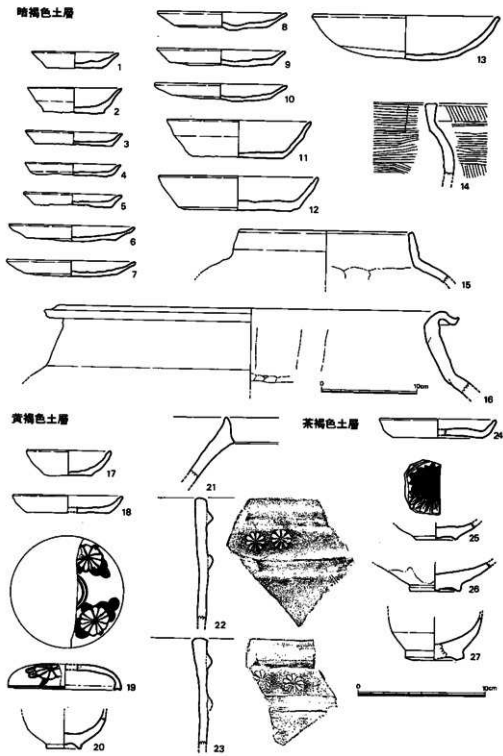
### 土師器

皿a (18) 口径8.6cm、底径6.6cm、器高1.4cm。糸切り。

皿b (17) 口径6.7cm、底径3.8cm、器高2.0cm。糸切り。

### 染付

合子 (19) 身受けのかえりをもつ合子蓋。外面には灰色味のある藍色の呉須で菊花文を描く。胎土は灰白色で、やや青味を帯びた釉をほぼ全面にかけるが、かえりが身と接する部分は露胎となり砂目が残る。肥前系。18世紀中頃~19世紀初頭。



第12圖 暗褐色土層・黄褐色土層・茶褐色土層出土土器・陶磁器實測圖

## 陶器

碗 (20) 暗赤茶褐色の胎に暗灰緑色の釉を施す。外面の体部下半は露胎となる。唐津系。17世紀前半代。

鉢 (21) 口縁部の小片である。内面には筋目が入るが単位は不明。色調は暗赤茶褐色。備前産。

## 瓦質土器

鉢 (22・23) ともに断面三角形の二条の貼付突帯の間に菊花文のスタンプを二個一組で押印する。

茶褐色土層出土土器 (第12図・図版33 別表1)

## 土師器

皿a (24) 口径9.2cm、底径7.2cm、器高1.5cm。糸切り。

## 染付

皿 (25) 濁白色の胎にやや青味を帯びた釉を施す。高台畳付は露胎となる。見込みには菊花の重ね文様を描く。肥前系。17世紀中頃。

## 陶器

皿 (26) 淡茶色の胎にわずかに黄味のある淡茶色の釉を施す。底部の内・外面には砂目が残る。唐津系。17世紀前半～中頃。

碗 (27) 茶褐色の粗い胎に灰白色の釉を施す。高台から底部にかけては露胎となる。唐津系。17世紀前半～中頃。

## 瓦類

軒丸瓦・軒平瓦・鬼瓦・埴・丸瓦・平瓦など大宰府史跡の発掘調査が始って以来、最大量の瓦の出土があった。土納袋で1000袋を越えている。基壇上に掘り込まれた土壌・基壇前面の拡張基壇周囲・整地土層などからの出土であるが、現在の講堂に葺かれている瓦と同形の軒瓦片もこのなかに含まれている。

整理作業にあたっては発掘現場で軒丸瓦・軒平瓦・道具瓦・完形に近い状況に接合出来そうな丸・平瓦や丸・平瓦の小破片でも文字や記号がへう描きされたり、押されているものをすべて選別して取り出した。整理箱にして100ケースも越える量である。丸・平瓦については、長さや幅の計測が可能な資料を中心に丸瓦で70点余、平瓦で50点余を計測・観察した。

発掘調査によって出土した丸・平瓦の多くは近世以降のものと考えられたが、かつて金堂か講堂に葺かれていた丸・平瓦が現金堂の裏に積まれていた。このなかには、刻印の押されたものもあり、質的にも出土資料を補うものと考えられたので、観世音寺から丸瓦69点・平瓦76点を借用し計測・観察を合せて行った。

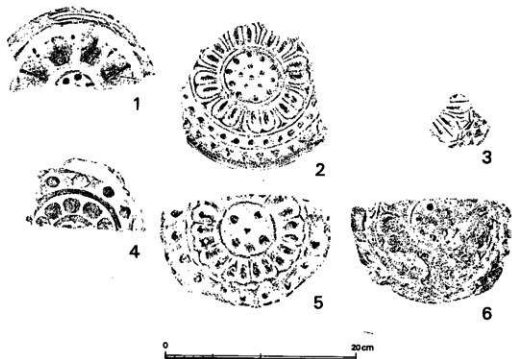
### 軒丸瓦 (第13~19図・図版34~41)

軒丸瓦は396点出土している。396点のうち80パーセント以上が巴文の軒丸瓦である。従って、巴文の分析が重要な課題となるが十分な分析は行い得ていない。

第13図は、奈良・平安時代の軒丸瓦である。第13図に含めた軒丸瓦は全部で6種26点(全体の6.5パーセント)である。このうち、2の老司I式軒丸瓦は19点(全体の4.8パーセント)で最も多い出土点数である。5の軒丸瓦が2点あるほかは、各1点ずつ出土している。なお不明が1点ある。

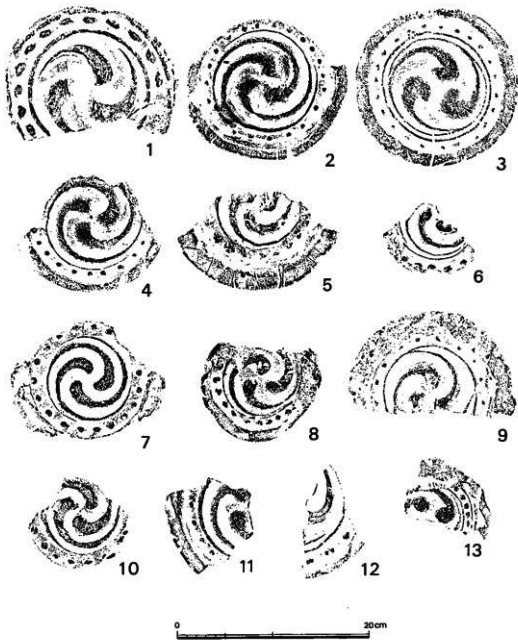
これらの瓦の出土状況は、後世の土壌や整地層に混入したと判断されるものであった。

第14図は、外区の素文縁の幅が1.5cm程までで、珠文が比較的小さく・数も20前後の左廻りの尾の長い巴文を集めた。傾向として第14図の軒丸瓦は内区巴文の部分が、瓦当面の3分の2に近いとも言える。1(第18図1・図版35-1)は、瓦当中央に釘穴が焼成後に穿たれている。宝蔵東側第45次調査・金光寺推定地に同范の出土例がある。それによると巴文は中央で連結している。丸瓦接合部で丸瓦の地肌が見えている部分があるが、第35図2の粗さの斜格子文が叩打



第13図 講堂跡・回廊跡出土軒丸瓦拓影1

されている。2は小さな珠文21が廻らされている。巴は長く尾をひき円の半分をまわる。范に傷があり瓦当左下半巴の尾の部分に出ている。3(第18図2)は、珠文帯と内区巴文の間に界線

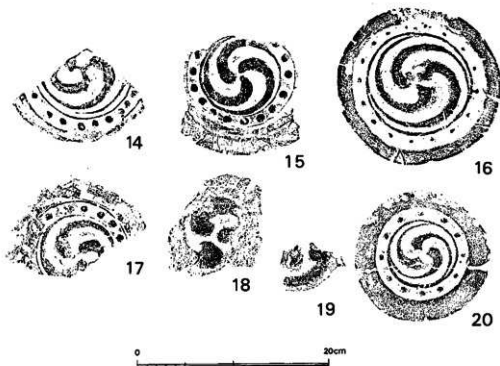


第14図 講堂跡・回廊跡出土軒丸瓦拓影 2



を配置している。巴文の頭は大きく尾は相互に連続し珠文帯との間に2重の界線を配置しているかのように見える。珠文数は23。4は巴文の中心に付点を配置している。珠文数は26前後で外側は狭く低い素文線となっている。瓦当面右側に木范の傷が認められる。5は外区素文線が1.5cm程と高い。珠文数17か18。巴文は比較的高く太い。6は小型の軒丸瓦で図中の10とは珠文帯との間に界線を配置すること、巴文の中心に付点を配置していることから区別出来る。珠文数は21前後。7は図示した拓本よりも巴文の頭は大きい。やや文様全体が扁平な感じがするが、整った瓦当面である。珠文数19。瓦当面上部珠文と素文線の間に木范の傷が認められる。8は瓦当上下の径が、左右の径に比較して狭い。珠文は比較的大きく密に配置されるが不揃いである。珠文数23前後。外区素文線の幅1.0cm程、高さ0.7cmと低い。9(第18図3)は、彫りの深い巴文で巴の頭の高さが1.1cm程ある。巴文の尾は珠文帯との界線に接している。外区素文線も高く広い。珠文は小さく粗い。珠文数16前後である。丸瓦表面に縄目を残し裏面には布目痕を残す。布目は0.1~0.2cmの太さの糸で横方向に縫われた痕が残っていて、後章の丸瓦M087(第30図)と共通している。10は7を小型にした感じの軒丸瓦である。珠文数20前後。11は外区素文線の高さや幅・巴文の長さ・彫の深さなど2に近似するか珠文の配置のしかたが粗い。12は瓦当の全体を知ることは出来ないが、巴文の頂上部に稜線が出てくる。13は小型瓦で珠文帯の内外に界線が廻っている。巴文の頭は丸く、珠文の配置は密である。丸瓦部を若干残しているが、凹面の布目には9と同様横方向に縫われた痕がある。

第15図は右廻りの巴文軒丸瓦である。20の軒丸瓦を例外として1~13の巴文軒丸瓦の特徴と共通している。14は巴の頭が中央で連結し、珠文帯との間に界線が配置される。珠文数17前後。狭く低い素文帯が廻っている。15は巴文の頭がほとんど接している。尾は長く廻り、珠文帯との間に界線を作っているかのようなようである。珠文は扁平であるが比較的大きく珠文数18前後である。珠文帯と素文線の間に界線がある。素文線は高い。16(第18図4)は、完形の出土例である。彫の深い瓦当で素文線も高い。巴の尾は珠文帯との間に配置された界線に接して終る。珠文数17。大宰府崇福寺出土例と同范である。丸瓦部外側はすり消されながらも縄目の痕を残している。内側の布目痕は明瞭ではないが、9と13に共通する横に縫われた痕を認める。17は珠文帯と素文線の間に界線を配置している。珠文の大きさなど15に近いが彫りは深い。16とは珠文が大きいこと密なことなどで区別される。珠文数17前後。僅かに残った丸瓦凹面には9・13・16と共通の布目痕に縫われた痕がある。18は19について巴の頭が大きく幅広である。焼き上りも、19がかたく焼き上っているのに対し18がわるい。1~19まで点数は100点余りで全体の26パーセント程である。1~19までの軒丸瓦には、素文線が低く比較的幅が狭いものと、素文線が高くやや幅の広いものとの2通りがある。確か得ていないが瓦当の木范が瓦当面全体の大きさのものと、珠文帯の外側までのものとの差異があるのかもしれない。20は彫りが浅く扁平な瓦当で素文線の幅も広い。珠文数12。福岡城御鷹屋敷出土例に類似品がある。

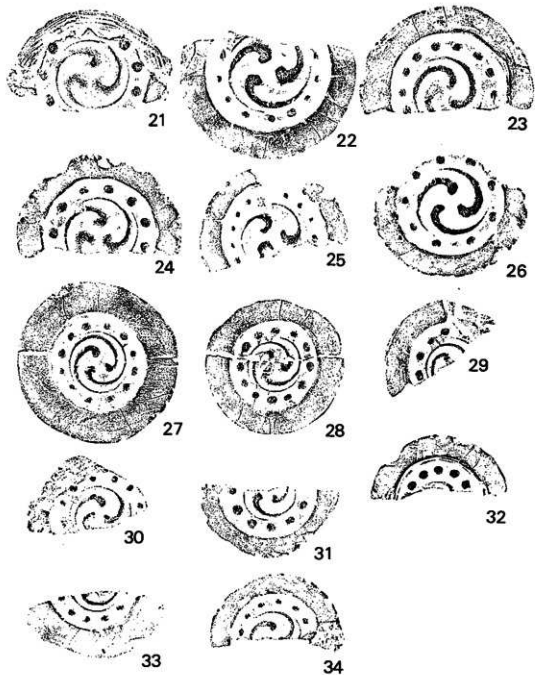


第15図 講堂跡・回廊跡出土軒丸瓦拓影3

第16図は1～19までの軒瓦に比較し、巴文の大きさがやや小さくなり尾の長さも短くなる。さらに珠文数も11～13前後と少なくなるがその分やや大きめとなる。もう一つの特徴は素文帯の幅が2.0cmを越すのが普通である。文様は全体に浅い彫りとなる。

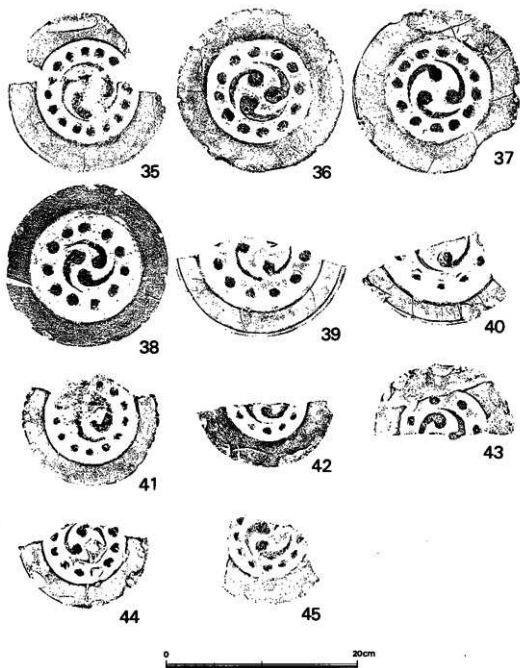
21は巴文の尾が長くおよそ半周している。尾の部分には稜線ができています。珠文数は11前後。

丸瓦の先端は粗い節状の工具痕が残る。22は21に比べて巴の頭が大きく珠文がやや小さい。巴文の上面は素文縁の高さに近い。珠文数13。福岡城御鷹屋敷に類品が出土している。23は21・22に比較して細い巴が配置されている。彫りも0.3cmと最も浅い例である。素文縁の幅も整っていない。珠文数13。丸瓦外側は縦方向のなでつけのち瓦当側面を横ナデしている。内側には粗い布目が残る。24は全体の感じが最も21に近いが、珠文の配置された位置に相違が認められる。珠文数13。25は巴の先端が内側に曲り尖った感じを受ける。巴は頭から尾にかけて急に細くなり半周して終る。珠文数15。福岡城御鷹屋敷に類品の出土例がある。26は巴の頭の中央部分がかかり広く空いて尾の長さもやや短い。珠文数9。27は素文縁の幅が3.5cmと幅広い。巴は頭が小さく尾は半周ほど周って終る。木范の傷が珠文と素文縁の間、巴の尾と珠文の間に認められるものがある。珠文数12。灰黒色に焼き上ったものが多い。28は文様構成のうえで27と巴・珠文の配置まで類似し同じような位置に木范の傷が認められる。27よりも傷は進んでいるの



0 20cm

第16圖 講堂跡・回廊跡出土軒瓦拓影 4



第17图 圆堂跡・圓廊跡出土軒瓦拓影 5

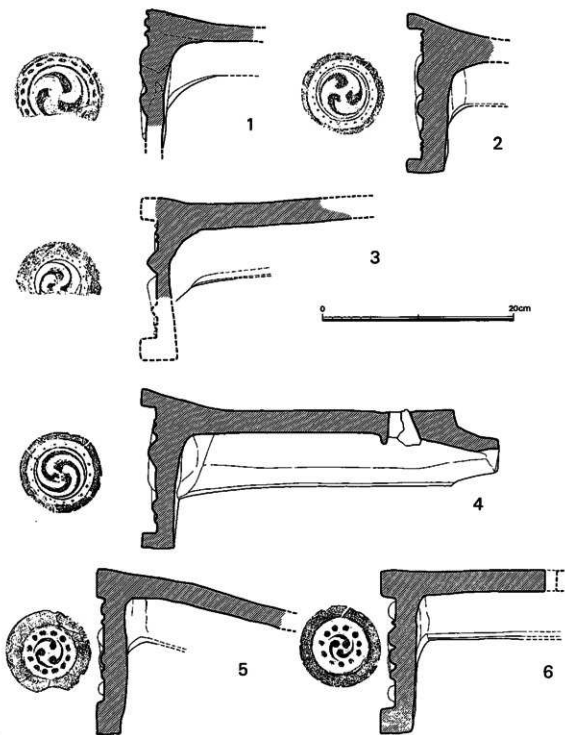
で同じ范型を使用した新旧の関係かとも考えたが素文縁を除く珠文帯までの径の長さが約1.0cmほど小さい。従って別の范が用いられたと考えた。珠文数12。灰白色に焼き上がったものが多い。29は28と同范の軒丸瓦である。28の范の傷が進行した状況が窺える。数は少ないが灰黒色に焼き上がっている。30はやや小型の軒丸瓦である。珠文はやや小さめで間隔もそろっていない。珠文数は12前後。31も小型軒丸瓦で大きめの珠文が配置されているが巴は細く小さい。珠文数11。32は31よりも珠文帯までの径が約1.0cm短い。巴文の形状は窺えないが、素文縁内側に范のあたりと思われるものが段状に残る。珠文数13。33は瓦当の断面が皿状である。珠文帯が素文縁に近づくにつれて高くなり素文縁につながる特徴を持っている。珠文数11前後。34は珠文帯までの面径は32とほぼ同じであるが、珠文の大きさの点で31・32と相違があり、30と比較すると珠文の間隔が短い。珠文数は12前後。31・32の表面には少量の雲母が認められる。20～34は合計で130点余出土し、全体の34パーセント程を占めている。軒丸瓦中で最も多い。

第17図、巴文の大きさが瓦当面径のほぼ3分の1と小さく、頭は丸く尾も短い。珠文は巴の頭の大きさに近くなって来る。ほとんどの軒丸瓦が黒く燻され光沢を持つものもある。丸瓦は瓦当の中位より上部に取りつけられるのも特徴と言えよう。

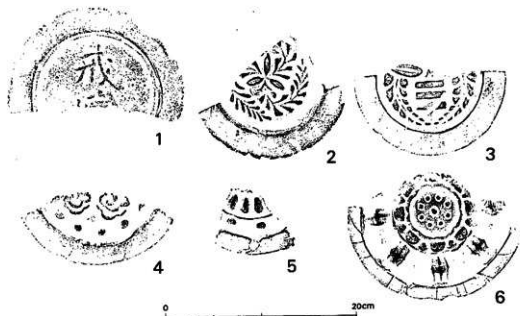
35は珠文数16。36は37に近似するが、巴の頭が扁平なこと、珠文の間隔に相違があることから別の范と判断した。珠文数12。37（第18図5）は、巴文・珠文とも丸味を持っている。珠文数12。丸瓦は瓦当の中央より上にとりつけられている。38（第18図6）は珠文数11。丸瓦が瓦当中位より上にとりつく。39は珠文数11。38の巴の頭が接近しているのに対し、39では1.0cm以上の広さがある。40も珠文数は11であるが巴・珠文ともやや大きく珠文の位置にも相違がある。41は小型軒丸瓦で珠文数12。42も小型軒丸瓦であるが、41に比較して巴がかなり大きく珠文数も多くなるものと推定される。43は珠文数7前後。44・45はともに珠文数12前後。両者は巴の大きさを区別できる。また、45は42と近似するが、42の珠文が1つ多くなるものと推定している。

35～45までの出土点数は100点弱で全体の24.5パーセントほどを占めている。

第19図1は「戒壇院」の文字が瓦当面に書かれている。2点出土。2は三つ藤巴で黒田家の家紋である。江戸時代の仮堂または現講堂に使用されたものであろう。9点が出土している。類例は福岡城御鷹屋敷で7種ほどが見られるが同范例は見極めにくい。3は下り廊の中央に易の八卦のうちの乾卦を配したものが1点出土している。4は雲文の軒丸瓦で軒平瓦にも雲文があることから少なくとも生産段階ではセットであったものであろう。2点出土。5は中房に1+5の珠文が配置された蓮華文風の瓦当で、外区は珠文帯である。現講堂に同范瓦が葺かれている。2点出土。6は昭和34年の宝蔵の新営時に彫刻家富永朝堂氏がデザインされた転宝輪で、現金堂の南側に葺かれており、「親世音寺」銘の入った軒平瓦とセットとなっている。また、平瓦にも宝蔵新営時の瓦であることを記した瓦片が出土している。



第18图 講堂跡・回廊跡出土軒瓦瓦実測図



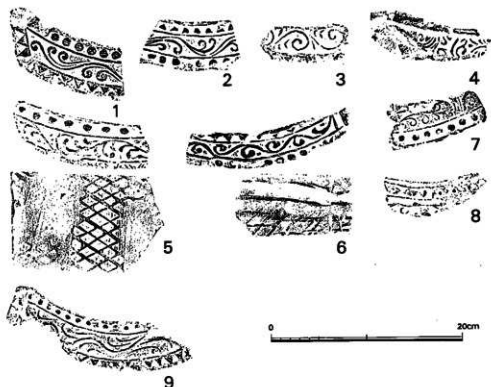
第19図 講堂跡・回廊跡出土軒丸瓦拓影6

軒平瓦 (第20~24図、図版42~46)

軒平瓦は331点出土している。軒丸瓦に比較して瓦当文様によって分類は行いやすい。ただ、軒丸瓦・軒平瓦の組合せ関係が今後の問題として残る。

第20図は奈良・平安時代の軒平瓦である。第20図の軒平瓦全体で26点(8パーセント)である。

1(第23図1)は老司I式軒平瓦で12点(3.6パーセント)出土している。第13図2の老司I式軒丸瓦と創建期セットとされている。第20図中9種の軒平瓦では最も多い出土量である。断面図に見るように短い段頸に作られている。2は偏行唐草文の流れの方向、鋸歯文が上帯に上を向いて配置され下帯が珠文であることなど老司I式の瓦当文様が逆に配置されている。頸は1よりもやや長いが、平瓦との接合部ではやや丸くなっている。3は鴻臚館II式軒平瓦である。本例は上帯が製作時からすでにない。段頸で1に近い。4は細かく複雑な唐草文を瓦当面に配置している。第20図中では7.0cmと最も長い段頸で平瓦部へ移行の形状も1に近い。5(第23図2)は安楽寺創建期の軒平瓦である。断面に見るようにややくずれた段頸となっている。また、瓦当側面も丸く作られている。平瓦部分には斜格子の叩打痕を残している。6は観世音寺では比較的出土量の多い瓦当である。5に近い頸の形状で平瓦部分に5と異なる斜格子の叩打痕が残る。7は細い唐草文の瓦当である。他例から均整唐草文であることがわかっている。頸に網目の叩打痕が残っている。8は瓦当右端の破片である。唐草文の流れが7と逆になっている。



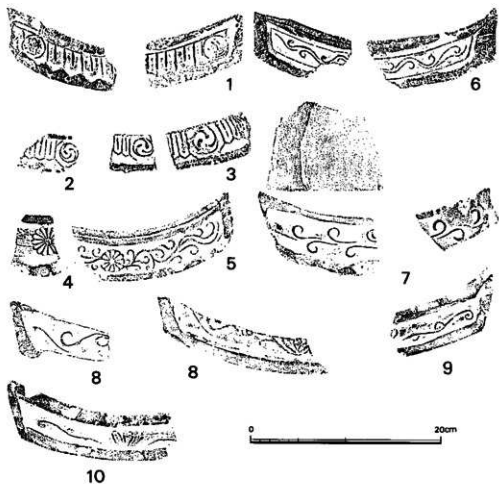
第20図 講堂跡・回廊跡出土軒平瓦拓影 1

9（第23図3）は右から左に偏行する唐草文が瓦当面に配置されているが上帯の珠文・下帯鋸歯文ともに細かい。断面は曲線顎となっている。2から9までの出土点数では6が4点と最も多く他はそれ以下である。

第21図は顎の形状が第23図4の形状に近く中心飾が宝珠文以外のものを集めた。

1は剣頭文軒平瓦である。瓦当文の左・中・右に円文を配置し円の中に左から「観世・音寺・瓦也」の左右逆の文字を入れている。同范例の平瓦部分には第35図2に近い斜格子痕を認めるものがある。第45・109・111次調査に同范例がある。2は3と同じ文様の軒平瓦であるが瓦当上部の素文縁部分を残している。3（第23図5）は瓦当が折り曲げ技法と呼ばれる整法で作られている。この点2は上帯が残っている。平瓦+瓦当の普通の製法によるのではないかと考えている。顎の長さが2.0cm程の段顎の瓦である。4は菊花文を中心飾とした軒平瓦である。文様全体はわからない。顎の断面形状は第23図4と10との中間的な感じである。5も中心飾に菊花文を配置した均整唐草文軒平瓦で范型の端部が上帯から脇区に残っている。第43・109・111次調査で同范例があり安楽寺に類品がある。6は彫りの深い均整唐草文であるが中心飾は不明である。范型の傷が界線と脇帯との間に認められ、范の端部が上帯に認められる。7（第23図4）





第21図 講堂跡・回廊跡出土軒平瓦拓影2

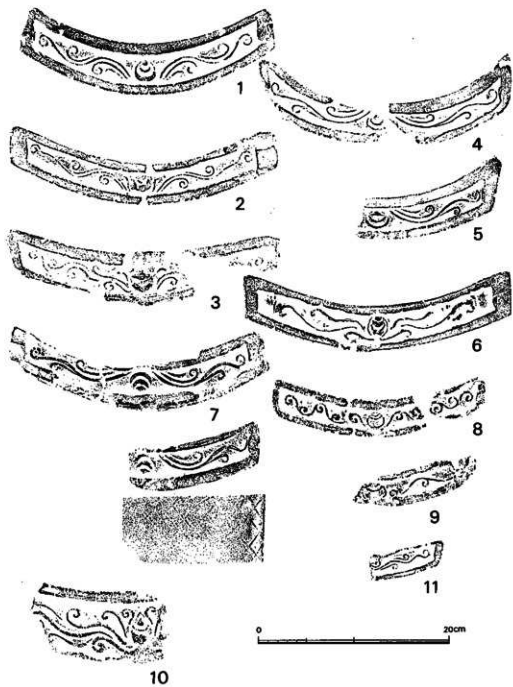
も均整唐草文の軒平瓦である。平瓦上面に布の端が認められる。8とした2点は同一の均整唐草文軒平瓦と思われる。9は10に近い均整唐草文であるが、10の中心飾が9の左端に見られる文様として瓦当文様を復原するとすまりの瓦当となること、9が10より文様の影りが深いことから10とは別の瓦当范が用いられたものと考えた。第21図中1・2・3・6・7の平瓦凹面には布目が残っている。第21図1～10は全体で23点（7パーセント）程で出土量は比較的小さい。各種別では1が4点出土しているのが最大の出土量である。

第22図は中心飾に宝珠を配置した均整唐草文の軒平瓦である。脇区は狭い。范型の痕跡と思われるアタリが上・下の素文線に見られるものがある。講堂跡・回廊跡の調査では出土量の最も多い一群で135点（40パーセント以上）出土している。平瓦部分は凹凸両面とも整形されたも

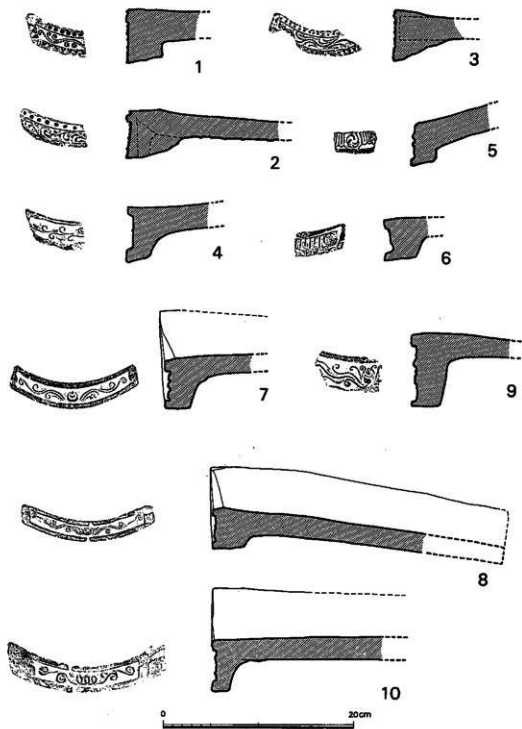
のが多く、叩打具の跡や布目痕を残している例はほとんどない。

1(第23図7)は3段に表現された宝珠文の脇から左右に唐草がのび3回反転する。最初2本あった子葉が反転して1本となり最後は主葉だけとなる。出土量も今回の調査では40点(12パーセント)と最も多い。大宰府崇福寺に同范例がある。2(第23図8)は1に比較し幅が狭くなる。中心飾の宝珠は1よりも盛りあがっている。主葉は3回反転するが、子葉は主葉の両側に配置され主葉の反転で子葉は1つとなり最後は主葉だけとなる。平瓦の部分凹面は板状の器具で縦方向に整形されている。多量の離れ砂が用いられているのが特徴である。21点(6.3パーセント)が出土している。3は高く盛りあがった宝珠の中央に二本横線が配置されている。唐草には主葉はないが4回反転の唐草文に見えるように子葉が配置されている。12点(3.6パーセント)が出土している。4は1の瓦当文様をもとになった変形であろう。主葉・子葉ともに上帯から始まっている。5は4と文様構成は同じであるが主葉・子葉の先端が丸まっているものがあること・上帯から流れる子葉の先端が4では接する感じであるのに対して5では離れている点相違している。4・5とも11点(3.3パーセント)ずつ出土している。6は高い宝珠文のまわりに界線がまわる。唐草文は左右に三本ずつのびるが、それぞれ独立した感じである。14点(4.2パーセント)出土している。類品が大宰府崇福寺・安楽寺・金光寺推定地で出土している。7は唐草文は5に近いが宝珠が逆さになっている。同范例の平瓦部分に斜格子の叩打痕が残るものがある。7点(2.1パーセント)出土。8はやや小型の軒平瓦である。線で表現された宝珠の上部に二本の線が入っている。唐草は左右に5回ずつ反転している。大房跡第43次調査と宝蔵東側第45次調査に同范例がある。13点(3.9パーセント)出土。9は中心飾の宝珠が8より大きくなるが唐草は省略された感じがする。10(第23図9)は瓦当幅の広い軒平瓦で中心飾の宝珠に界線や子葉状の飾りが加わる。同范完形品例では、唐草文は3本が宝珠の下から派生し、それぞれの間に子葉が1つずつ加えられている。4点(1.2パーセント)出土。11はさらに小型の軒平瓦である。9・11は1点出土。

第24図は、脇幅が広くなり1・20を除いて中心飾に植物文様が配置される軒平瓦である。頸部は第23図10のように幅の狭い頸となる。1は雲文で中央に大きな雲を配置しその左右に小さな雲を配置している。同范例の平瓦凹面に刻印のあるものがある。5点(1.5パーセント)出土。軒九瓦の雲文と生産段階まではセットであったろう。2は中心飾に三つ藤巴の中心の飾りに類似した3葉の植物文様が配置され、左右に唐草が配置されている。31点(9.3パーセント)出土し本図中では13に次いで多い。3は2の軒平瓦に似た唐草文を配置しているが、中心飾はわからない。4・5は瓦当の左端が1点ずつ出土している。6は半截の菊花状文が中心飾で2回反転する唐草文が左右に配置されている。2点出土。7は2・3と左右の唐草文が類似する。中心飾は3枚の花弁を縦ならべにしたものの様である。4点出土。8・9・10・11・12は各1点ずつの出土である。12を除き破片資料であり全体の形状は窺えない。なお、9の平瓦凹面に



第22图 晋堂跡・回廊跡出土軒平瓦拓影 3



第23圖 銅壺跡・圓形跡出土軒平瓦夾測圖

は刻印がある。13は脇区に「上」の刻印が認められる。他例では左右両方に刻印を押したものの左右のいずれかに押したものが認められる。瓦当完形品は1点であるため押さないままのものがあつたかは不明である。出土点数は37点(11.1パーセント)と多い。現講堂にも葺かれている。14(第23図10)は福岡城御鷹屋敷に同范と思われる出土例がある。9点(2.7パーセント)出土している。15は中心飾が徳川家の家紋である三つ葵に類似する。16点(4.8パーセント)が出土している。16は福岡城御鷹屋敷に類品がある。5点出土。17は脇区の広い軒平瓦で、明治以降のものではあるまいか。6点出土。18・19・20は瓦の表面に光沢があり、かたく焼き上っている。20は「観世音寺」の文字が瓦当面に配置されており転宝輪の軒丸瓦と組んで現講堂に葺かれている。

軒丸瓦・軒平瓦のセット関係や若干の編年観について記しておく必要がある。軒丸瓦第13図および軒平瓦第20図は、奈良・平安時代のものである。この中で目立っているのは、老司I式軒瓦セットである。創建期の講堂は老司I式軒瓦セットでまず葺かれた。これ以降に問題がある。その後の講堂は「延喜5年(905)資財帳」によれば、五重塔・金堂・経藏などと同時に「貞観3年(861)小破、(中略)・今校全」とある。また、康平7年(1064)に大火に遭っていることが「本朝世紀」・「扶桑略記」などに記され、治暦2年(1066)に落慶供養が行われたことが「扶桑略記」にある。これらの記事に対して軒瓦の出土量や出土状況から、裏づけすることが出来るであろうか。貞観3年には小破とあるから、瓦の葺替えが必要とされたかどうかの問題もあるが、瓦の葺替えが必要であったとしても、量的には少なかったと考えられる。これに対しては、第13図4・5や第20図5・6などの軒瓦が安楽寺の調査による出土例や、大宰府政庁跡Ⅲ期と推定される軒瓦の仲間として、葺替えに使われた可能性があると推定してよいだろう。

問題は、康平7年の大火の2年後、治暦2年に再興された講堂にどの瓦が葺かれたかである。これについては、軒丸瓦では第13図と巴文の一部、軒平瓦では第20・21図の範囲で考えて見るよりないだろう。巴文は太宰府天満宮の休憩所・御神庫の発掘調査結果からは最古式とされる剣頭巴文軒丸瓦と剣頭文軒平瓦が、共伴した土器から12世紀前半以前と推定されているが、この種の巴文軒丸瓦や剣頭文軒平瓦は、今回の講堂跡の発掘調査から発見されていない。畿内での巴文軒丸瓦の出現も12世紀前半頃とされているから、講堂の再建時には、巴文や剣頭文の軒瓦が使用されたとは言えない。従って、再興講堂に葺かれた軒瓦は、第13図・第20図のなかで考えるよりない。第13図の軒丸瓦は全部で26点で、うち老司I式軒丸瓦19点と、これと平行するかそれ以前の軒丸瓦と考えられる百済系単弁軒丸瓦1点を除けば、僅かに6点である。第20図の軒平瓦は全部で26点で、老司I式軒平瓦12点を除けば、6が4点出土しているのを最多として、他はそれ以下の出土点数である。すべてを数えても14点にすぎない。康平の大火では講堂は、五重塔・大房と共に焼亡したとされるが、上記の結果からは再興された講堂に使用されたであろう軒瓦を、年代観と出土量の点から見出すことは難しい。治暦2年以降の罹災によ
















第24圖 講堂跡・回廊跡出土軒平瓦拓影 4

て丁寧にとり片付けられたものと考えるか、それ以前の軒瓦である老司I式のセットなど、使えるものを使ったと考えるべきかもしれない。

今回の調査では巴文軒丸瓦の出土が最も多かった。巴文軒丸瓦の上限については、安楽寺(太宰府天満宮)の発掘調査例から今回の調査で出土した軒瓦は、鎌倉時代以降のものと考えておきたい。

発掘調査の結果からは、1～19をI類、20～34をII類、35～45をIII類と分類することができる。I類としたものは、SB3800Dの整地層から出土した瓦群(第25図)が中心となる。講堂拡張基壇第4列の整地層の中からの出土した瓦群である。I類とした巴文の場合、観世音寺の周辺でも、大宰府崇福寺・安楽寺・学校院・金光寺推定地などの発掘調査で、近年資料が増加しつつある。これ等の資料のもつ年代観を今回の出土資料に与えるためには、同范関係の確認・范の彫り直しや傷の進行状況などの検討が必要である。今日までにそれを行いつたのは大宰府崇福寺跡出土資料だけである。巴文軒丸瓦16は崇福寺から出土している。この瓦は、土田充義氏によれば、再建時佛殿の基壇周辺に散在していたとされる。崇福寺は天正14年(1586)に焼失するから、SB3800D整地層が形成された時期はそれ以後と考えて良いだろう。SB3800D整地層

















第15図 16	第14図 3	第14図 2	第15図 14	第14図 7	第14図 11
					
7 点	3	3	1	1	2
第22図 1		第22図 7		第22図 3	
					
5		4		2	
第21図 8	第22図 10	第22図 7	第21図 3		
					
2	1	1	1		

第25図 SB3800D整地層出土軒瓦

出土の瓦群には鎌倉時代の軒瓦を含むものの、天正14年以前と考えて矛盾はない。なお、崇福寺出土の丸瓦は凹面布目痕に特徴がある。布目痕は0.1~0.2cmほどの太い糸で横方向に何段にも縫われた痕がある。この痕跡は、軒丸瓦16以外でも9・13・19にも認められる。

なお、巴文軒丸瓦のうち1・4・7・14などは珠文数が多く、素文線が低いなどの特徴があり、鎌倉時代に關する可能性もある。1類は、やや幅が広いが鎌倉・室町時代の巴文軒丸瓦として考えておきたい。

II類としたものは、SK3777から出土した瓦群である(第26図)。SK3777は、現講堂の西側で創建基壇上面に広く掘られた土壇である。この土壇からは寛永銘の鬼瓦が出土している。この瓦群は、ほぼ鬼瓦の銘文にある年代観と同じ頃のものと考えらるうえて、特に矛盾はないものと

第16図 27	第16図 28	第16図 24	第16図 22	第16図 25
				
19点	20	6	3	2
第16図 23	第15図 20	第13図 2	第19図 1	第16図 中
				
1	1	2	1	13
第24図 2		第24図 14		第22図 7
				
12		5		1
第24図 16	第24図 7	第20図 1	第20図 5	その他
				
4	2	2	1	3

第26図 SK3777出土軒瓦



思う。江戸時代の記録として、『筑前国統風土記』に寛永7年(1630)の大暴風雨で講堂が傾破したので、寛永8年国主忠之が仮堂を建立したと記し、元禄元年(1688)に現講堂が建立されたとも記している。この後、文政年間、安政年間に修理された記録があるものの、瓦群のもつイメージは江戸時代でも古い時期のものと考えたい。従ってSK3777は、寛永8年の仮堂の建立に使用された鬼瓦をはじめとする瓦が元禄以後にかたづけられた土壌と考えたい。寛永8年建立の仮堂には、巴文軒丸瓦19・20と第24図2・14の軒平瓦が中心に葺かれたものとする。SK3777の瓦群は、寛永期の瓦群とすべきであると思うが、20~34の瓦群のなかには、現講堂に葺かれたままのものもある。大きく江戸時代の瓦群と考えておきたい。この一群の瓦は軒瓦でも黒田如水の隠居所と言われる福岡城御廣屋敷からの出土瓦との共通性を認めるが、丸瓦・平瓦に押された刻印のなかにも同じものが含まれている。Ⅲ類としたものは、講堂北側で創建基壇の上に据られた土壌遺構SK3774から出土した瓦群である(第27図)。瓦の文様や焼き上り状況から、確証はないが明治以降の所産と考えたい。

次に軒平瓦について見ると、第21図の1~3の剣頭文や6・7あたりは顎の形状から鎌倉時代のものとする。とした場合、7の平瓦部凹面に見える布目の端は軒平瓦が1枚作りされる時期を暗示している。(第130次調査では第21図6でも同様の資料が出土している。)

第22図中心飾に宝珠文を持つ軒平瓦は室町時代のものである。この瓦群は、軒平瓦の総量の40パーセントを占めている。記録にはないがこの時期に講堂の改修などがあつた可能性が高い。





第24図のうち、SK3777出土のものは江戸時代初期に、それ以外は江戸時代後半から昭和34年までの軒平瓦である。

#### 丸瓦・平瓦(第29~36図、図版47~50)

最も多く出土した瓦類である。このうち、遺構との関係では、創建期と考えた基壇を断ち割って礎石のすえつけや基壇の補修の痕跡などについて調査した時点で基壇版築土中から出土した丸・平瓦がある。

基壇の断ち割り場所は前面東側、昭和32年に入れられていた南北トレンチを清掃・延長したものをはじめ、合計で4ヶ所ほどに入れている。

基壇版築土中からの出土瓦(第28

第17図 38	第17図 37	第17図中のその他
		
6点	5	2
第24図 13	第24図 15	
		
9	2	

第27図 SK3774出土軒瓦

図)は、すべてで40点ほどである。うち6点を図示した。丸瓦は小破片のものがあつた。平瓦では狭端を上として1が中央部の破片。2は右端部・3は狭端部と右端部の部分である。4は中央部で5は左端部。6は狭端部が図の上にあたる。

第122次調査のSE3680の瓦群と対比すれば、4のように正格子の叩打痕が認められること・粘土紐巻き作りの瓦がないことの相違がある。

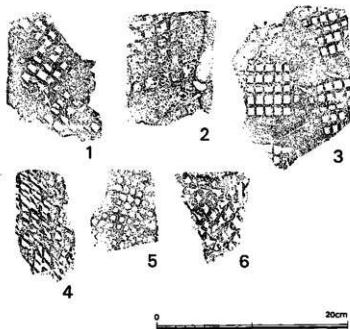
なお、遺構の調査によって出土した丸・平瓦については、比較のものと形がわかり計測出来るようなものや、破片でも刻印やへら描きのあるものについて取り出して整理を行った。

計測・観察を行った資料について第2・3表に一括して計測値を示した。なお、計測・観察を行うにあたって現金堂裏に現講堂及び金堂に使用されたと推測される瓦が積まれていたものを、親世音寺住職石田琳園氏の了解を得て借用し、第2・3表に一括して掲載した。質的には発掘調査によって出土した資料と同質のものと考えている。

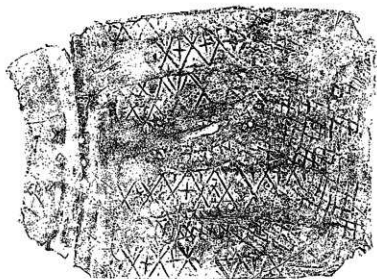
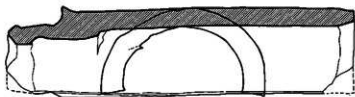
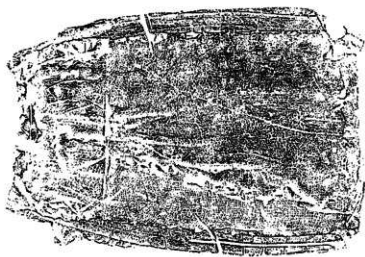
計測・観察を行った資料については、今後に分類や計測値の分析を行う必要があるが現時点ではなにも終わっていない。以下に丸瓦3点・平瓦3点を紹介する。

M075 (第29図)の丸瓦は、凸面に粗い斜格子と細い斜格子の2種類の叩打痕が見られる。凹面には粘土板の合せ目と布目痕跡を残している。円筒を切り離し2分割するため下から玉縁部の方向へナイフが走っているが、ナイフは全面におよばず上下端部に割り離されたままの状況を残している。第13図の軒丸瓦4・5・6あたりに伴う丸瓦であろう。

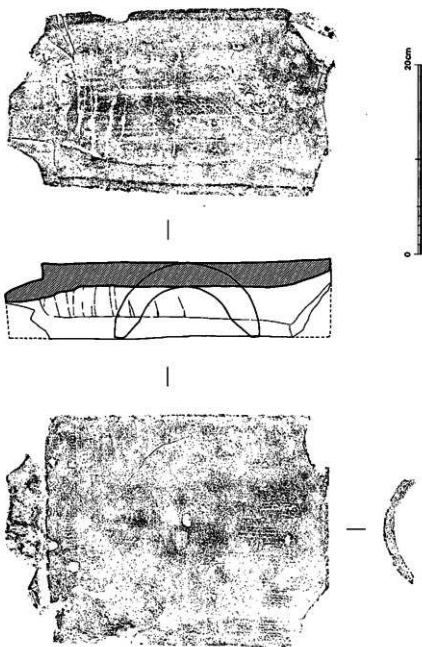
M087 (第30図)の丸瓦は凸面は整形されているものの縦方向の縄目痕跡を残している。粘土円筒を2分割したあと凹面の両側を削り取っている。粘土板の糸切り痕跡と布目を残している。布目は粘土円筒と製作台にかぶせた布を剥離させやすくするための工夫として0.1~0.2cmの太い糸で横方向に縫われた痕がある。M087では、横方向の縫目は1.0~2.0cmの幅で10段程にお



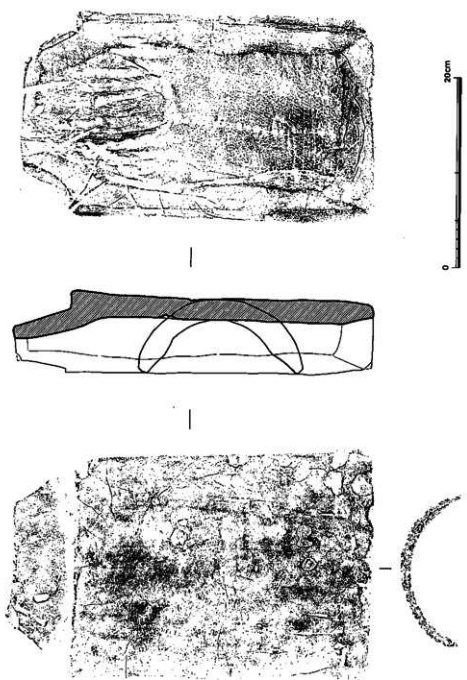
第28図 講堂跡基壇版築土中から出土の瓦片拓影



第29圖 講堂跡出土丸瓦M075拓影・實測圖



第30图 讲堂出土瓦M087拓影·实测图



第31图 觀世音寺所藏九瓦M005拓影・実測図

よんでいる。丸瓦の凹面にこのような縫目を残している丸瓦は大宰府崇福寺跡の丸瓦がすべてこの方法をとっている。また、山口県大内氏の館跡でもa類として紹介されている。巴文軒丸瓦の9・13・16の丸瓦部分に同じ痕跡を認めている。

M005(第31図)の表面は完全に整形されている。中央で広端から玉縁端までの3分の1のところに刻印が押されている。凹面は、分割面と内側両側面と端面・玉縁部を面取りしている。布目はかなり粗い。抜取り縄の痕が認められる。第17図の軒丸瓦の丸瓦部を残すものなかに同じような布目痕があり、この点で共通するものがある。

H102(第32図)は粘土板桶巻き作りの平瓦である。凹面は木口両端部を面取り風に削っている。糸切痕・布目痕を残している。側面は広端から狭端にかけて内側にナイフを入れて乾燥させた後、割って分割した。このことから桶巻き作りと考えた。凸面には、長さ25cm、幅6.2cmほどの叩打痕を残している。叩打具の大きさや形状が推定出来る資料である。

H105(第33図)凸型台を使用した一枚作りの可能性が高い平瓦である。凹面は横方向になでつけられているが、1部に横骨痕かと思わせる縦方向の段が残る。凹面の斜格子痕は、乾燥時同種の平瓦が重ね置きされた時点で、上の瓦の重みでついたものと理解している。狭端縁だけをへら削りしている。

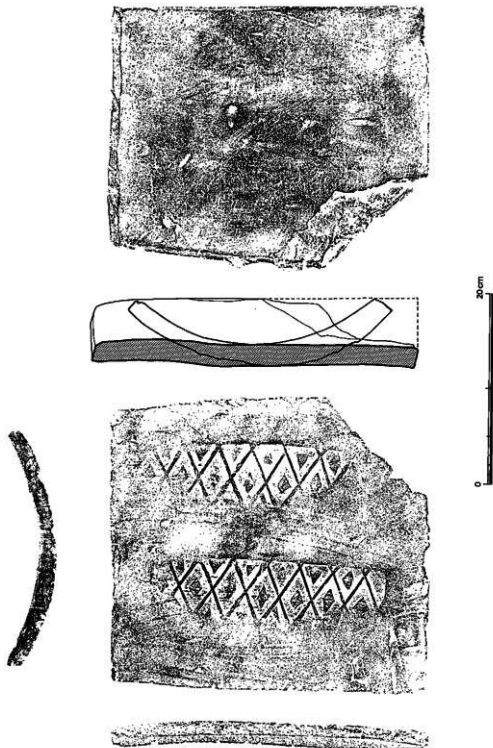
凸面は、大きな格子目が平瓦全面におよんでいる。菱形の格子目の長対角線が叩打具の幅を示すとすれば、甲面が長さ30cm、幅5.5cmの板具が推測される。凸型台使用の一枚作り平瓦と考える理由は、側縁部の断面の形に見られるように凹面側では丸く凸面側は稜となっていることによる。凸型台に載せられた粘土板の両側縁を整形する場合、おこり得る状況と考える。

H035(第34図)の平瓦は、凹型台使用の一枚作りの平瓦と考えている。凹面には、重ね置かれた痕跡が中位まで残るが、全面横方向にナデつけられている。狭端木口から内側に8cm右側縁によった位置に刻印が押されている。凸面は凹面に比較して粗く仕上げられるが、平瓦を台から取り上げる時点でつくと思われる弧状のアタリ痕跡も認められる。側縁の断面形状はH105とは逆に側縁部凹面側が丸く、凸面に当たる部分が稜を作っている。平瓦に与えられた曲率もH102に比較してゆるい。

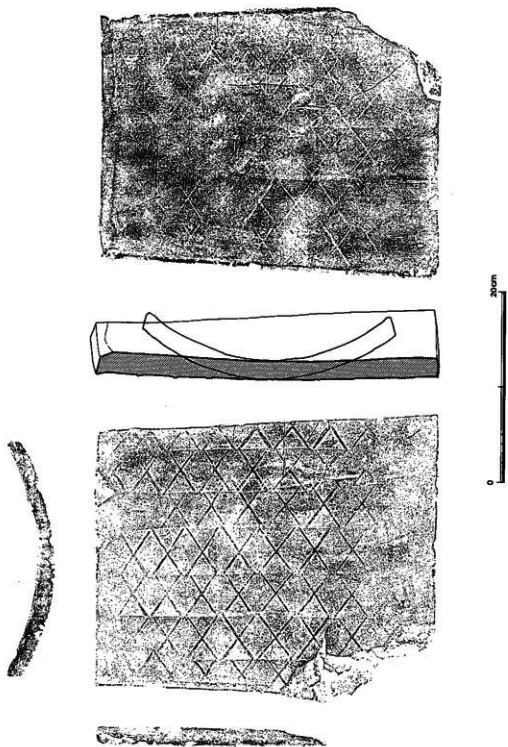
第35図は丸瓦・平瓦に認められた叩打痕を集めてみた。すでに紹介をしたM075・H102・H105については省略する。

H124は、叩打痕跡が凸面全面に認められるが縦長の叩板を使用している。長さも30cmに近い。H096は長さ26cm以上幅6.0cmほどの叩板を使用する。凹面に粘土板の合せ目痕跡を残し、分割面もH102と同様である。M104の叩打痕も長さ25cm以上、幅5cm以上ある。叩打板の文様にはこの他にも二重の斜格子文など数種がある。

丸瓦の製作法の変化については、いまだ明らかにしきれないが、平瓦については大宰府周辺では縦長の叩打板を使用している時期に、桶巻き作りから凸型台使用の一枚作りへと変化したも

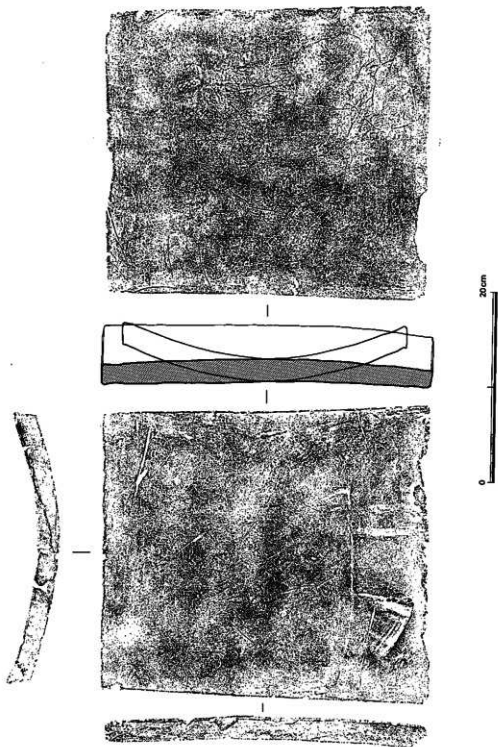


第32图 講堂跡出土平瓦H102拓影・実測图



第33圖 講堂跡出土平瓦H105拓影・実測図





第34图 觀世音寺所藏平瓦H035拓影・実測図

のと考えて良い。軒平瓦の一枚作りと同時と考えれば、その時期は第21図7の時期、鎌倉時代であつたらう。

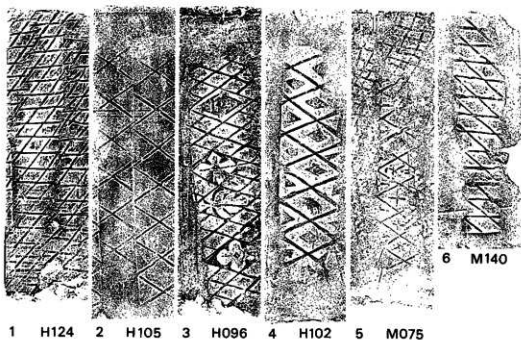
次に、一枚作りの平瓦製作技法のなかで、凸型台から凹型台への移項も観世音寺出土瓦で知られる。第36図はその例である。1・2は凸型台を使用して作られた平瓦である。凸型台に載せられた粘土板の端は、凸型台側面に合せて削りとられるが、1・2の例では、正確に削りとられず、あるいは削りとることを省略したために、凹面の側縁部は凸型台の形を写しとったまま平瓦として使用されたものだろう。

3は、平瓦凸面に製作台の端部が写しとられた例で1・2とは逆の状況にある。凹型の製作台が使用された痕跡と考える。

凸型台から凹型台への平瓦製作台の変化の時期を知る確かな資料は現在のところない。ただ、この製作技法は関西方面からの技術が導入されたものであろうから室町時代以降になってからであろう。

#### 文字瓦・刻印など (第37~42図・図版51~54)

第37図1・2は、丸・平瓦の叩打板に左右逆字「観世音寺」と記されている。丸・平瓦合せ



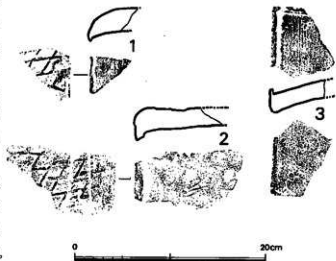
第35図 講堂跡出土丸瓦・平瓦の叩打痕跡拓影

て5点が出土している。3も叩打板に彫られ「佐」と彫られた平瓦である。「佐」の字と考えている。4は平瓦凸面にへう描きされた資料で、偏はないものと仮定すれば「真亨」であろうか。H035の平瓦よりやや古いがH105よりは新しい時期である。4は長方形の枠のなかに「平井製」の刻印と「昭和三十四己亥歳建観世音寺宝蔵」と刻まれた刻印が押されている。

M005・H035の丸瓦・平瓦に刻印が押されていることは先に紹介した。これとはほぼ同時期以降の瓦で同質の意味を持つと思われる刻印があり、これを第38～42図で示した。なお、計測表中にも欄を設けて第38～42図と照合出来るようにしたが、丸瓦M148・平瓦H133以降は破片資料であるため計測表には登載していない。

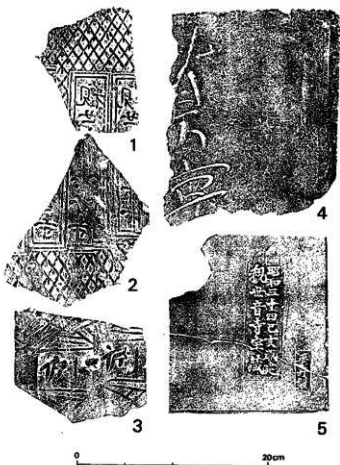
第38図1・2・22・26は「上」と読める。1は丸瓦の場合で凸面に押されている。2は第24図13の軒平瓦の脇区に押された例である。22・26は平瓦の狭端木口部に押された例である。平瓦の場合26の押しかたが通例で22のような横向きは例外的である。上の字のまわりに四角の枠があるものとなしものとの差があるが、押し方の強さの差によるものであろう。また刻印の種類は同一のものと思う。平瓦で14点あるが、すべて観世音寺所蔵資料である。発掘資料では第24図13の軒平瓦に多量に見られる。

3は丸瓦凹面の玉縁に近い位置に押されている刻印で「サイフ 平井」と読める。第37図4の宝蔵建設時の瓦と同時と考えられる。3点出土。4は丸瓦凸面に押されている。これより小さなものが第41図6に見られる。これ1点が出土。5は、第41図1・2・5のように他種の刻印と併用された例があるから、H118も同様の用いかたであった可能性が強い。1点出土。6・7・8は、丸瓦の凸面・平瓦の凹面に押されている。円形の枠の中に「大」字が刻まれている。6・7・8に見るように大の字は1種類だけではないようだ。借用資料では平瓦に5点・発掘資料では丸瓦で11点・平瓦で6点が出土している。9は平瓦破片資料1点の出土で凹面に押されている。10は平瓦凹面に押されている。破片資料で2点出土。11も平瓦凹面に押されている。1点出土。12は11を小型にしたものようで、丸瓦凸面に押された破片資料である。第41図3・4・7に見られる通り、2つ合わせて使うのが通例であったものかもしれない。丸瓦で2点出



第36図 講堂跡出土平瓦一枚作り関連資料拓影・実測図

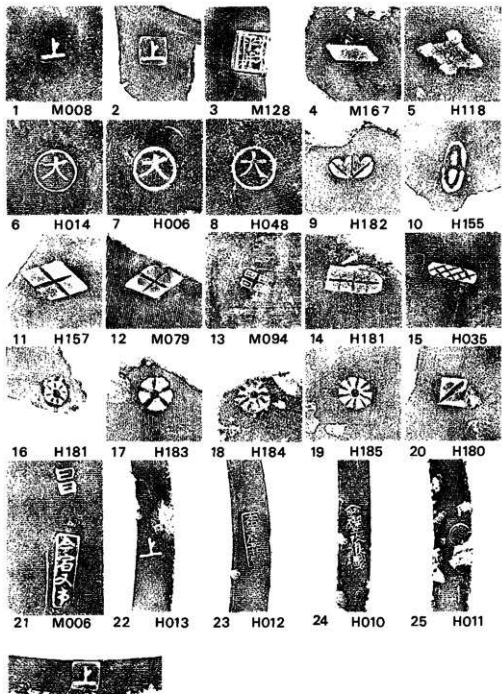
土。13は丸瓦の凸面に押さ  
 れている。借用資料・出土  
 資料各1点が出土。発掘資  
 料はSK3777から出土したも  
 のがある。14は平瓦凹面に  
 押されている。発掘資料で  
 1点。15は丸瓦の凸面・平  
 瓦の凹面に押されている。  
 借用資料で丸瓦2点・平瓦  
 1点が、発掘資料で平瓦1  
 点が見い出されている。  
 16~19は平瓦の破片資料の  
 凹面に見られる。16では中  
 心の点から放射状に線が8  
 本、17では5本、18・19で  
 は10本刻まれている。各1  
 点ずつの出土である。18・  
 19は同一の刻印であるかも  
 しない。20は平瓦の破片  
 資料で方形の対角に1本の  
 線を入れている。枡を表現  
 したものであろうか。1点  
 出土。21は借用丸瓦に1点



第37図 講堂跡・回廊跡出土文字瓦拓影

ある。「晶」と長方形の枠内に「今宿又市」と記されている。23は借用平瓦狭端木口に押された  
 刻印で長方形の枠内に「太宰府平井製」と刻まれている。1点だけである。24も借用平瓦で「へ」  
 の下に小さく「石川」あるいは「右川」とあり、その下に「御笠改良製」と刻まれている。こ  
 の1点だけである。25も借用平瓦狭端木口に「〇」が押されている。1点だけである。第39図  
 は借用丸瓦の凹面に押されている。長方形の枠内に「検査之証」二重の楕円形の枠内の中央に  
 「瓦」外側上段に「統制証」下段に「福岡地方工業組合」と記されている。この2つの刻印に  
 は、それぞれ2ヶ所の目釘穴状の痕跡が残っている。金属製の型であったものかと考える。

この他に第40図に示す刻印が丸瓦・平瓦に押されたものがある。発掘調査の時点で雲文の軒  
 平瓦の平瓦部凹面にこの種の刻印を見出したことから、この刻印の文様は雲文と考えて記録  
 し、この刻印を「雲」と呼んできた。実際には「花文」と呼ぶべきものかもしれないが、ここ

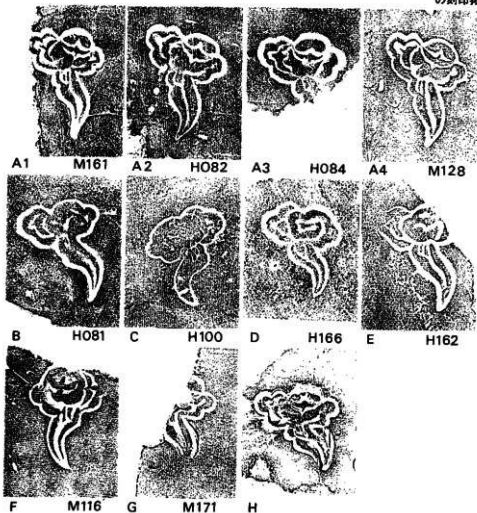


第38図 觀世音寺所藏丸・平瓦および講堂跡・回廊跡出土丸・平瓦の刻印拓影 1

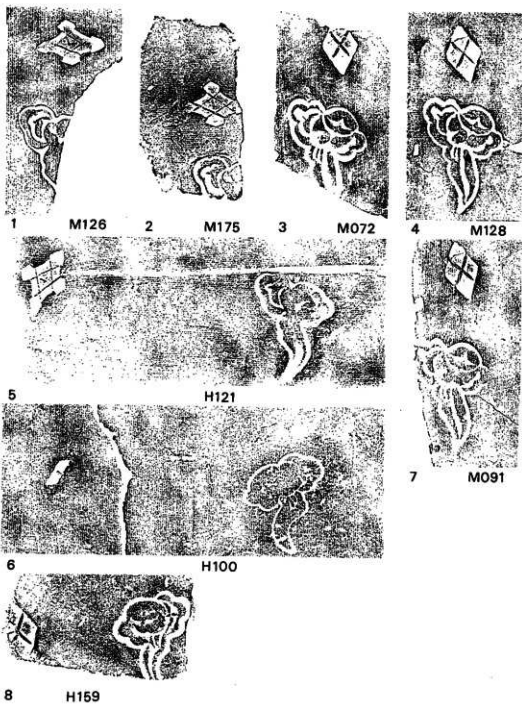
では仮の呼名として「雲」と呼んで置く。雲はA～Hの8種に分けられる。このうちAは左側に見られる鳥形の文様・その右側で、ほぼ中央にある鳥形の文様と尻尾状の部分に微妙な差があり、4種類を認めている。この刻印はA1～A3では平瓦凹面に押されている。A1で4点、A2で1点、A3で2点がある。A4は丸瓦凸面に押されたもの5点である。なお、5点のうち第41図に示すように第38図12の刻印と合わせて押されている。残り2点が破片資料であるから、2種類は刻印を合わせて使用されるのが通例であったものかもしれない。Bは丸瓦に2点、平瓦にも6点見出されている。丸瓦では第41図1・2のように第



27 MO20  
 第39図 観世音寺所蔵丸瓦の刻印拓影



第40図 講堂跡・回廊跡出土丸瓦・平瓦の刻印拓影 2

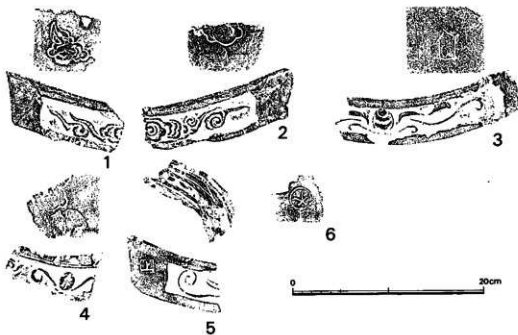


第41図 講堂跡・回廊跡出土丸瓦・平瓦の刻印拓影 3

38図5の刻印が合わせて使われている。平瓦でも第41図5のように丸瓦と同種の刻印が合わせて使われ、残り5点は破片資料であるから、この場合も2種類の刻印を合わせて使用したと考える方が良いだろう。Cは第41図6に示したものの1例だけである。D・Eとも平瓦破片資料で1点ずつ。Fは丸瓦に2点、平瓦に1点ある。平瓦の1点は第41図8のように第38図12の刻印が合わせて押されている。Gは刻印の全形を知ることが出来ないがHに似ている。丸瓦で1点。Hは雲文の軒平瓦に押されている。

第42図は軒瓦に見いだされた刻印とヘラ描きである。第42図1・2は雲文の軒平瓦である。1の軒平瓦平瓦部凹面に第40図Hの刻印が押されている。2の平瓦凹面にも刻印があるが、1の軒瓦の刻印とは別である。Fが最も近似している。3は宝珠文の軒平瓦の平瓦凹面にヘラ描きされたものである。4の軒平瓦の平瓦凹面にもFと思われる刻印があった。5は軒平瓦の脇区に「上」の刻印が押された例で、この種類の軒平瓦の両脇区に見い出される。6は軒丸瓦の瓦当が剝離し失われている。丸瓦凸面に押されている。

以上の結果から丸瓦・平瓦・軒瓦の刻印の関係は、第38図1に代表される「上」は、丸・平・軒平瓦にあった。第38図6は、丸・平・軒丸瓦に、第40図Fは丸・平・2種類の軒平瓦に押されている。この他では、第38図12が第41図3・4・7・8に見るようにA4とFの雲二つの刻印と



第42図 講堂跡・回廊跡出土軒瓦の刻印ヘラ描拓影



合わせて使われていることなどがあげ得る。

この刻印の同種のものが、福岡城御鷹屋敷からの出土瓦に見られる。第38図21の「今宿又市」は刻印は別種と思われるが、御鷹屋敷では、軒平瓦・丸瓦・平瓦にも見られる。さらに第38図16・第40図Fは、恐らく同じ刻印と思われ、同図B・Dも同一の刻印である可能性がある。御鷹屋敷を黒田如水が隠居所として使用したのは慶長8年（1603）の1時期であり、その後どのように使用されたか明らかでない。従って、時間的には第38図13・17の資料がSK3777から1点ずつ出土しているのが年代観を決める手がかりではあるが、決定的なものとは言えない。

なお、「サイフ 平井」の刻印がある丸瓦は、昭和34年宝蔵建設時の瓦であり、「太宰府平井製」や「御笠改良製」の刻印のある平瓦、「検査之証」のある丸瓦は第2次大戦後のものであろう。

さて、これらの刻印のもつ意味については現在のところ判然としない状況にある。御鷹屋敷例では、目立つのは人名が多い。工人名を示すことからしだいに工房を代表する屋号的な刻印になったものと推定するが、観世音寺の場合記号が主である。この点、御鷹屋敷例とは異なるので、今は観世音寺近傍の工房の印か工房内の製品管理に用いられたものかと考えて置きたい。

御鷹屋敷出土の刻印のある瓦群と今回講堂から出土した刻印のある瓦群の刻印では、生産工房の博多と太宰府の差を思わせるが、さらには、工人の交流や物流の問題も検討すべき問題であることを示唆している。

#### 道具瓦・埴（第43～45図・図版54～56）

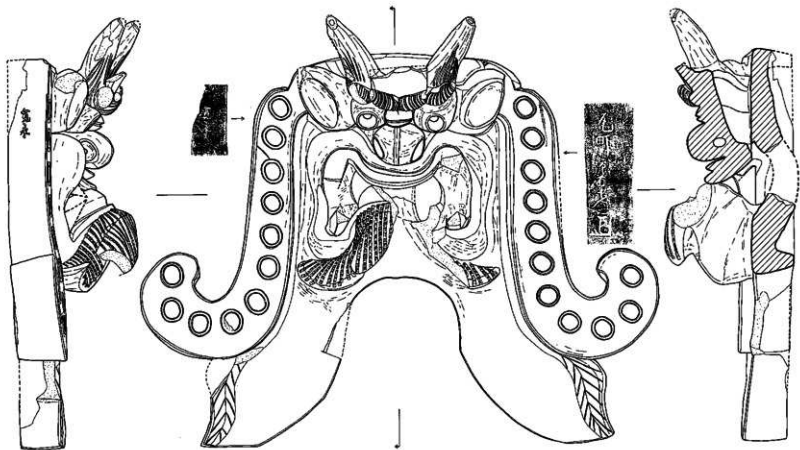
鬼瓦・鳥衾・製斗・伏間瓦・面戸瓦・切隅瓦・文様埴・埴などが出土している。

鬼瓦 形から抜かれたものでなく、1点ずつ彫刻されたもので、中世のもの2点、江戸時代のもの2種5点がある。この他に裏面に大棟に鬼瓦を取り付けるためのえつり状の把手の破片などがある。

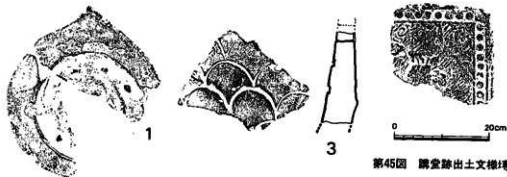
第43図（図版55・56）は型によらず手づくりされた鬼面の鬼瓦で「寛永」の銘がある。SK3777から出土した。上2本、下2本の牙と下唇下の髭の右半分両側縁部の1部が欠損しているものの、ほぼ完全な状況に近い。太い眉の下には大きな目を見開き、だんご鼻の下の大きく開いた口から恐しげな牙がのぞいている。邪鬼を払う形相と言えよう。

顔面の外側は、頂部から耳の脇で1段をつくり下方にさがる頭髪を形式化し竹管で押した円文帯が付けられる。円文帯の端は外側に張り出し上部に巻上げている。円文は同一の器具で押してつけられたものである。円文帯の下にはヒレ状の足をつけ両側には綾杉文を付し鬼瓦に威厳を与えている。また髭は押し引文で表現されている。裏面は焼成する時点での破損をふせぐために、不要な粘土をかきとって大棟に取りつけるための把手をつけるが、把手は欠損している。

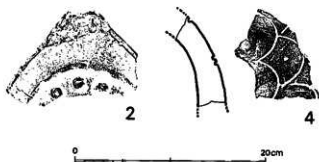
計測値は頂上から足下まで62.0cm、円文帯の両側最大幅81.6cm、側縁下から角の頂点まで21.4



第43图 濠堂出土宽水纹鬼瓦实测图



第45図 講堂跡出土土椽埦拓影



第44図 講堂跡・回廊跡出土道具瓦拓影

cm、側縁下から鼻の頂上まで17.2cm、側縁下から髭の頂上まで20.2cm、側縁幅は耳の幅で6cm、円文帯の下部で7.4cmである。なお口髭下に瓦座がえぐられているが、丸瓦挿入部分は、幅18.6cm、高さは12.4cm程である。

両側縁部にへらによって銘文がきざまれている。右側縁では、人名から花押にかけての部分が見失われているが、文字は、「瓦町 重右衛門 花押」と読み取ることが出来る。左側縁では、製作年代あるいは上棟した年代を記しているものと思うが、銘文帯の下半が見失われている。文字は「寛永□□」である。このへら書については『筑前国続風土記』の記事から、寛永7年(1630)の大暴風雨で大講堂頽破し、寛永8年国主忠之が仮堂を立てたことが知られる。従って、寛永以下、欠損している部分の最初の1字は「八」であったのではないだろうか。

瓦町は博多にある。黒田家の筑前移封といっしょに播磨から山崎権右衛門・喜多村甚左衛門などの瓦工がつれてこられ新城の瓦を焼いている。右側縁の人名重右衛門もこの流れを汲む瓦工であったものと思われる。この瓦工たちは、優遇措置として丁役を免除されている。また、島原の乱に行っていることや、黒田長政との酒席にもはべり、福岡城の葺瓦をほめてもらっていることなどが『筑前国続風土記附録』から知ることが出来る。今でいう職人よりも武士に近い存在であったものだろう。花押まで書いているのも、こんなところによるのではないだろうか。

三つ藤巴文軒丸瓦の存在とともに黒田家が仮堂の建立に尽力したことの物証ともなるであろう。

第44図は道具瓦の1部である。1・2は巴文の鳥倉である。1はSK3774から出土している。

3・4は同一個体と思われる。鍬鉾か。鱗は弧状の器具1種でつけられている。3は正面上部

折れ曲って立ちあがる部分にあたるか。上部部に目釘穴が付されている。4は図の下部がやや厚くなっており側縁にあたる部分と考えた。江戸時代以降のものである。

この他に、江戸時代以降の伏間瓦片2点、契斗瓦片1点、奈良時代の面戸瓦片1点、江戸時代の切隅瓦（第24図2の軒平瓦）片1点などの破片がある。

文様磚（第45図・図版56）1点が出土している。方形の文様磚の約4分の1の部位である。側面には文様はない。厚さ6.2cmある。

磚は、この他に無文磚が相当数出土している。遺構SX3780は磚で敷かれていたが基礎上面の状況はわからない。長方形磚が多く短辺17cm長辺28cm厚さ6.0cm程のものである。

#### 各遺構・層位出土の金属製品・土製品・石製品

##### 青銅製品

##### 飾金具（図版57-a・b）

aは金銅製だが金箔はほとんど剥げ落ちている。透かし彫りされた上半部は牡丹をあしらったものか。文様に沿って毛彫りが施される。下半部は中央の花文から左右、そして下方向に帯状に延びる部分に各々8個ずつの円文を配し、その上下には界線をもつ。周縁には計7カ所の目釘穴をもつ。表土層出土。bは鉤状の飾り金具で径1.7cmほどに復元できる。中央には孔をあける。

##### 用途不明銅製品（図版57-c）

cは径2mmほどの線状の青銅を楕円形に折曲げている。製品ではなく素材か。SK3777より出土。

##### 銅銭（第46図）

1は大観通寶（1107年初鑄）、2は大中通寶（1361年初鑄）、3・4は洪武通寶（1368年初鑄）、5～9は寛永通寶（1636年初鑄）。1は礎石抜取り穴、2は暗褐色土層、3はSB3800D基礎化粧の裏込め、4は隣室背面のビット、5・6はSB3800D前面の基礎化粧石列を覆う層位、7～9はSK3777から出土した。

##### 土製品（第46図・図版57）

##### 瓦質土器

鉢（3） 底部から脚部にかけての破片である。一脚分しか残っていないが、三脚になるものと考えられる。脚部と体部の境には段をもち、さらに沈線をいれている。脚部は二段になり接地面に向かって幅狭になる。脚部の段状の切り欠き部には竹管文様のスタンプを押す。胎土には砂粒を多く含む。

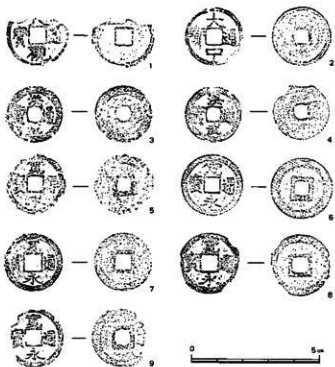
七輪（1・2） 1は直径15cmほどに復元できる。中心から同心円上に径約1.7cmの孔が穿たれる。厚さは1.5～1.6cm。2は厚さ2.9cm。周縁部は黒化する。ともに上面は刷毛目調整、周縁はヨコナテ調整する。SK3777出土。七輪の底蓋と考えられるが、この土壌から出土した炉壁と一連のものか。

円盤状土製品 (4~8)

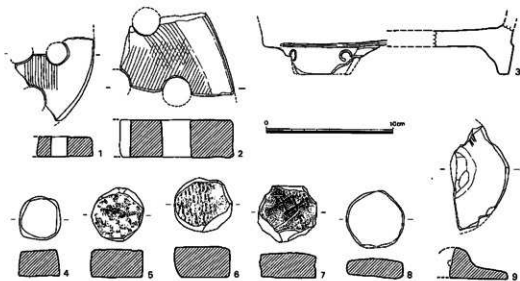
平瓦の再加工品である。瓦の周縁を打ち欠いたままのものとその後に磨いたものがある。5・6・7にはタキ痕が残っている。4・6はSK3775、5は暗褐色土層、7・8はSD3800Cの基壇化粧の裏込めから出土。

ペンダント型土製品 (図版57-d) ハート型のペンダントで上部二カ所に径4mmの孔を穿つ。中心にはマリア像がレリーフされている。胎土は精良で砂粒をほとんど含まない。

炉壁 (図版30-a・b) SK3777Aの窯壁を取り上げたものである。一辺11×13



第46図 銅銭拓影



第47図 土製品・石製品実測図

cm程の平瓦片を粘土ではさみ、それをさらに同じ大きさの平瓦でサンドイッチ様にはさんでブロック状にしている。全体形が知れるものはないが、残存部分から、一辺16.5cmの立方体に近い形状になるものと考えられる。胎土には砂粒・砂礫、それに藁様のスサを多く混じえている。また平瓦のほぼ中央の径約7cmほどの範囲は黄変しており、これは粘土部分にも及ぶため、熱の強さが窺い知れる。なお、使用された平瓦は第34図の観世音寺所蔵平瓦H035にひじょうに類似している。

#### 石製品

石臼(図版57-e) 上臼の破片で径30cmほどに復元できる。上面には縁をまわし、下面には目を刻むが単位はわからない。物入れが残っている。表土層より出土。

#### 小 結

以上、講堂および回廊について述べてきたが、ここで整理し若干の検討をしたい。

#### 講堂

講堂の遺構を現本堂を含めⅠ～Ⅴの5期に区分した。5期に区分した根拠の一つは、とくに正面部分にみられる基壇の拡張とそれに伴う孫庇の礎石の配置である。

第Ⅰ期講堂 現存する礎石から7間×4間の建物が復元できる。礎石の心々で桁行30.008m、梁行15.365mの計測値を得る。この数値を「資財帳」記載の講堂規模「長十丈、広五丈一尺」で単位尺を検討すると、桁行では0.3008m、梁行で0.30127mとなる。両者の平均値をとると0.30068mとなり、曲尺相当値で0.992尺となる。過去に調査された鏡山、福山両氏の実測値はいずれも今回の計測値よりも若干短く、鏡山氏は桁行を曲尺98.61尺、梁行を曲尺50.49尺で資財帳曲尺相当値の平均値0.987尺強の数値を得られている。また、福山氏(昭和32年度調査)は桁行を曲尺99.20尺、梁行で曲尺50.37尺の計測値を得られている。資財帳曲尺相当値の平均は0.990尺である。

次に柱間の検討をしよう。今回の計測では隅の間の桁行と梁行の平均寸法は3.233mで曲尺10.67尺弱である。鏡山氏は10.7尺、福山氏は10.59尺とされる。また、梁行中の間の平均値は今回の計測では4.447mで曲尺14.68尺。鏡山氏は曲尺14.54尺、福山氏は曲尺14.62尺の計測値を得ている。また、桁行中の柱間については礎石1個が現存していないが、その平均値は4.71mで、曲尺15.54尺である。鏡山氏は曲尺15.44尺、福山氏は曲尺15.60尺である。以上、柱間については今回の計測値とほぼ近似した数値となる。

今回の計測で得られた柱間寸法を鏡山、福山氏が言われる唐尺で隅の間11尺と梁行中の間15尺、桁行中の間16尺とし、曲尺に換算すると各々次の値が得られる。隅の間0.970尺、梁行中の間0.979尺、桁行中の間0.971尺となり、平均0.973尺が得られる。

この第Ⅰ期建物に伴う基壇は残存する玉石の地覆石から東西34.808m、南北20.465m、高さ

約1.30m(礎石上面と地覆石下面とのレベル差)規模が復元できる。基壇化粧については西面で地覆石の上ののった加工の少ない石1個があり、これを化粧石とすれば壇上積風のものが想定される(この切石については澤村氏報文によると、昭和32年度調査時では創建当初のものであるのか確認できていない)。そして、この建物の正面には中央と東から2間目と西から2間目の3個所に階段が付設される。また、東・西面の回廊と講堂の接続部にも階段が設けられている。背面については痕跡はないが中央部に通路状のものがあることから、背面中央に1個の階段が設けられていたと考えられる。

第1期講堂の年代については基壇化粧の補修的なこと(基壇地覆石の付近から出土した9世紀前半代の須恵器杯蓋片から、この頃に補修された可能性が考えられる)がなされたとしても、基壇積土や礎石のやり直し等の痕跡がみられないことから、その創設年代を8世紀前半代とし、通説に従えば天平18年頃を比定して、大過ないものと考えられる。

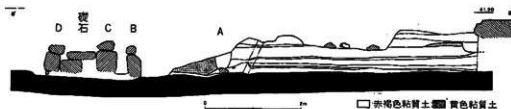
第II期講堂 第II期は第I期講堂基壇の東・西面を各々0.5m内側に縮少し、正面を南へ2.0m拡張した正面33.808m、南北22.465mの基壇を有し、正面には3.9mの出をもつ孫庇を設ける。正面に孫庇をつける他は第I期の礎石を使用し、規模としてはほとんど変わらない。第II期の再建年代については正面の整地土層中から出土した土師器は最も新しいものとして10世紀後半代のものであり、ある程度の推定が可能である。

記録の上から知られる講堂再建については康平7年(1064)の火災によって焼亡したが、治暦二年(1066)には五周四面の講堂が落成していると『扶桑略記』『百鍊抄』は記している。

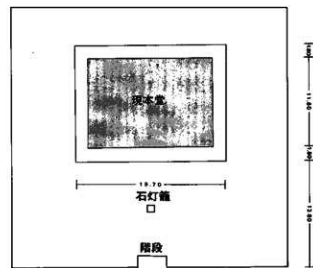
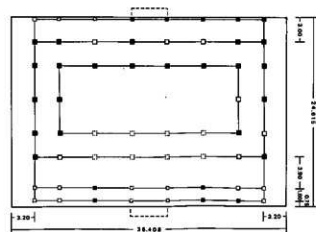
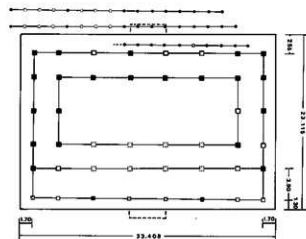
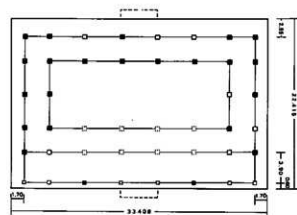
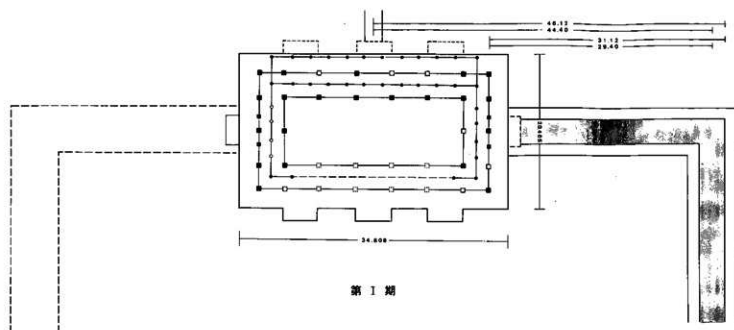
第II期講堂の再建年代は基壇拡張部の整地土層出土遺物との関連で考慮すれば、再建されたとする治暦二年の時期を比定しておきたい。

第III期講堂 第II期講堂の正面基壇を更に南へ0.70m拡張する他は第II期とほぼ同じ規模の基壇を有する。建物の建て替えを示す礎石等の追加もみられない。

記録の上から治暦二年以降、寛永の再建まで講堂の罹災や再建は窺い知れない。現在、観世音寺に「観世音寺伽藍古図」が存しているが、この絵図を見ると、講堂は正面に孫庇をもった様に描かれている。この絵図の製作年代については余り詳らかでないが、補修の際軸に「大永



第48図 講堂の基壇前面部・断面図



第49図 各期の殿堂変遷図



6年(1526)に古図を写し、承応3年(1654)に表装した」と記されていたとの饒山氏の記録があり、16世紀初頭以前にその原形があったとの推定がなされている。

第Ⅱ期以降の再建された建物には正面に孫庇状のものがあることが今回の調査で確認できた。有力な根拠とはならないが、この絵図は遺構にみられるように、ある時期の講堂の姿を反映させているのかもしれない。年代比定の資料には乏しいが、この期の整地層から15世紀代の青磁碗小片が1点出土していることは一つの参考になろう。また、出土軒瓦のうち宝珠文を中心飾とする軒平瓦は出土量では最も多くこのことを裏付けているかのようである。

第Ⅳ期講堂 正面36.00m、南北24.615mの基壇で正面と背面に孫庇を付けている。平面の規模としては最も大きい規模となる。前述したように、講堂が罹災に遭うのは記録によると康平7年以降は寛永7年(1630)に大風で傾倒する記録があるだけである。そして、翌寛永8年には仮堂が設けられたことが記され、現在の金堂の建物がそれである(『大宰府観世音寺開基由来』元文3(1738)年)と伝えている。しかしながら現金堂は、今回検出の第Ⅳ期はもちろんのこと、どの期ともプラン的には合わない。

第Ⅳ期が寛永8年の仮堂建設に伴うとの根拠はきわめて乏しいが、少なくとも現金堂(阿弥陀堂)の建物がこの基壇に伴うとするのはやや否定的である。とすれば第Ⅳ期講堂を現金堂(阿弥陀堂)とは異なる寛永8年の仮堂とするか、もしくはそれより时期的に遡る時期のものと考えざるを得ない。

今回、現本堂の西側で検出した土壌SK3777から「寛永」の年号をへう描きした鬼瓦が出土している。寛永の何年かはその部分が欠失しているため不明であるが、寛永8年の仮堂建物に伴う可能性の一つとして考えられる。SK3777が掘られたのは位置からみて現本堂の建設と同時にそれ以降、すなわち元禄元年かそれ以降とみられる。SK3777は新旧2時期あり、鬼瓦が出土したのは新期の3777Bで、相伴した陶磁器にはそれより年代的に新しいものが多く、第Ⅳ期に掘られたものでないことは明らかである。

寛永7年の大風で傾倒する前の講堂(観音堂)の規模を『筑前国統風土記』は「横十四間、長十八間(一説に、十間に十四間と云)」と記している。第Ⅳ期講堂は桁行30.008m梁行24.765mであり、曲尺で各々99.04尺、81.73尺となる。これを『統風土記』記載の規模で換算すると1間か5.7尺前後となり、現在よりやや短い単位となるものの、第Ⅳ期講堂規模に近似している。『統風土記』記載の規模が正しければ、第Ⅳ期講堂は大風で傾倒する寛永7年以前の講堂であったとすることもできる。そして、「寛永」の紀年銘をもつ鬼瓦は寛永元年から寛永7年の大風前の約7年間のどの年かに製作上棟されたとしても可能であるが、これには必ずしも積極的な根拠を見出し得ない。(SB3800D基壇化粧の前面の整地層から寛永通宝が出土している。)

「寛永」の紀年をもつ鬼瓦はこの仮堂の建設時、すなわち寛永8年に製作されたとするのが、現時点では最も妥当と考えている。第Ⅳ期のSB3800Dの基壇化粧石列前面の瓦の堆積状況(鬼

瓦と同時期の瓦群)から考えても、この石列は寛永8年の仮堂にも使用されたものであろう。現金堂は仮堂を移築されたとされているが、発掘調査からは仮堂の規模は窺い知ることは出来なかった。第Ⅳ期講堂の基壇が寛永8年の仮堂に再使用されたとすれば、現金堂の建物とは別の建物であったか、もしくは基壇よりは規模の小さい現金堂が考えられる。

第Ⅴ期講堂 第Ⅰ期講堂の前面柱筋に前側を合わせて南面し、その中心線は第Ⅰ期のそれより約30cm西寄りに建てられている。寛永八年に仮堂が建てられ雨露をしのいできたが、元禄元年黒田家三代藩主黒田光之により重建された。『続風土記』によれば、再建にあたっては博多の豪商天王寺屋浦了夢の財力がその背景にあったことを記している。また現在、本堂内部中央の厨子脇の円柱に響がかけられているがそれに黒田光之重建とし、裏面には元禄元年の年号が記され現本堂の建立年代を知る有力な根拠の一つともなっている。

#### 回廊

『資財帳』によれば回廊の規模は「北方長貳拾丈柒尺、広一丈五寸」とある。今回検出した2条の溝SD3715とSD3735で挟まれた中心(いわゆる東面回廊SC3720の心)と講堂東面側柱礎石の心々距離は29.40mを測る。これを講堂の桁行・梁行寸法から得た「資財帳」の単位尺0.3007mで換算すると9丈7尺7寸となり、『資財帳』記載の回廊規模より短かく、合致しない。

『資財帳』記載の北面回廊の長さ20丈7尺の2分の1にあたる10丈3尺5寸を資財帳単位尺0.3007でメートルに換算すると31.122mとなる。この得られた数値を遺構の上に落すと、溝SD3715の西肩から約0.70m西方の位置にのり、東面回廊の東側柱想定線とほぼ一致する。しかしながら、回廊の幅は講堂の東・西面にある小礎石、とくに東面の小礎石は心々で3.68mで資財帳単位尺で換算すると1丈2尺強となり、資財帳記載の規模とは一致しない。講堂の各柱間と同じく、回廊の柱間も資財帳単位尺とは合わない。

今回検出した北面および東面回廊の雨落ち溝は出土遺物より9世紀前半代には埋没していることが調査の結果判明したが、回廊そのものは延喜5年の時期までは確実に存在していたことは『資財帳』の記すところである。そして、今回検出した回廊がそれに当たることが確定し得たことは大きな成果であろう。

回廊に関する記録は次頁の年表に記したように、康平7年(1064)焼失、康和4年(1102)傾倒、天仁元年(1108)修造、康治2年(1143)一部焼失、久安4年(1148)に丑寅角破損、辰巳角大破の記事がみられ、記録の上からは少なくとも久安4年まで規模等は定かでないが部分的にでも回廊が存在していたことを窺い得る。

以上、講堂を5期に分け、回廊等について年代等いくつかの検討を試みたが、今回十分な検討をするまでには到らなかった。観世音寺に関する文献記録は多く、更にそれらの検討作業が必要であることは言うまでもなく、残された問題も多い。今後、南門跡・金堂跡等の調査結果を俟って更に検討を加えていきたい。

観世音寺講堂・回廊に関する略年表

	西暦	記事	文献
天智		天智天皇・筑紫観世音寺建立を免願	純日本紀 和銅二年二月戊子
養老七	723	僧満誓・勅によって観世音寺を造る	純日本紀 養老七年二月丁酉
天平十七	745	僧玄訪に観世音寺の造営を命ずる	純日本紀 天平十七年十一月乙卯
十八	746	観世音寺完成し、落慶供養をする	扶桑略記 聖武天皇下
貞観三	861	講堂小破、今校金	延喜五年資財帳 佛殿章
康平七	1064	北方回廊中破、貞観八年修理金	同前
治暦一	1066	講堂・塔・回廊・僧房等焼亡する	観世音寺不空讃索 観音胎内墨書銘
康和四	1102	観世音寺復興成り、公家供養行なう	扶桑略記 治暦二年十一月二八日
康治一	1143	大風によって金堂・戒壇院・回廊・南大門等 が傾倒する	観世音寺古文書 (京都大学蔵)
文明十二	1480	金堂・回廊等焼亡す	百城抄康治二年六月十一日 本朝書紀康治二年七月十九日
慶長三	1598	宗紙「踏堂塔婆回廊みな跡もなく」云々と観 世音寺を描写する	筑紫道の記
寛永七	1630	是齋重鑑「本堂のみわつかに残りりといへど も、扉も軒もあらはなれ」云々と描写 大暴風雨で講堂が倒壊し、堂舎のすべてを失 う。	九州下向記
寛永八	1631	黒田忠之、仮堂を建て諸尊を安置する	筑前国統風土記 御笠郡観世音寺
元禄元	1688	黒田忠之、天王寺屋浦了夢の遺族等、講堂を 再建する	同前

参 考 文 献

- 鏡山猛 『筑紫観世音寺誌』 1933
- 「福岡県筑紫郡太宰府遺跡」 『日本考古学年報』 昭和27年度版 日本考古学協会 1952
- 「大宰府都城の研究」 昭和43年6月 風間書房
- 福岡市教育委員会 『御鷹屋敷』 (図録編) 1990
- 上原真人 「平瓦製作法の変遷」 今里幾次先生古稀記念『播磨考古学論叢』 1990
- 大脇謙 「研究ノート九瓦の製作技術」 『奈良国立文化財研究所学報第49冊』 1991
- 毛利光俊彦 「法隆寺軒瓦の変遷」 日本伝統技術保存会研究会レジュメ 1991
- 貝原篤信 「筑前国統風土記」 『福岡県史資料』 続第四輯 1943
- 加藤一純・鷹取周成編 「筑前統風土記附録巻47」 福岡古文書を読む会『筑前統風土記附録』 文献  
出版刊 1977

力武卓治 「遺跡通信」第3号 1984

九州歴史資料館 『九州古瓦図録』 1981

竹内理三 「筑前国観世音寺史」 『南都佛教』第二号 南都佛教研究会 1955

小田富士雄 「筑前観世音寺」 『九州考古学研究』歴史時代編 学生社 1977

高倉洋彰 「筑紫観世音寺史考」 『大宰府古文化論叢』下巻 九州歴史資料館編 吉川弘文館 1983

福岡県教育委員会 『福岡県の近世社寺建築』近世社寺建築緊急調査報告1984 澤村仁、佐藤正彦、  
山本輝雄、宮本雅明

澤村仁 『観世音寺、二三の問題』 1989.10.07 太宰府市史研究会発表

福山敏男 「福岡県筑紫郡観世音寺境内」 『日本考古学年報』昭和32年版日本考古学協会 1957

太田博太郎 澤村仁 「唐招提寺講堂」 『日本建築史基礎資料集成 七』仏堂Ⅰ 中央公論美術出版  
1981

唐招提寺の講堂は建治年間に修理され、その時、向拝が取付けられており、今回検出の第Ⅱ～Ⅳ  
期講堂の構造に類似点が見られる。(澤村先生の御教示による)

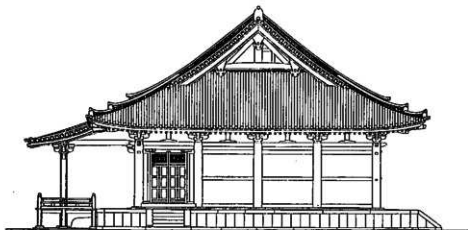
観世音寺所蔵 『観世音寺開基由来』 元文三年(1738)

福山敏男 『観世音寺研究』(1)~(3) 『建築学研究』 第一輯~第二輯八号 1927

山口市教育委員会 『大内氏築山跡Ⅱ』大内氏遺跡発掘調査概報Ⅱ 1988

後藤新治 『観世音寺絵図小考』上・下 『西日本文化』95・96 西日本文化協会 1973

森田勉 狭川真一 「太宰府天満宮」一太宰府天満宮境内地発掘調査報告書第1集一太宰府天満宮  
1988



参考例 唐招提寺の建治年間修理時の講堂側面図  
(国史館唐招提寺講堂修理工事報告書より転載)

### 3. 第129次調査

本次調査地点は蔵司から約200m隔った南方に位置し、条坊復原案による右郭六条二坊にあたる。そして、昭和56年度に実施した第76次調査地の東に隣接した地域である。第76次調査では政庁前面の官衙城の西を限る南北溝SD320を検出し、その東側で掘立柱建物SB2005と東西溝SD2015を確認している。

今回の調査の契機はアパート建設に伴う事前調査であったが、主たる目的としてSD320東側における遺構の状況と官衙城南辺部の在り方の把握にあたった。発掘調査は約383㎡について行った。地番は太宰府市大字観世音寺字大楠325。

調査は平成3年4月20日に開始したが、調査地は既に区画整理事業が完了しており、ここには約0.7mの厚さで真砂土の盛土があり、そのため、重機を投入し盛土と旧表土の除去を行った。旧表土の下層には若干の黄褐色土層があり、東側と西側ではこれを除去すると地山が露出し遺構検出を行った。5月28日には遺構検出を終了し、5月31日に写真撮影、その後遺り方・実測を行い、6月7日以後若干の補足調査を実施し、6月11日には完全に調査を終了した。

#### 検出遺構

旧表土の下層には黄褐色土層があり、この黄褐色土層を除去すると東側と西側では地山面が露出する。黄褐色土層の下層には黒色土層があり、とくに、発掘区の中央部分のSD3825とSD3835間はやや厚く堆積がみられる。そして、この部分には土器の混入が著しく明確な遺構としては確認できなかったが、遺物の出土状況からみて単なる自然の堆積ではなく、人為的な様子がみられた。

今回検出した主な遺構は掘立柱建物3棟、溝4条、土器廃棄遺構、土壇、ピット群等である。

#### 掘立柱建物

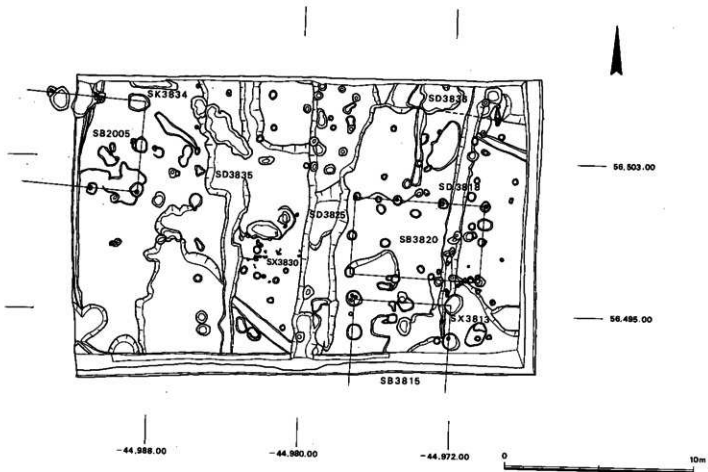
**SB3815** 発掘区の東南部で検出した2間×1間以上の南北棟建物である。桁行方向については1間分検出したのみで、さらに発掘区域外へ延びるため、その規模については不明である。柱間寸法は桁行1.95m(6.5尺)、梁行2.55m(8.5尺)等間である。柱掘形は径0.70m～0.80m前後の不整形、深さ約0.70mのものである。東側柱の一つには柱根が残存し、径0.20mを測る。他の柱穴3個にも柱痕跡があり、また、根固めの小石を底部に入れている。方位はN2°30'Wである。



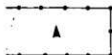
**SB3820** SB3815の北側で検出した2間×3間の東西棟建物である。柱間寸法は桁行2.27m(7.5尺)等間、梁行1.95m(6.5尺)等間。柱掘形は径0.40m～0.50mの不整形で、深さ0.20m～0.50m。北側柱掘形にはいずれも柱痕跡が残っており、その痕跡から柱の径は約15～20cm前後が推



第50图 第129次調查遺構配置圖



定できる。柱穴中には炭化物とともに、土師器の皿等が入っており、その廃絶の時期をある程度推定できる。建物の方位はSB3815と同様N2°30'Wであり、建物間の距離は1.15mである。



**SB2005** 発掘区の西北隅部で検出した東西棟建物である。この建物は第76次調査で検出している1間×2間の建物SB2005と東西方向の柱筋と柱間が一致することから、同一の建物であることを今回の調査により確認することが出来た。建物の規模は桁行4間以上、梁行2間のものである。柱間寸法は桁、梁とも2.4m(8尺)等間である。柱掘形は東北隅と梁中央を除いて、径0.50m~0.60mの不整形のもので、深さ0.20m~0.50mを測る。東南隅の柱痕跡から径20cm前後の柱を想定できる。建物の方位はN2°30'Wである。

溝 合計4条の溝を検出している。

**SD3825** 発掘区の東辺寄りに位置する南北溝である。幅0.80m、深さ0.10m前後。溝底は南へわずかに傾斜する。地山の地形に沿ってやや下がる。発掘区の南辺近くで細くなり、消滅する。溝の方位は約10°強東偏している。

**SD3818** 発掘区のほぼ中央部に位置する南北溝である。幅2.0m前後、深さ0.30m。溝の西肩は直線的で明瞭であるが、東肩は蛇行し、北方では幅広となり不明瞭となる。溝底部は部分的に窪みがあり、凹凸が著しい。溝埋土は上層の堆積土と同じ黒色土である。流れた状況を示す砂などの堆積はみられなかった。方位は西肩でとるとN2°30'W前後であり、孤立柱建物SB3815・3820・2005とはほぼ一致する。

**SD3835** SD3825と約3.20mの間隔をおいて西側に位置する南北溝である。幅は0.60m~1.20mで広狭があり一定していない。また、溝肩も必ずしも明瞭でなく、中途で消滅する。深さは概略0.15m前後あるが、南端では0.05m弱で、その痕跡をわずかに確認できるほどである。

**SD3836** 発掘区の北端で検出した東西方向の溝である。SD3825と直交しているが、年代的には埋土の状況および出土遺物より同時期に存在していたと考えられる。溝の輪郭は明瞭でなく、部分的に南の肩がわずかに知れるのみである。北の肩は発掘区外にのびている。

#### 土壌

**SK3834** SB2005の東北隅の柱掘形の北側で検出した土壌である。そのほとんどが発掘区外へ拡がっているため、全体の形状は不明。検出部分の深さは約0.35m弱である。

#### その他の遺構

**SX3830** SD3825とSD3835に挟まれた部分のほぼ中央部で検出した小石、礫群である。明瞭なプランとしては確認できず、またその性格も判然としなない。約3.0mの範囲にまばらであるが、小石・礫があり、その部分には瓦片・土器片が比較的集中してみられた。これらの小石、礫などを除去後長径1.80m、短径1.00mの長円形の浅い土壌状のものを検出した。

SB2005

31.30



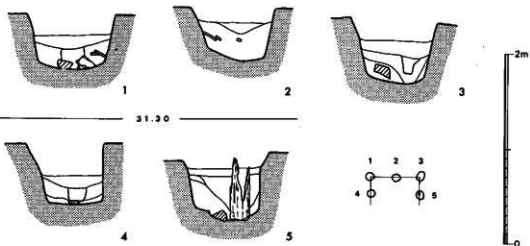
SB3820

31.30



SB3815

31.30



第51図 第129次調査掘立柱建物柱掘形断面図

SX3888 溝SD3825とSD3835に挟まれた部分には炭化物とともに土器片が集中してみられ、一括の廃棄状況を呈していたので、遺構の性格付けは不明瞭ながらも、一群の土器として報告した。



## 出土遺物

### SB2005出土土器 (第52図 別表1)

#### 須恵器

杯(1) 口縁部を欠失する。高台は底部外縁よりやや内側に貼付される。外底部へラ切り離しのまま。そのほかはナデ・ヨコナデを施す。

皿(2・3) ともに外底部はへラ切り離しのまま。その他はナデ・ヨコナデ。

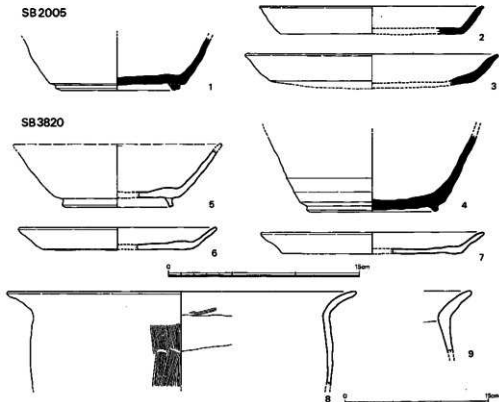
### SB3820出土土器 (第52図・図版58 別表1)

#### 須恵器

杯(4) 体部の上半を欠失しているが底の深いもの。鉢かも知れない。体部の下半より回転へラ削りを施す。それ以外はヨコナデで、内底部にまで至っている。外底部には墨痕が認められる。

#### 土師器

杯(5) 体部・口縁部が大きく開く。口端部は欠損する。底部にやや細目の高台をそなえ



第52図 SB2005・3820出土土器実測図

る。内底部にナデを施す以外は全てヨコナデである。

皿(6・7) 6は外底部をナデ調整。7は回転へら削りを施す。他はナデ。ヨコナデ。

甕(8・9) とともに大形の甕で、胴の張りが少なく、口縁部が胴部と同じ厚みのままで外反する。口縁部はヨコナデ、胴部外面は縦刷毛目、内面は斜めのへら削りを施す。8は口径が36.7cmに復元できる。

#### SD3825出土土器(第53図・図版58 別表1)

##### 須恵器

蓋(1・2) 1は天井部と体部の境が明瞭でなく、口縁部は下方に小さく突出する。撮は扁平で上面がややへこむ。外天井部は回転へら削り。2は見受けの返りを有し、天井部は大きく内彎する。胎土は精良。口径は17.6cmに復元でき、形状からみて杯以外の蓋と考えられる。

壺(3・4) 3は短頸広口壺の頸部破片である。肩部はなだらかにつくる。内外面にヨコナデを施す。内面には黒色物質が付着している。4は丸い体部に復元でき外に高くふんばった高台をそなえる。外底部2分の1を回転へら削りし、内面はナデ・ヨコナデ。外面はヨコナデ調整。精良な胎土を用いる。

塩壺(5) 円筒形を成すものの底部破片。外面に指頭圧痕、内面に粗い布痕が認められる。

#### SD3835出土土器(第53図・図版58)

##### 須恵器

杯(6) 低い高台をそなえたもの。器面が摩滅し調整は不明。

壺(7) 丸い体部に大きいハの字に開いた高台を貼付したもの。残存する体部の上位に回転へら削りを施し、他はヨコナデ。内面に漆が付着しており、漆容器として利用していたものである。

鉢(8) 口径が30cm以上に復元できるもので、体部から口縁部は内側に屈曲して直立する。体部外面に格子の叩き目が残され、他はヨコナデを施す。

甕(9・10) 口縁部は屈曲しつつ外反し、端部を外側に肥厚させる。上端はやや凹んで外傾する。

把手(11) 棒状に延び端部が上向きにすばまる。全体に指頭圧痕が残されている。

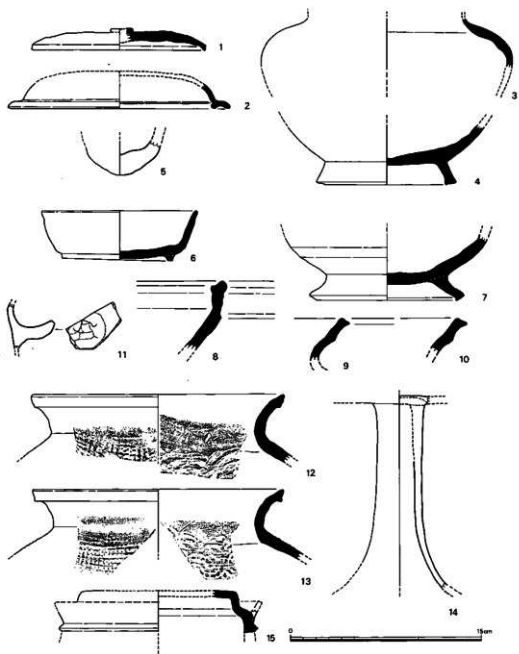
#### SD3836出土土器(第53図)

##### 須恵器

甕(12・13) 口縁部が短く外反し口縁部の外面に絞線を巡らす。13はSD3825出土の2片と接合。

##### 土師器

高杯(14) 長脚の高杯で杯部を欠失する。脚部は裾が大きく広がる。調整は摩滅し定かでない。



第53图 SD3825·3835·3836、SK3834出土土器·砚实测图

## 陶硯

円面硯 (15) 外堤を硯部側面に貼付して海部をつくる。そのため、陸部は高くなっている。外堤下部に一条の三角凸帯を巡らす。脚部に幅1.8cm前後の長方形透しがあげられているが、数は不明。

### SK3813出土土器・陶器 (第54図・図版58 別表1)

#### 須恵器

甕 (1) 口縁部は短く外反し、口端部内側が浅く凹む。内面に当て具痕がわずかに認められ、外面はヨコナデ調整。

#### 土師器

杯 (2) 口径に比べて底径が小さく体部が丸みをもったもの。器面の摩滅が著しく、調整不明。

#### 緑釉陶器

皿 (3・4) 3は灰色土師質の胎土に淡緑色の釉を全面に施す。蛇ノ目高台。4は淡灰色須恵質の胎土に薄い黄緑色釉を施す。見込み、体部外面の下半は露胎となる。

### SX3822出土土器

#### 土師器

壺 (5) 菓壺形小壺の底部で、断面四角形の小さな高台を付す。内面はヨコナデ、体部外面にヘラミガキを施す。

高杯 (6) 杯部を欠失する。杯部との接合部から外反して開く脚部で、低脚のもの。内外面ともヨコナデ調整。

### SX3830出土土器 (第54図・図版58 別表1)

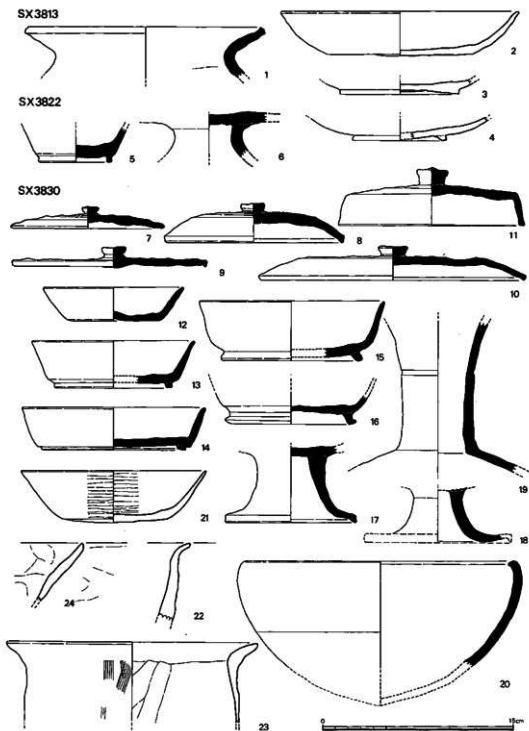
#### 須恵器

蓋 (7~11) 7~10は口径12.0~21.0cmのもの。外天井部はすべて回転ヘラ削りを施す。9は完形品。11は短頸壺の蓋で、口端部の下面は平坦に整える。外天井部は回転ヘラ削り。器面は火彫れし、凹凸が著しい。

杯 (12~16) 12は無高台。外底部はヘラ切りのまま。内底部も含め内外面にヨコナデを施す。13~16は高台をそなえたもので、16は他に比べて高く外側へ開く。外底部は14に回転ヘラ削り調整を施し他はすべてヘラ切り離しのまま。

高杯 (17・18) とともに低脚タイプのもの。18は杯部との接合面をとどめる。脚部内外面ともヨコナデ調整。

壺 (19-a) 長頸壺の口縁部から肩部にかけての破片。頸部の中央付近に一条の沈線を巡らす。内外面ヨコナデ。頸部外面に体部との接合時についたしほり痕が認められる。aは頸部が体部の方にやや寄った平瓶の破片である。共伴したものに比べて古式である。内外面ともヨコ



第54图 SK3813、SX3822・3830出土土器実測图

ナデを施す。色調は内外面灰黒色、断面は小豆色を呈している。

鉢 (20) 底部がすばまる鉄鉢形のもの。口縁部は内側に突出する。調整は体部中位より下半に回転ヘラ削りを施す。内面はナデ・ヨコナデで平滑にする。

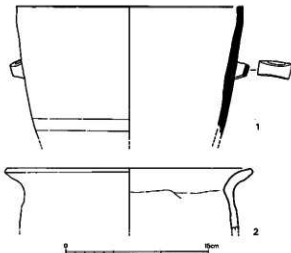
#### 土師器

杯 (21) 体部下半より回転ヘラ削りを施す。内外面にヘラミガキを加えた精製土器。

鉢 (22) 口縁部を屈曲させるもので、砂粒をほとんど含まない精良な胎土を用いる。内外面ともヨコナデ。

甕 (23) 口縁部を肥厚させ、胴部のあまり張らない形態。胴部の外面は刷毛目、内面にヘラ削りを施す。二次的の火熱を受け、器表は赤変している。

焼填壺 (24) 円錐形をなすもので型造りによる整形。外面に指頭圧痕有り。



第55図 SX3833出土土器実測図

#### SX3833出土土器 (第55図)

別表1)

#### 須恵器

鉢 (1) 体部にほとんど影らみをもたない深鉢である。体部の上位に半環形の耳を横位に付ける。外面体部の下半より下位には回転ヘラ削りを施す。

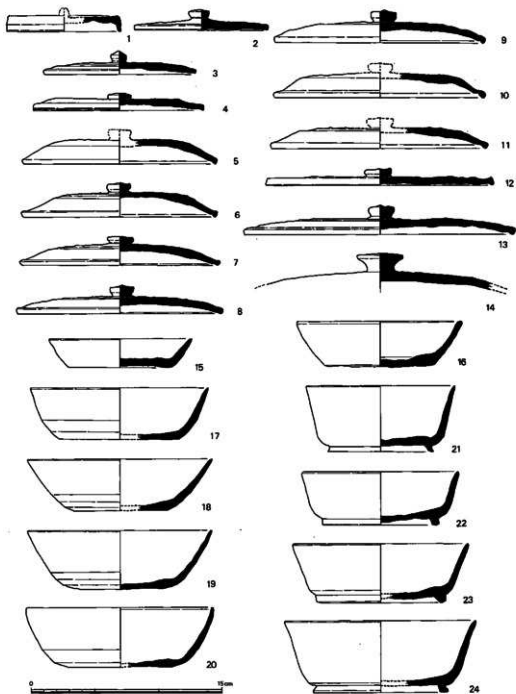
#### 土師器

甕 (2) 胴に張りのないもので、口縁部は外唇しつつか開く。内面の調整はヘラ削り、外面は摩滅し調整は定かでない。胎土に砂粒を多く含む黄褐色を呈する。

#### SX3838出土土器 (第56～62図・図版59～63 別表1)

#### 須恵器

蓋 (1～14) 1は小形の壺蓋である。口縁部が外側下方に垂下し、口縁部はやや外反する。調整は内外面とも丁寧なヨコナデを施す。14は広口壺あるいは鉢といった大形品の蓋で大きく逆円錐状の撮をそなえる。調整は外天井部に回転ヘラ削りを施し平滑にする。内面はナデ・ヨコナデ。これら以外はすべて返りをもたない杯蓋である。形態上、天井部が低く扁平な2・4・8・12・13、天井部が高く縁部との境が明瞭な5・6・10・11、全体が緩やかな丸みを帯びた7・9とに分けられる。口縁部の突出はすべて断面三角形のやや丸みをもったものだが、4は外端部に凹線をつくっている。調整手法は4・5が外天井部へラ切り離しのまま未調整であ



第56图 SX3838出土土器实测图(1)

るほかは、4分の1から4分の3回転へら削りを施している。7・12はさらにヨコナデで仕上げられる。外天井部以外はナデ・ヨコナデを施す。13の外面には火樺の痕跡が認められる。

杯 (15-27) 15・16は無高台で体部が直線的に立ち上がる形態のもの。外底部はともにへら切り未調整。17-20も無高台で口徑に比べて底徑が小さく、体部下半に丸味をもつこの時期の土師器杯に通常の器形である。20は口縁部内側が小さく突出し段をつくる。佐波理碗を写したものであろうか。調整は体部下半から外底部全面に回転へら削りを施す。いずれも仕上がりが丁寧なものである。なお、17の口縁部・体部の内外面、18は内面に火樺の痕跡が認められる。色調は19が暗橙褐色を呈する特異なもので、他は灰白～青灰色を呈する。21-25は底徑比が60以上のもので外底部に低い高台を外縁より内側に貼付する。25を除き底部と体部の境は丸みを帯びている。調整は外底部をすべてへら切り磨きのままでその他の部位はナデ・ヨコナデを施す。21の外底部には板状圧痕がある。また、22の外底部には一文字のへら記号が認められる。26・27は底徑比が50以下のもので体部が丸みをもつものである。高台は細く長めのものを貼付する。調整は体部に回転へら削りを加える。27は内外面に粗いへらミガキを施す土師器の手法を取り入れたもの。

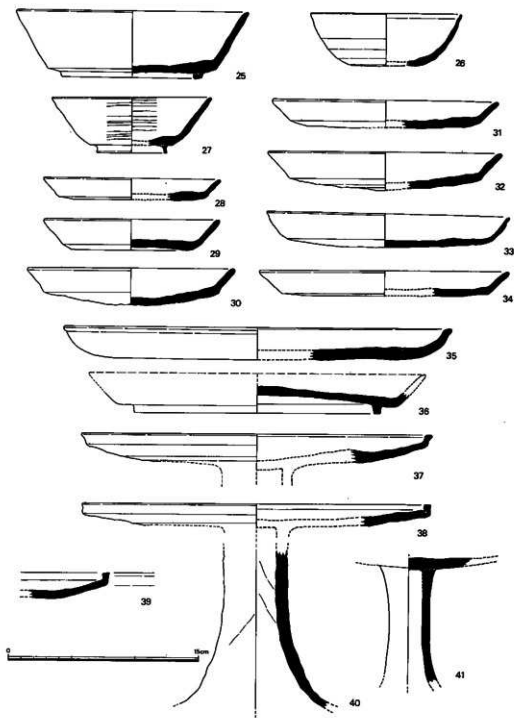
皿 (28-34) 口徑から小形の28-30、中形の31-33、大形の34に分けられる。31・33は底部と体部の境目がつかず丸いもので、34の口端部は外に肥厚し、上端を平坦につくる。外底部は30-32がへら切り未調整である他は、回転へら削りを施す。30の底部は粘土紐巻き上げ痕が著しく、33の外底部には火樺の痕跡が認められる。

盤 (35-36) 35の内底部は回転へら削り調整。36は口縁部を欠失する。外底部は回転へら削りを施す。

高杯 (37-41) 完形に復元できるものはないが相当の量が出土している。いずれも杯部は浅く扁平なもので、下部に長い脚部をそなえたものである。杯部の口縁は37がやや外開きとなり、他は直立する。調整は外底部を回転へら削りする他はナデ・ヨコナデである。脚部は40・41とも外反し外下方に開く。40に杯部を接合する時のしほり痕がある。調整は内外面ともヨコナデ。

壺 (42-48) 42は瓶子形で口頸部が外反して外上方に開く。口縁部は外増し、口端部が上方に突出する。内外面ともヨコナデ。43は短頸壺。体部は丸みをもち肩は張らない。口縁部との境には明瞭な段をもたない。口端部の上面は平につくる。44は口縁部が肥厚する薄手のもの。45は長頸壺の下半である。底部には高台を貼付しない。体部下半から底部は手持ちへら削りを施す。それ以下は内外面ともヨコナデ。46は台付壺の下半。外底部は同様に外開きの高台を貼付する。体部外面は回転へら削り、他はヨコナデを施す。47は短頸壺の底部で、46同様の高台を貼付する。外底部はへら削り。47・48は小形薬壺形の下半と思われる。48は内底部の調整がヨコナデではなくナデのようにも見てとれる。小片なので判断がつかないが、仮にナデの場合は小形の杯であろうか。47はすべてヨコナデである。





第57图 SX3838出土土器实测图(2)

鉢 (49~53) 49・53は体部がやや内彎気味に立ち上がる深鉢。49は体部に孔をあけた長方形の把手を貼付け、下半に回転ヘラ削りを施す。53は口径が少なくとも30cmを越えるものであろう。外面に糜状の叩き、内面に同心円の当具の痕跡がある。その後内面を部分的に刷毛目調整する。50~52は底の浅いもので特に52は盤と呼ぶべきかも知れない。51は体部から口縁部にかけて屈曲し直立する。調整はすべて体部下半に回転ヘラ削りを施す。51の口縁部内外面は赤茶色に発色させている。

甕 (54~59) 54~58は口径が17.8~21.0cmの比較的小形の甕で、いずれも口縁部は短く外反する。調整は55・56が外面格子の叩き、57が縦位の平行叩き、58が横位の平行叩きを施す。57の口縁部外面に「十」字状のヘラ記号がある。59は小片のため口径を知り得ないが大形の甕で口縁部は強く外反している。

#### 土師器

蓋 (60) 撮を欠失する。天井部から口縁部にかけて丸みをおび、口縁部は段を設けて引き出す。口端部の見受けはわずかである。天井部は回転ヘラ削り調整を施し、内外面に回転ヘラミガキを加える。

杯 (61~66) 61は底部にくらべて口縁部があまり開かず底の深いもの。小碗とすべきか。体部より下半は回転ヘラ削り、体部器面は平滑であり、ヘラミガキを施したものが。

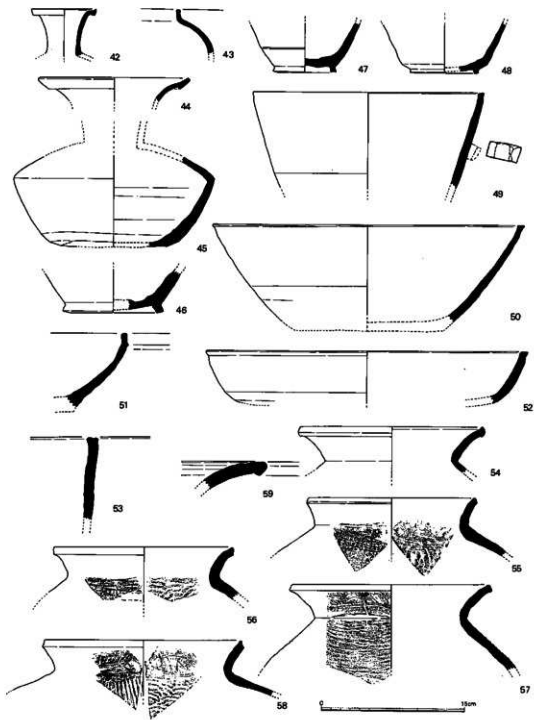
62~64は口径12.3~16.5cmの口縁にくらべて底径が小さく体部が内彎して立ち上がる形態のもので、8世紀後半に大宰府ではよく出土する。残りのよいものは体部中位下半より回転ヘラ削りを施し、内外面に回転ヘラミガキ調整を加え、器面を平滑に仕上げる。65・66は同様の形態・手法のものに高台を貼付したものの。65の見込みには細線が刀子状の工具で刻まれている。

皿 (67~72) 器形はバラエティーに富んでいる。67は底部が丸底になり、体部が一度外彎して立ち上がる。68は口縁部がちょうど蓋を逆にした器形で口縁部が突出し内側に段をつくる。内外面にヘラミガキを加える。69は杯61と同様の形態で、口径のみ広げたもの。71~72は精製のもので、体部下半より回転ヘラ削りを施し、内外面に回転ヘラミガキを加える。

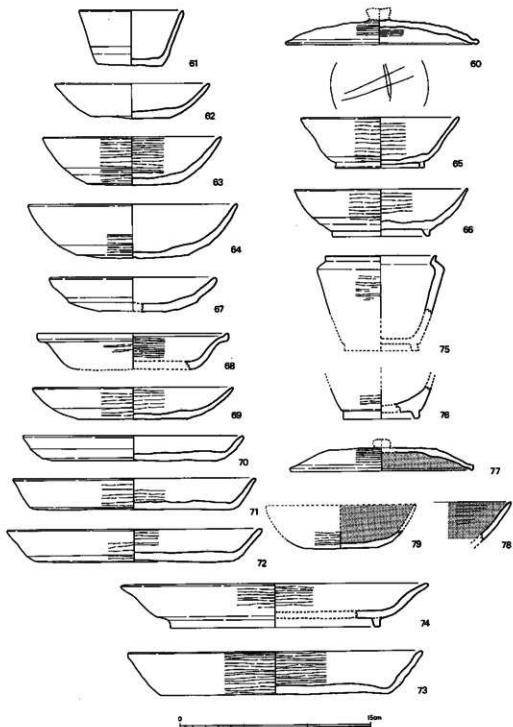
盤 (73・74) 73は外底部に回転ヘラ削り調整を施し、内外面にヘラミガキを加える。74は高台付で丸みをもった体部からゆるく反転して口縁部が大きく開く。内外面にヘラミガキを施す。

壺 (75・76) 薬壺形をなした高台付広口壺。肩部の稜はさほど鋭くない。蓋受けの口縁部は短く外反する。外面には粗いヘラミガキが入る。これに伴う蓋は現在のところ、見出ししていない。

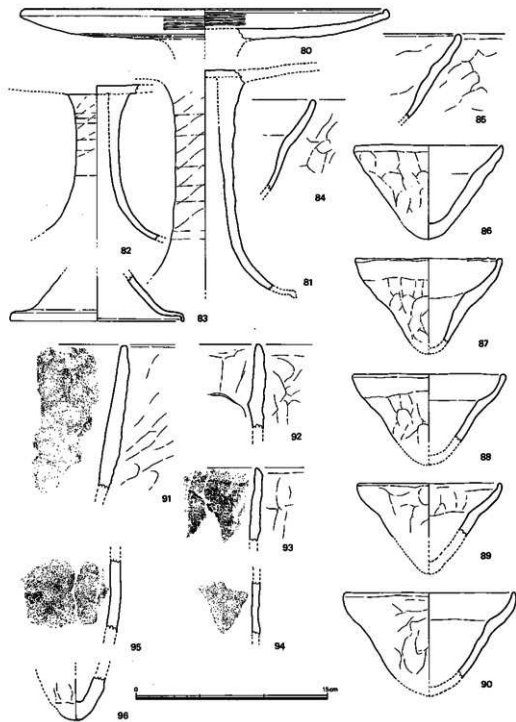
高杯 (80~83) 浅く低平な杯部に長くラッパ状に開く脚部を備えたもの。杯部は土師器蓋と同様の形態・手法でつくられ、体部下半から回転ヘラ削りを施し内外面をヘラで磨く。筒部には杯部と接合した際についた紋り痕が斜位に認められる。内外面ともヨコナデ。脚部は下方に突出する。



第58图 SX3838出土土器实例图(1)



第59图 SX3838出土土器实测图(4)



第60图 SX3838出土器类测图(5)

焼塩壺 (84~96) 全て型造りで成形したものである。84~90は12cm前後の円錐形を呈す。二次焼成を受けているため器面の荒れが著しい。外面は成形時の強い指おさえの痕跡をとどめ、内面はへら状工具によるナデ等調整痕がある。91~96は丸底の円筒形に復元できる。外面には乱雑な指押えの痕跡があり、内面には布目圧痕が認められる。ただ、92は内面を板状工具で調整する。布目は細かいものから粗いものまで各種見受けられ、91は10mmあたり38×30本と非常に細かく、絹の可能性が大きい。93は10mmあたり18×15本、94は24×16本、95は12×10本。原体は麻と思われる。

甕 (97・98) SX3838から多量の煮沸用土器が出土しているが、細片化しているため図示したのはそのうちの一部である。口縁は短く外反する。97の内面はへら削りにより頸部に稜をつくる。

把手 (99・100) 甕あるいは甔の把手。全体をナデている。

甕 (101・102) 101は円筒形をなし、下端部は肥厚し底面は平にする。二次的加熱を受け、器表の剥落が著しい。102は焚口部側縁が出土したのみである。底部も先端を残さないものの、底の出はそれほど大きくない。内面へら削り、外面はナデか。

#### 黒色土器

蓋 (77) 内面のみ焼したA類。土師器蓋と同形態である。小片で風化が著しく内面のミガキの手法は定かでない。

杯 (78・79) 蓋と同じく土師器と同形態・同手法である。78は内面が横位に磨かれる。

#### 線輪陶器

碗 (103) 円盤状高台を備えているもので、淡緑色の釉が全面にかけられる。残存状況が悪く大部分剝離している。胎は淡茶色の土師質。

皿 (104・105) いずれも有高台の底が浅い形状となる。104は灰色須恵質の胎に淡緑色の釉を全面にかける。釉の剝離著しい。105は精選された土師質の胎土に灰緑色の釉が全面に施される。

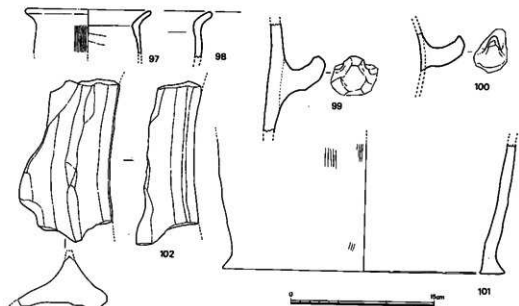
#### 陶硯

円面硯 (106~108) 全て小形の円面硯の破片で圓台を失っている。106は硯部の下位に外堤を貼付することで海部をつくっている。圓台には透かし孔が二ヶ所残っているのみで、その形状は不明である。107も同様に外堤部を貼付して海部をつくっている。陸部はさらに粘土を貼って平に整える。透かし孔は二ヶ所に残り、復元すると10個の長方形孔となろう。硯部はよく擦れて平滑になっている。108は欠損部が多く小片であるため、形状は不明である。胎土はいずれも精選されたものを用いている。

#### 整地層出土土器 (第63図・図版64 別表1)

##### 須恵器

蓋 (1) 広口短頸壺の蓋。天井部に回転へら削り調整を施す。



第61図 SX3838出土土器実測図(6)

杯(2) 高台を底部外縁よりやや内側に貼付する。体部の下半より回転ヘラ削りを施し、丸くカーブさせる。内外面ともヨコナデをするが、ヨコナデは内底部の中央付近まで及んでいる。

皿(3) 体部が外彎し、底部との境は丸みをおびる。外底部はヘラ切り磨しのまま。

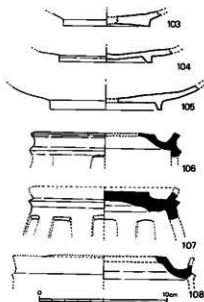
壺(4) 薬壺形の小さな壺。口縁部は細く引き出され、端部は丸まる。内外面ともヨコナデ。精良な胎土を用いる。

#### 土師器

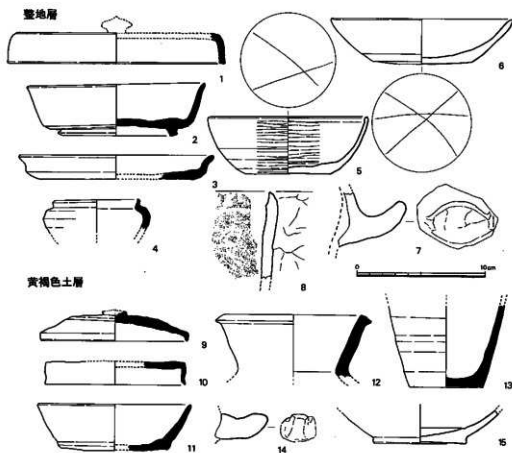
杯(5・6) 5は底が深く薄手につくられた椀形のもので、口端部内側を若干肥厚させる。体部中位より下半を回転ヘラ削りし、内外面に回転ヘラミガキを施す。砂粒は少なく精良な胎土を用いる。焼成後、内底部に「X」と細く刻まれる。6は厚い器肉につくられる。体部下半より回転ヘラ削りを施す。5と同様の刻線が外底部に認められる。

把手(7) 全体をナデでつくった幅広の把手。

塩壺(8) 円筒タイプのもので外面に指押え、内面



第62図 SX3838出土陶器・実測図



第63図 整地層・黄褐色土層出土土器・陶器実測図

に布痕が認められる。

黄褐色土層出土土器・陶器 (第63図・図版64 別表1)

須恵器

蓋 (9・10) 9は扱を欠失する杯蓋。口縁部は長めに屈曲する。外天井部は回転ヘラ削り。10は広口壺の蓋で同じく扱部を欠失する。天井部と口縁部の境は角をもつ。口縁部は細く傾斜し口縁に稜線を入れる。外天井部は回転ヘラ削り。

杯 (11) 無高台のもので外底部へラ切り未調整。他はヨコナデを施す。外面口縁部は1cmほど灰黒色を呈し、それ以外は灰白色を呈す。

壺 (12・13) 12は直線的に開く口縁部で端部は外傾し、外側に肥厚する。内外面ともヨコナデ。13は瓶子の底部で平底をなす。体部外面・外底部は回転ヘラ削り、内面はヨコナデを施す。



### 土師器

把手 (14) 上部へわずかに屈曲する。全てナデによる調整。

### 緑釉陶器

碗 (15) 淡灰色の須恵質の胎土に淡緑色釉を全面に施す。見込みに段を巡らす。

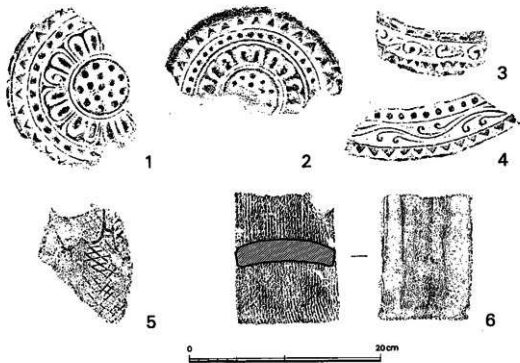
### 瓦類 (第64図・図版65)

軒丸瓦 9点、軒平瓦17点、文字瓦 1点、製斗瓦 1点と丸瓦・平瓦類が出土している。

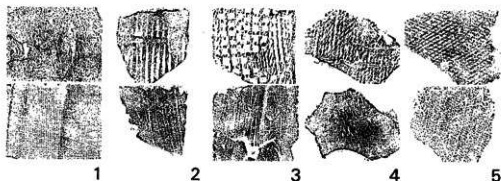
第64図 1は、老司Ⅱ式軒丸瓦で3点が出土している。2は複弁八弁蓮華文軒丸瓦で4点が出土している。軒丸瓦では、この他に外区の珠文帯だけの破片が2点あるが平安時代のものである可能性が高い。

4は老司Ⅱ式軒平瓦で14点が出土している。図示した瓦は8cm程の段顎に作られているが、顎部・平瓦部とも縄目痕を残している。顎の長さ・縄目痕は他の瓦でも同様である。3は鴻臚館Ⅰ式軒平瓦で3点が出土している。顎の長さは、5.5cm程であるが顎の深さは老司Ⅱ式に比較してやや浅い。3については、叩打痕は明瞭でないが他の資料では縄目痕が認められる。1～4までの軒瓦は、天平期の木簡を出土したSD2340からも出土している。

5は斜格子の叩打具に「〇〇瓦」と彫り込まれたもので破片では「瓦」だけが読みとれる。



第64図 第129次調査出土瓦拓影・実測図



第65図 出土平瓦拓影

6は3枚割の製斗瓦片である。

なお、第65図(図版65H1～H5)は平瓦片に認められる叩打痕を取り出した。1は凸面の1部に布目が残っている。2は、鴻臚館Ⅰ式軒平瓦に見られる平行線叩打痕である。3は、格子目と縄目の痕が認められる。4は、凹凸両面に縄目の痕があり厚さは4cmに近く怡土城出土の瓦に類似している。5は、斜格子目の瓦である。1～4は奈良時代、5は平安時代のものと考えている。

### 小 結

本次調査で、掘立柱建物3棟、溝4条を主な遺構として検出したが、過去に実施した第76次調査結果とともに考え合せ、若干の検討をしたい。

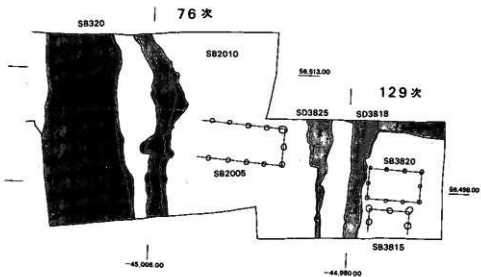
南北溝SD320は不丁官衙域と大橋の官人居住域を隔する溝であることはこれまで述べてきたところである。今回の調査地域は不丁官衙域の南端に近く、官衙域の南限となる御笠川とは近接した距離にある。今回検出した建物3棟はこれまでの調査で検出した官衙の建物の最南端近くに位置している。3棟の建物の柱掘形はいずれも円形で、柱の径も大きくはない。建物の年代及び方位からみて、同時存在していたとみられ、柱穴出土の土器から、この建物の下限年代は9世紀前半代とすることが可能である。従来の官衙建物の柱掘形の認識からすると、今回検出の建物は特異と云える。すなわち、柱掘形と建物の規模からすると3棟の建物は官衙の建物とは必ずしも云い難い。

SB3815・3820の西側に位置する2条の溝SD3825・3835で挟まれた部分(SX3838)は道路状を呈しており、出土遺物や方位の上からもこの3棟の建物と同時に存在していたことはほぼ確実である。この2条の溝は発掘区北端で東西方向溝SD3836と合流し「T」字状になっている。SX3838やSD3825・3835の性格については必ずしも明らかでないが、小区的機能を有していた

と考えることも可能である。

本次調査地の隣接地については、未調査の部分が多く、現段階ではこれらの遺構を性格付けるまでには至っていない。今回、特に出土遺物に焼塩壺が多量出土した事は注意され、この遺構の性格を考える一つの資料になるものと云える。本次調査の意義付けは今後の調査に俟つところが大きい。位置的に官衙域の南端部であることや、8世紀後半～9世紀前半代にあたること等を考慮すると、官衙に付属する生産的な施設がこの一帯にあったと推定することも可能ではなかろうか。

註1 九州歴史資料館『大宰府史跡、昭和56年度発掘調査概報』 1982



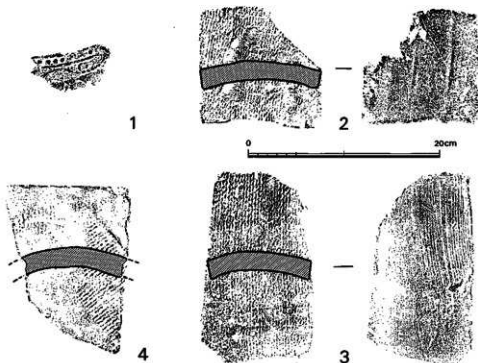
第66図 第76・129次調査遺構概念図

#### 4. 第131次調査

調査区は、第58次調査区(1978年調査)北側・第73次調査区(1980年調査)の東側に位置する。第58次・第73次調査ともに大宰府政庁前面の朱雀大路に関連する遺構の検出を目的とした調査であったが、顕著な遺構の発見もなく粘土を採取したと思われる土壌状の掘り込みが調査されている。この粘土採取が行なわれた時期に関しては出土遺物から13世紀後半以降と推定されている。発掘調査では、バックホーを使用して遺構面まで掘り下げ、一部人力による遺構検出を行ったが前記の2つの調査と同様粘土採取の痕を調査区全面に認めたので出土した瓦類を採集して埋戻した。調査区は、太宰府市大字観世音寺字日吉272-9である。

##### 瓦類 (第67図・図版66)

調査面積が狭い割に、瓦類の出土量は土納袋10袋程と多かった。なかでも縄目の叩打痕を残す瓦片が60パーセント以上であった。第67図は、第131次調査で採集した瓦である。1は、天平の木簡を出土したSD2340からも同范例が出土しているから大宰府政庁の第II期のものと考えてよい軒平瓦である。軒瓦はこの1点であった。2・3は3枚割の炭斗瓦片である。凸面は縄で叩打され、凹面には模骨痕・布目痕・糸切り痕を残している。なお、2の右端部には粘土の合せ目痕を認めるから粘土板桶巻作りによって作られたものである。4は叩打具の幅がわかる資料である。叩打具は長さ15cm以上・幅6.5cmで、縄は横方向に巻きつけられている。老司Ⅱ式



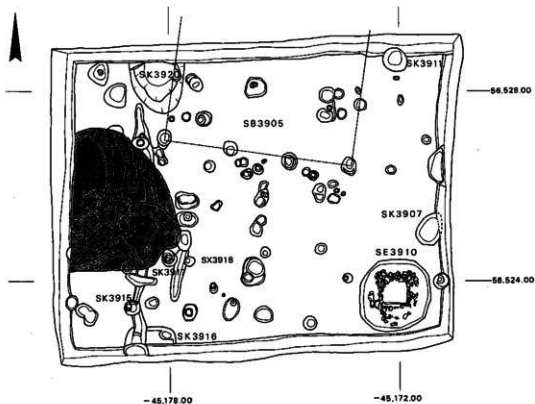
第67図 第131次調査出土瓦拓影・実測図

もしくは鴻臚館1式の平瓦に認められる縄目痕に近似したものと考えている。

## 5. 第133次調査

住宅建設に伴う事前調査である。本調査地は大宰府政庁前を東西に走る県道関屋線と、南の御笠川とに挟まれた地域にあって、政庁跡から約360m西寄りの地点に位置している。調査地の地番は大宰府市大字観世音寺字広丸341-1番地。調査地の周辺では、これまでに第29次調査を実施しているが、トレンチ調査であったため十分な成果をあげることができていない。今回の調査の目的は遺構の状況を把握し、周辺の歴史的状況を明かにすることにある。

発掘調査は対象地がすでに区画整理事業で盛土されていたため、まず盛土部分と表土を重機を用いて除去することから始めた。なお、面積が狭小なため排土は他所へ搬出した。調査は平成3年7月27日より遺構検出を開始、同年8月13日に補足調査を含めて全てが終了した。調査面積は88.30㎡。標高は31.50m前後。



第68図 第133次調査遺構配置図

## 検出遺構

検出した主な遺構には、掘立柱建物1棟・井戸1基・土壇4基があり、その他多数のピット、火床穴等がある。

調査区の層序は、表土下に厚さ10cm程の土器片を含む黒褐色土が堆積する。これを除去すると地山面に達し、遺構検出はこの段階で行った。

### 掘立柱建物

SB3905 発掘区の北寄りで検出した2間以上×3間の建物で北半部分は調査区外に延びている。掘形は規模が小さく0.3~0.4mの円形で、柱間寸法も0.6~0.7mとばらつきがある。西側柱の柱穴は土壇SK3920に切り込む。掘形、柱間の規模からみて2間×3間の東西棟と思われる。柱穴から少量の土師器、須恵器が出土している。

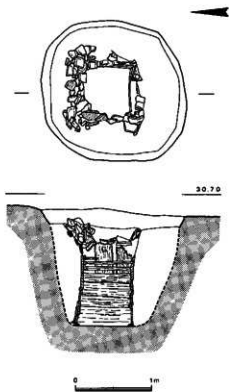
### 井戸

SE3910 発掘区東南隅で検出した。1.8m前後の隅丸方形プランを呈し、上面には土師器、瓦を多量に含む黒褐色土が覆っていた。特に瓦は井戸側の周囲にも多数混じていたがこれらは裏込めのためのもではなく、井戸廃絶後に投棄されたものであろう。井戸側は方形プランの横板井籠組。用材は柁目材、板目材があり、仕口の組み方も、下部は相欠きのほぞで組み、上部は凸ほぞをつけた一枚ものと、切り欠き材二枚で凹ほぞをつけたものを組合わせている。東側は補強のため縦板を裏側に立てて保持している。板材の長さ68cm。幅15~25cm。

### 土壇

SK3911 発掘区北壁の東寄りで検出した小土壇。径0.6m前後の円形プランを呈し、深さは0.45m。埋土中から土師器が出土。

SK3915 発掘区の西南隅部で検出した径0.4m、深さ0.2m、の浅い土壇。埋土には炭火物が充満しさらに少量の骨片も出土。それほど大きな土壇ではないが土師器、黒色土器等が数多く出土した。また土壇の壁周囲にそっ



第69図 SE3910実測図

て平瓦片が縦に並べられている。

**SK3918** 発掘区の南壁西寄りで検出した東西長1.3m、南北長0.6m以上の浅い隅丸長方形土塼。須恵器、土師器の細片が出土。

**SK3917** 発掘区の西寄りで検出した長さ0.4×0.45m、深さ0.25mの浅い土塼。SK3915同様平瓦片を円く並べて立ててさらにその周囲に黄褐色粘土を巻いている。この平瓦片は接合すると通常の約2分の1ほどになる。この瓦は二次的な火熱を受けて赤変しており、柱穴の根固めと考えるより鑄造に関係する炉の下部構造かもしれない。

**SK3920** 発掘区北壁寄りに位置し、規模が1.45×1.4m以上、深さ0.4mをはかる長円形土塼。北半分は発掘区外に延びる。掘立柱建物SB3905の柱穴に掘り込まれている。埋土中から奈良期の土器が出土。

#### その他の遺構

**SX3918** 発掘区の西南部にあって、SK3917のすぐ東側で検出した径0.25m、深さ0.15mの小ピット。ピットの中央部分に径8cmの範囲で炭火物が認められた。周辺の遺構からは鑄型片が出土しており、火床穴ではないかと考えられたため半載して断面を観察した。その結果炭火層が3cm程堆積していた他には周囲や埋土が焼けた痕跡は認められなかった。確実に火床穴とは認定し難い。

**SX3919** 発掘区西壁付近での検出した暗褐色土の埋積した浅い落込みで西側は発掘区の外である。検出時の規模は南北長3.8m、東西長3.2mであった。完掘すると底面はいくつかの土塼が集合したような状況となった。もっとも深い部分で0.15mを測る。埋積土の中から土器、白磁の他、鑄型片が出土している。

#### 出土遺物

##### SE3910出土土器・陶磁器（第70・71図・図版67・68 別表1）

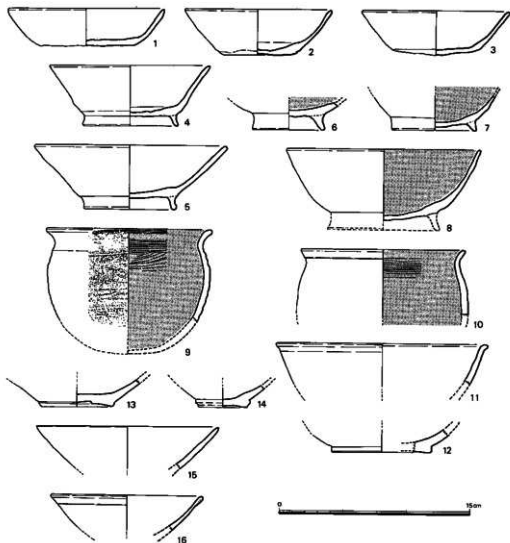
##### 土師器

杯（1～3） 口径11.4～12.3cm。器高3.0～3.6cm外底部はへら切り未調整。1は橙褐色。2・3は灰褐色を呈する。法量・形態から10世紀前後のものである。

椀（4・5） 体部が直線的に立ち上がるタイプ。器面の摩滅が著しく調整は定かでない。

甕（17～24） 17～20は煎熱用の支界盪式製塩土器である。外面は平行叩き目の条線にこれと直交する木目を残すいわゆる麻状叩き目があり、内面には細かい平行当具痕が不定方向に認められる。色調は火熱を受けた特有の茶灰色である。17のみ内、中、外面が黒化している。21～24は口縁部が外反する通有のもの。内面へら削り、外面に横ナデを施す。外面には煤が付着しており煮沸具であったことが解る。

竈（25） 竈焚き口部の側面下部である。側面での罫の出は約3cm。本体外面に平行叩き目



第70図 SE3910出土土器・陶磁器実測図

が認められる。内面は火熱を受け赤変している。

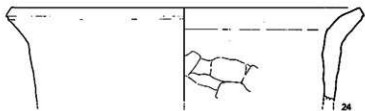
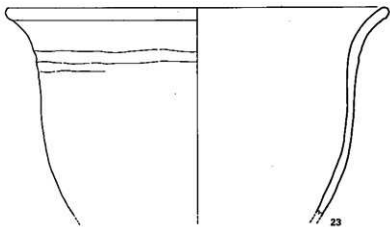
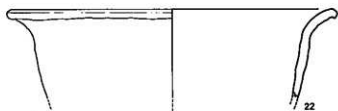
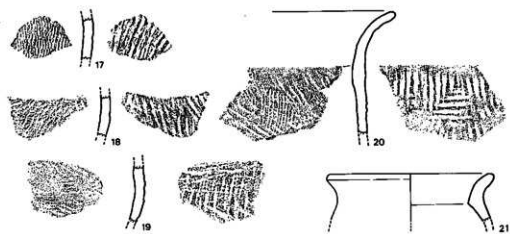
#### 黒色土器

碗（6～8） 内面のみ焼したものである。8のみ口縁部外面の1.5cm下まで黒化している。外面はいずれも灰白色を呈す。調整はいずれも摩滅著しく定かでない。

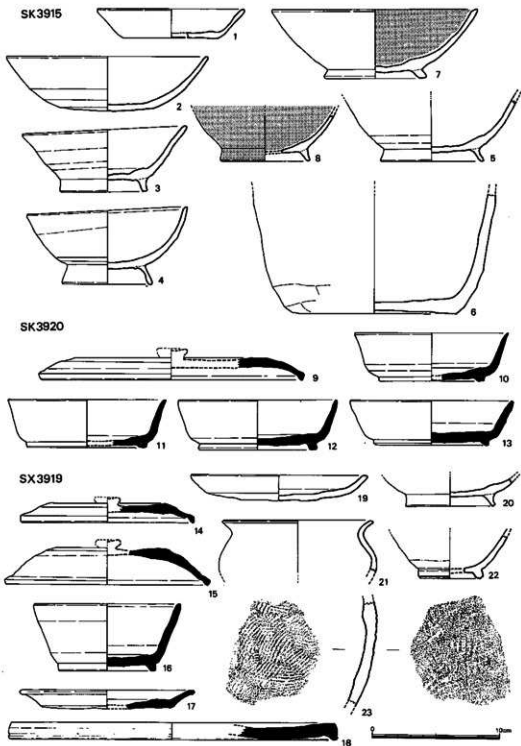
甕（9・10） 口径が9は12.9cm、10は13.0cmに復元できる小形の甕。内面のヘラミガキは細かく密であり、外面にも粗いヘラミガキを施す。外面に煤付着。

#### 灰釉陶器





第71图 SE3910出土土器实测图



第72图 SE3915・3920、SX3919出土土器实测图

碗 (11) 口縁部をやや外反させたもの。小片のため口径は確定的でない。黒色粒子が混入した灰白色の胎土で、口縁部から内面に斑状の灰緑色釉がかかる。

#### 緑釉陶器

碗 (12) 灰白色の硬質の胎土に淡緑色釉をかける。見込みに沈線状の段が巡り、部分的にミガキの痕跡がある。風化し釉は大部分剝離している。

#### 青磁

碗 (13~15) 全て越州窯系青磁である。13は蛇ノ目高台。胎土は灰白色の精良なもの。高台は露胎、釉は風化し剝落が著しい。14の高台は糸切り離しのままで残存する。外面は露胎となる。内面には黄緑色の釉をかける。胎土は黒色粒子を混ぜた淡灰色のもの。15は灰白色の胎土に灰緑色の釉が薄くかかる。

#### 白磁

碗 (16) 邢窯系白磁の碗で口縁部を折り返して小さな玉縁をつくる。釉は純白で光沢がある。細かな貫入が認められる。小片であり口径については不確実。

#### SK3915出土土器 (第72図・図版68 別表1)

#### 土師器

杯 (1・2) 1は体部が直線的に開くタイプで器高が低い。底部はへら切り離しのまま。2は体部が内彎して立ち上がるタイプ。体部中位より下部は全て回転へら削りを施す。内外面に通有のへらミガキは施されていない。

碗 (3~5) 3は体部が直線的に立ち上がるタイプ。外底部はへら切り離しのまま。他はヨコナデ・ナデ。4・5は体部が丸味を有しやや長めの高台をそなえたもの。体部下半は強いヨコナデを施し、外底部と体部下位を回転へら削りする。3は灰白色、4は灰褐色を呈し、口縁部に油煙が一部附着する。5は内面が煤で黒くなる。

鉢 (6) 底部が深めの器形になるもので体部の最下位は手持ちのへら削りを施し丸味を帯びる。外底部は回転へら削り、体部はヨコナデを施す。精良な胎土を用い淡橙褐色を呈す。

#### 黒色土器

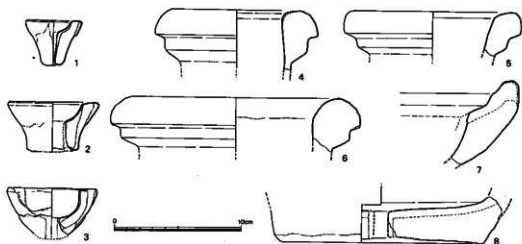
碗 (7・8) 7は内面のみ、8は内外面を焼している。ともに摩滅が著しく調整が明瞭でない。

#### SK3920出土土器 (第72図・図版68 別表1)

#### 須恵器

蓋 (9) 天井部を欠失する。外天井部は回転へら削り調整。他はヨコナデ・ナデ。胎土は精良で灰白色を呈す。

杯 (10~13) 口径12.1~12.9cm。器高3.6~4.0cm。やや浅めのもので高台を底部外縁より内側に貼付する。外底部へら切り未調整、他はヨコナデ・ナデ。



第73図 第133次調査出土銅型実測図

**SX3919出土土器・陶磁器 (第72図・図版68 別表1)**

蓋 (14・15・18) いずれも縁部を欠失する。14は外天井部を回転ヘラ削り。15はヘラ切り  
 離しのみである。15の内天井部は非常に平滑である。18は口径が26cmほどに復元できる器内  
 の厚い大形のもの。器形は他に例を見ないもので水平な天井部に短く突出する口縁部がそなわ  
 る。外天井部から口縁部外面にまで回転ヘラ削りを施し、内面はヨコナデし、非常に平滑とな  
 っている。当初は釜とも考えたが、外天井部に焼成時の灰を被っていたことから蓋と判断した。  
 興味深いことに外天井部には灰を被っていない箇所が円形に残されている。その径は約7.3cm  
 で、おそらく小形品をこの上部に載せて焼成したものと思われる。残念ながらこの資料が8分  
 の1の破片であるのでその個数については定かでない。

**土師器**

皿 (19) 底部は水平とならず凹凸が著しい。外底部はヘラ切り未調整。板状圧痕を有す。

甕 (23) 外面に1cm幅に2本の粗い平行叩き、内面には1cm幅に5本の平行当具痕が認め  
 られる。玄界灘式製埴土器である。外面の叩きには条線に直交する原体の柁目が浮きでている。

**その他の遺構出土土器**

図示していないが、発掘区西の細い南北溝より出土した精製の鉢がある。口径23cmに復元で  
 きる。器面は摩滅しており調整不明。また、発掘区の東壁にかかったビットから出土した口径  
 26cmに復元できる鍋形に近い器形の甕がある。これは口縁部と体部外面に細かい刷毛目を施し、  
 内面は横位のヘラ削りしたもので、外面には煤が付着している。

**土製品**

銅型 今回の調査では形状が判明する銅型と思われる破片が約20点ほど出土している。残念

ながら鑄面の保存状態が悪く、製品を特定できるものは少ない。発掘区内では、こうした鑄型と直接に関連する鑄造遺構は検出していない。出土状況を見るとこれらは発掘区西寄りの小土壙SK3915・落込み遺構SX3919に廃棄されていたものである。SX3919からはフイゴ羽目も併せて出土していることから周辺に鑄造工房があったものと考えられる。なおSK3915・SX3919の鑄型は同一品であり、出土土器の時期も同じであることから、同時期の所産であるのはまちがいない。そのためここでは一括して取り扱うことにする。

1～3は截円錐形をなす同形態のもので、鑄面は図の上面が開口し、半球形に近い形状でカーブする。底部の中央からさらに細かい円柱状の孔を通して外底部に至る。鑄型の上面は平坦につくる。この平坦面は中子を固定する幅置きとは考えがたく同形態をなす合せ外型の接地面とみなされる。下部の小孔は製品の一部となる鑄面ではなく、ロクロによる挽型の茎を通す孔と考えられる。さて、製品は上述したごとく同形態の合わせ型であることから、外観は算盤玉様の形状になるものと思われる。1は上面径約4.5cm、下端径約2.2cm、長3.6cm。鑄面の上面径3.0cm。茎径約0.8cm。粗真土・仕上げ真土からなり、仕上げ真土は0.1～0.3cmの厚さである。鑄型外面に上下の合わせ型を固定した際の真土様の粘土が付着している。

4～8は同種製品の鑄型で対となる内型と外型が出土している。ただし形態上対とみなされるのみで、破片相互は合致せず、さらに、破片から復元できる大きさにばらつきがある。少なくとも法量から三種以上に分かれそうである。製品は口縁部に段を有す蓋形に最も近く、形状から、釘かくしではないかと思われる。

4～6は法量を違える同一形態の内型である。4は12.8cm、5は14.0cm、6は19.6cmに径を復元できる。平面形状が環状となっている。鑄面はこの場合当然外側になるがすでに剥落しており正確な形状を知ることはできない。仕上げ真土の剥がれた外面は丸みを有す上面から二段以上の段を設けながら下方に向い、その分厚味を減じている。真土には多量の砂粒、スサ、糠殻を混じえ、灰白色を呈す。真土内部は黒色化している。

7・8は内型に対応する外型で、鑄面となる内側に2段の段を設け内彎して下方へ至る。砂粒、スサ、糠殻を混入した粗真土と砂粒のみ混入した中真土が識別できる。仕上げ真土は剥落しているが残されているものは精良な土を用いている。外側には粗真土と中真土を接着させるための粘土が張られている。8は下端径16.2cmの扁平なもので、欠失する上部は7と同様の形状に連続すると考えられる。中心部には径が約2.0cmの孔が貫通している。成形する際の引型板の心棒を通す孔と思われる。鑄型に用いられた粗真土は中心付近で1.5cmの厚みを持ち、中真土は0.6cmの厚さで張られている。

#### 瓦類

平瓦(1) SK3915から出土したもので、狭端側約2分の1が残る。狭端幅約2.4cm。凸面は縦方向に縄叩き目が、凹面は粘土板未切り痕と布目痕が顕著である。側端は両側とも未調整。焼

成は軟質。元来黄白色を呈していたものが、二次的な熱を受けて、特に凸面が赤く変色する。

## 小 結

今回の調査は宅地建設予定地内の遺構の状況を把握することを主眼において実施した。周辺地域は奈良・平安期の官衙を中心とした建物群が密に存在する政庁前面域に位置している。これまでの調査成果に依れば、この政庁前面域は官衙域、上級官人の居宅域といったそれぞれの地域が溝によって区画され、いくつかのブロックから成り立っていることが判明している。今回の調査地はこの内の広丸地区官人居住域に大きく含まれている。広丸地区官人居住域もこれまでのところその様相がほとんど明らかとなっていなかった。今回は調査対象地が小範囲であったため当ブロック内での利用形態の一端を僅かに把握できたにすぎないが、周辺での今後の調査にそなえて簡単に検出遺構をまとめてみることにする。

### 第Ⅰ期（8世紀後半～末）

掘立柱建物SB3905、土壇SK3916・3920がある。このうち調査区北半で検出したSB3905は今回唯一の建物であるが、その平面規模、柱掘形規模のいずれもがこれまでに官人居住域で検出した建物と比較したとき非常に貧弱な印象を受ける。また、棟方位も周辺で検出した同時期の建物が真北近いのに比べて大きく振れている。したがって、周辺の建物と同様の性格を考えることはできない。

### 第Ⅱ期（9世紀後半～10世紀初頭）

井戸SE3910、小土壇SK3915、落込み状遺構SX3919がある。出土した遺物を見るとSE3910が後出する様相を持っているが、井戸廃絶期のものであることから、ここでは同時期の範疇に入れておく。

今回、SK3915、SX3919からは釘隠しと考えられる同形態の鋳型が出土している。この地に鋳造工房が存在していたのかも知れない。ただ、こうした鋳型を含む鋳造関係の遺物は奈良～平安時代の遺構からはこの地域のみならず広く各所で少なからず出土している。そうしてみると鋳造工房は一定の場所に固定しているのではなく、必要に応じて設置されていたのかも知れない。大宰府官衙のひとつである匠司の設置場所とも考え合わせると今後さらに検討を要する問題の一つであろう。

なお、今回出土した鋳型と同様の鋳型が昭和54年度に蔵司前で実施した第65次調査で出土している。共伴の土器は11世紀前後のものであり、今回のものはすくなくとも1世紀遡る資料である。

## 6. 第134次調査

本調査地は太宰府市大字観世音寺字不丁287-1番地に所在し、大宰府政庁跡の南西側前面に位置する。この地域は観世音寺地区土地区画整理事業地内にあり、本調査は宅地開発に伴う事前の発掘調査として実施した。調査面積は433㎡である。

### 検出遺構

検出した遺構は溝2条と調査区全域にひろがる黒色粘土採取のための不整形の穴の集合であり、建物遺構・柱穴等は皆無であった。調査区の基本層序は盛土→耕作土→床土でその下部がすぐに遺構面となる。表土からの深さは調査区北側で40cm程、南側で60cm程であった。盛土・耕作土の除去および埋めもどし作業には重機を用いた。

### 溝

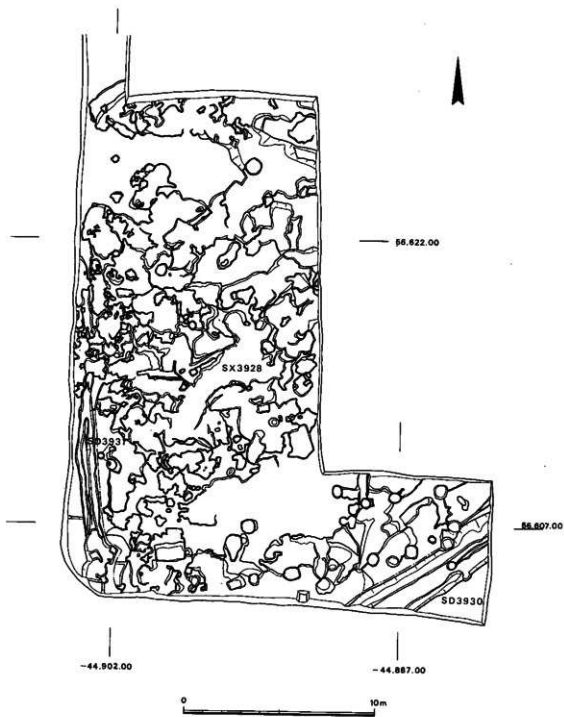
**SD3930** 調査区の東南端で東北-西南方向に流れる溝である。溝は層位的にみると3期にわたっている。当初の溝は幅220~250cm、深さは35cm程を測る。土師器片・須恵質土器片・陶磁器片・瓦片等が出土した。次には当初の溝の南端に寄って重複した溝があり、溝幅は70cm程、深さは30cm程を測る。遺物の出土はなかった。この上層には区画整理事業前に存在した道路の側溝が重機によって抜き取られた痕跡があった。したがって当初の溝、その次の溝も本来は道路の側溝であったとすることができる。

この溝は粘土採掘穴を切って作られており、溝内から出土した白釉黒釉陶器等がこの溝のつくれた年代の一端を示すとともに粘土採掘穴の下限を示すものとして留意したい。

**SD3931** 調査区の西南端に位置する南北に走る溝である。幅は80~100cm、深さは15cm前後を測る。溝の北端は土壌状になり深さは20cm強とやや深く、発掘区西南端の検出した溝の南端も不整形の土壌状となっており深さは50cm程を測る。この溝は粘土採掘穴を切って作られており、溝両端の不整形土壌より出土した白磁片がその年代の一端を示すものとみてよからう。

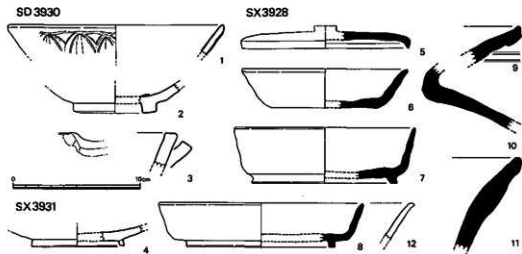
### 黒色粘土採掘穴

**SX3928** おそらく瓦用に用いられると考えられる黒色粘土を採取するために掘られたもので、形は不整形で深さもまちまちであり、相互の重複関係も不明であったので一括してSX3928とした。深さは浅いものでは10cm程、通常は20cm程のものが多く、調査区の南端では45cm程とやや深くなっている。出土遺物は青磁の小片1点、白磁片1点の他は須恵器・瓦ともに8世紀代のものが主であり、この黒色粘土採取がいつ頃行なわれたかは周辺の同様遺構のあり方とも合せ考える必要がある。



第74図 第134次調査遺構配置図





第75図 SD3930・3931、SX3928出土土器・陶磁器実測図

#### 出土遺物

##### SD3930出土土器・陶磁器（第75図・図版70）

###### 青磁

碗（1） 体部に鎬連弁文を浮き彫りにする。胎土は灰色で淡緑色の釉を施す。龍泉窯系。

###### 白釉黒軸陶器

碗（2） 白色の胎土で内面に白釉、外面に黒褐色の釉を施す。高台畳付は露胎となる。見込みには砂目が残る。復元底径6.6cm。ベトナム陶磁と考えられる。

###### 須恵質土器

鉢（3） 片口鉢の口縁部の破片である。灰色を呈し、焼成はややあまい。

##### SD3931出土土器（第75図・図版70）

###### 灰釉陶器

皿（4） 明灰色の胎土に灰色がかかった透明の釉を施す。体部外面と高台部は露胎となる。高台の内側には段をもつ。復元底径7.4cm。

##### SX3928出土土器・陶磁器（第75図・図版70）

###### 須恵器

蓋（5） 天井部は低く、口縁部は断面三角形になる。天井部外面には回転へら削り調整を施し、天井部内面はナデ調整する。

杯（6～8） 無高台の6と有高台の7・8がある。6の体部は開き器壁が厚い。底部外面は回転へら削り調整、底部内面はナデ調整する。7の底部外面はへら切り未調整で底部内面は

ナデ調整。

甕(9~11) 9は口縁下部に二条の沈線をもつ。10は体部外面に平行叩き痕、内面には当具痕が残っている。11は焼成があまく、風化が著しいため調整不明。

白磁

柄(12) 白色の胎で、濁白色の釉を施す。口縁部は上面を平坦にする。

石器(図版70・a)

石鏃 発掘区の北部の暗茶色粘質土から出土した。基部の挟りは深めで鍔形となる。長さ2.5cm、最大幅1.5cm、最大厚0.4cmを測る。安山岩製。

瓦類(第76図、図版71)

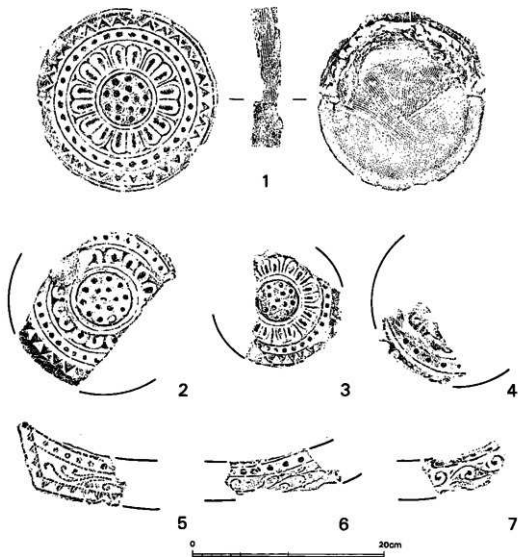
軒丸瓦9点、軒平瓦17点、鬼瓦片2点と丸瓦・平瓦片が出土している。

第76図1は、老司Ⅱ式軒丸瓦である。3点出土している。図示した瓦は、瓦当裏面に布目痕を幅2.5cmほどの器具で丸瓦を瓦当に接続した後に整形している。さらに下端部は突帯状に作られておらず、指によると思われる浅い溝状の形状となっている。丸瓦の接続法は、丸瓦先端に縦にキザミ目を入れた痕跡が上端に認められるが、丸瓦を受けた痕跡の下部に櫛状器具で連続的に浅い穴をつけている。また、丸瓦を接続したのち、接合部分の整形のため瓦当外側の上半部だけを裏面整形に使用した器具で整形している。2は大宰府政庁前面で比較的多く出土している瓦で、今回の調査でも5点と最も多い。複弁八弁蓮華文軒丸瓦で老司Ⅰ式軒丸瓦の瓦当裏面下部に見られる突帯状の境を作っている。3も複弁八弁蓮華文軒丸瓦である。外区珠文帯、鋸歯文帯が蓮弁部分より1段高く作られている。瓦当裏面は2と同様下部に突帯状の境を作るものもあるが、図示したものは平坦に作られている。3点出土。4は鴻臚館Ⅰ式軒丸瓦で2点が出土した。5は老司Ⅱ式軒平瓦で6点出土している。図示したものは、段頸で頸の長さが5cm程である。同時に出土したのものには8cm程と長いものもある。図示したものには縄目痕などはすり消されている。7は鴻臚館Ⅰ式軒平瓦で1点出土している。平瓦部に平行線の叩打痕がある。6は均整唐草文軒平瓦で上帯は珠文、下帯は鋸歯文である。2点出土。

この他に、鬼面の小形鬼瓦の破片が2点出土しているが、全体の形状は窺えない。図版71の8がこのうちの1点である。

## 小 結

黒色粘土探掘穴は不庁地区を中心にして第83次、第84次、第87次、第131次と今回の第134次等で出土している。第83・84・87次調査区域は不庁地区官衙域として知られており、今日まで多くの掘立柱建物および不庁地区官衙と政庁前広場とを画する南北溝SD2340等が検出されている。掘立柱建物は8世紀前半・中頃から9世紀にかけて営まれており、黒色粘土探掘穴と重複する建物のなかで最も新しいものはSB2515で9世紀代に位置付けられている。又黒色粘土探掘



第76図 第134次調査出土軒瓦拓影

穴を切って作られたものは上記の2条の溝である。溝SD3931は出土した白磁片から上限は11世紀後半に位置付けられるが、時期を推定するには資料不足の感は否めない。SD3930は出土の白釉黒陶陶器等の示す年代から14世紀代におけるものと考えられる。したがって黒色粘土採掘穴は上限を9世紀代、下限を14世紀代における。第134次調査区域は政庁前広場と考えられている区域であり、前述の掘立柱建物群、広場等の不庁地区の主要な部分でおそらく瓦用と考えられる黒色粘土を採掘したことは緊急やむを得ざる事態の場合か、不庁地区官衙域、政庁前広場が

その役目を失なった後かということになろう。出土遺物は8世紀代のものが多いが、わずかではあるが11世紀後半代の白磁片が出土しておりこの時期が一つの目安となるかも知れない。また10世紀後半以後に政庁周辺に瓦窯が築かれており、これらとの関連も合せて今後さらに検討を加えたい。

溝SD3930は今日まで使われていた道路の側溝であり、東西・南北方向の区割りにこのような東北から西南に走る道路が出現し始める時期が14世紀頃であることを示したことの意義は大きい。第72次調査で検出された溝SD554も現存の道路側溝と重複しており、中世末～近世頃の溝とされている。又第78次調査で検出された溝SD2115も現存道路の側溝と重複しており出土遺物からは15世紀代に位置付けられる。このような東西・南北方向に走る道路とは別個に現存する斜方向ともいえる道路の出現が14～15世紀頃にあり、現存まで継続利用されたことをいくらかの調査で確認できたことは興味深い。

註

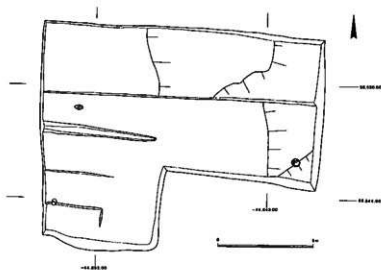
- 1 九州歴史資料館『大宰府史跡 昭和58年度発掘調査概報』1984
- 2 九州歴史資料館『大宰府史跡 昭和59年度発掘調査概報』1985
- 3 今回報告
- 4 九州歴史資料館『大宰府史跡 昭和55年度発掘調査概報』1981
- 5 九州歴史資料館『大宰府史跡 昭和57年度発掘調査概報』1983

## 7. 第136次調査

本調査地は住宅新築の申請が出たため事前の発掘調査を行った。調査地番は太宰府市大字観世音寺字不丁281-2。調査面積は150㎡。

当該地は昭和57年度に調査した第81次調査地の南に接する位置に当たる。第81次調査では2間×8間の身舎部に四面の廂がつく南北棟の掘立柱建物SB2300を検出している。従来、政庁前面の広場と考えていた場所において、このように規模の大きい建物が存在することが明らかとなっている。今回はその南側にあたるため、さらに別の建物遺構の有無を確認することを一つの目的として調査を実施した。調査は平成3年10月7日に重機を投入して表土・盛土を剥ぎ、10月18日には写真撮影・平板測量を行った。また、この日より第137次調査を開始した。10月23日には土層図作成と写真撮影等の補足調査を行って調査を終了した。

調査の結果、発掘区の東南隅部で北東から南西方向の落ちを検出した。この落ちは区画整理以前の地図にも著れており、御笠川の氾濫源を示している。また、地山は発掘区の東寄りで東に落ち、壁際は谷となっていた。この谷は深いところで落ちの面から50cmほどを測るが、黄褐色の粘質土によって人為的に埋められ整地されている。整地の時期については出土遺物から判断することはできないが、先の第81次調査で検出された谷SX2318と一連のものと考えれば、政庁第1期の直前の地業となる。そしてこの面には遺構がまったく営まれていないことから、広場はさらに南へ広がることを確認することができた。また、これより南は先に触れたように、御笠川の氾濫源になるため建物などの遺構の残存率はきわめて少ない。



第77図 第136次調査区実測図

## 別 表

第1表 土器計測表

器種	挿図 番号	番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部の ナデの有無	板状圧痕 の有無
						ヘラ	糸		
<b>SB3800A (第126次調査)</b>									
須恵器 杯		5	2	(13.6)	(10.2)	3.8			
<b>SB3800C</b>									
土師器 皿	"	4	(10.0)	(7.4)			○		
須恵器 蓋	"	5	(13.4)						
<b>SA3755</b>									
土師器 皿	"	12	(6.4)	5.3	1.3		○		
<b>SD3715 (上層)</b>									
土師器 杯	"	6	2	(12.2)	(6.6)	3.6	○		
	"	3		(12.6)	(8.2)	3.9	○		
甕	"	4	(27.6)						
<b>SD3715 (下層)</b>									
土師器 杯	"	8	(12.4)	6.2	3.4		○	○	
	"	9	15.3	9.8	3.8		○	○	
皿	"	10	16.6		1.9		○	○	
<b>SD3787</b>									
土師器 皿 a	"	18	8.1	6.4	1.3		○	○	○
皿 b	"	17	(7.6)	(5.0)	1.6		○	○	○
<b>SK3792</b>									
土師器 甕	"	20	(28.2)						
	"	21	(31.0)						
<b>SK3770</b>									
土師器 杯	"	7	1	(10.4)	(7.0)	2.7	○		○
	"	2		(12.5)	(7.5)	3.4	○		○
	"	3		12.7	7.6	3.0	○		○
	"	4		12.6	7.6	3.0	○		○
	"	5		(13.0)	8.1	3.7	○		○
	"	6		(13.8)	7.0	3.0	○		
皿	"	7	(14.4)		1.4		○		
	"	8	14.6		1.8		○		
	"	9	(16.6)		1.6		○		
碗	"	10	(14.8)	(8.2)	6.4		○		
甕	"	12	(30.8)						
	"	13	(35.6)						
<b>SK3775</b>									
土師器 皿 a	"	8	7	7.6	6.4	1.2		○	○
	"	8		7.7	6.9	1.2		○	○
	"	9		7.8	5.8	1.1		○	○

器種	挿図 番号	番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部の ナアの有無	板状圧痕 の有無
						ヘラ	糸		
土師器 皿 a	# 8	10	(7.8)	(6.0)	1.1		○	○	○
	# 11	7.8	5.8	1.2		○	○	○	
	# 12	7.8	5.5	1.2		○	○	○	
	# 13	7.9	7.2	1.1		○	○	○	
	# 14	8.0	6.0	1.1		○	○	○	
	# 15	8.4	6.8	1.3		○	○	○	
皿 b	# 1	(6.2)	4.4	1.3		○	○		
	# 2	6.4	4.0	1.5		○	○	○	
	# 3	6.4	5.2	1.7		○	○		
	# 4	6.8	5.2	1.6		○	○	○	
	# 5	(7.0)	(4.0)	1.4		○	○	○	
	# 6	(7.0)	4.6	1.7		○	○		
杯 a	# 16	(11.6)	7.6	2.6		○	○	○	
	# 17	11.8	7.6	2.9		○	○	○	
	# 18	11.9	7.7	2.6		○	○	○	
	# 19	12.0	7.3	2.7		○		○	
	# 20	(12.0)	7.0	(3.0)		○	○	○	
	# 21	12.1	7.1	2.9		○	○	○	
	# 22	12.1	7.4	3.0		○	○	○	
	# 23	(12.4)	8.3	2.9		○	○	○	
	# 24	12.4	9.4	2.4		○	○		
	# 25	(12.4)	8.0	2.7		○			
	# 26	12.6	8.0	2.6		○	○	○	
# 27	(15.0)	(8.2)	3.6		○	○	○		
<b>SK3777</b>									
土師器 皿 a	# 29	(7.4)	(5.8)	1.2		○			
	# 30	(7.6)	(6.7)	1.7		○			
	# 31	(7.8)	(5.8)	1.2		○			
	# 32	7.8	5.0	1.3		○			
	# 33	7.8	6.5	1.7		○			
	# 34	7.9	3.6	1.3		○			
	# 35	(8.0)	(6.7)	1.8		○			
<b>SK3791</b>									
土師器 皿 a	# 9	1	7.2	6.0	1.2		○	○	○
	# 2	(7.6)	5.8	1.2		○	○	○	
	# 3	7.8	6.1	1.2		○	○	○	
	# 4	(8.0)	6.8	1.2		○	○	○	
杯 a	# 5	(12.4)	(8.8)	3.0		○	○	○	
	# 6	12.6	7.2	2.8		○	○	○	
	# 7	(12.6)	9.4	2.9		○	○	○	
	# 8	(12.6)	(7.7)	2.7		○	○	○	
	# 9	(13.4)	9.3	2.7		○	○		
杯 b	# 10	(13.4)	6.6	3.6		○	○		



器種	挿図 番号	番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部の ナデの有無	板状圧痕 の有無
						ヘラ	糸		
<b>SX3771</b>									
土師器 皿	#	9	11	5.9	3.5	1.1		○	
	#	12		6.4	4.3	0.9		○	
	#	13		6.4	5.1	0.9		○	
	#	14		6.8	4.9	1.6		○	
	#	15		7.2	5.4	1.0		○	○
杯 a	#	16	(12.4)	(8.2)	2.6		○	○	
<b>SX3794</b>									
土師器 皿	#	18		6.1		1.5	○		
	#	19		9.7		1.3	○		
	#	20		10.0		1.5	○		○
	#	21		10.0		1.7	○	○	
	#	22		10.2		1.3	○		○
	#	23		10.3		1.2	○	○	○
	#	24		11.0		0.9	○	○	
#	25		9.6	7.2	2.2	○	○		
瓦器 皿	#	26	10.6		2.1				
<b>茶褐色砂層</b>									
須恵器 蓋	#	11	1	(14.4)					
土師器 杯	#	2		(13.8)		4.0	○		
<b>第Ⅳ層黒色土層</b>									
土師器 皿	#	5		9.8		1.5	○		
	#	6		(10.1)		1.3	○	○	
	#	7		(10.2)		1.1	○		
	#	8		(10.4)			○	○	○
	#	9		(10.8)		1.4	○	○	
	#	10		11.2		1.5	○	○	
杯	#	12		11.7			○	○	
<b>瓦葺地層</b>									
土師器 皿	#	18		(9.4)		1.1	○		○
	#	19		10.4		1.4	○		○
杯	#	20		10.0		3.0	○	○	○
<b>褐色土層</b>									
土師器 皿 a	#	23		7.6	5.2	1.1		○	○
	#	24		7.8	5.7	1.2		○	○
	#	25		(10.0)	7.0	0.9	○		
杯	#	26		(12.2)	(8.8)	2.8		○	○
須恵器 皿	#	27		(10.8)	(8.8)	2.4			
<b>暗褐色土層</b>									
土師器 皿 b	#	12	1	6.9	4.2	1.3		○	

器種	挿図 番号	番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し ヘラ	米	内底部の ナアの有無	板状圧痕 の有無
土師器 皿 b	12	2	7.5	4.8	2.0		○	○	○
皿 a	#	3	7.6	6.0	1.1		○	○	○
	#	4	7.6	5.6	1.0		○		
	#	5	7.8	6.2	1.0		○	○	○
	#	6	(10.0)		1.3	○			
	#	7	(10.2)		1.3	○		○	
	#	8	10.2		1.2	○		○	○
	#	9	10.2		1.2	○		○	○
杯 a	#	11	11.4	7.2	2.9		○	○	○
	#	12	(12.6)	8.4	2.7		○	○	○
丸底の杯	#	13	14.9		3.4	○			
<b>黄褐色土層</b>									
土師器 皿 a	#	18	(8.6)	(6.6)	1.4		○		
皿 b	#	17	6.7	3.8	2.0		○		
<b>茶褐色土層</b>									
土師器 皿 a	#	24	9.2	7.2	1.5		○		
<b>SB2005 (第129次調査)</b>									
須恵器 杯	52	1		9.8					
皿	#	2	(17.6)	(14.4)	2.2	○			
	#	3	(20.0)			○			
<b>SB3820</b>									
須恵器 杯	#	4		(8.8)					
土師器 杯	#	5		10.3					
皿	#	6	(15.6)	(11.7)	1.8				
	#	7	17.6	(14.1)	1.7				
甕	#	8	(36.5)						
<b>SD3825</b>									
須恵器 蓋	53	1	13.7		1.8				
	#	2	(17.6)						
<b>SD3835</b>									
須恵器 杯	#	6	12.3	8.7	3.9				
<b>SK3813</b>									
須恵器 甕	54	1	(18.4)						
土師器 杯	#	2	(18.8)	(11.4)	3.6				
緑釉 皿	#	3		5.8					
	#	4		(7.4)					
<b>SX3830</b>									
須恵器 蓋	#	7	12.0		1.8				

器種	挿 番号	番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部の ナデの有無	板状圧痕 の有無
						ヘラ	糸		
須恵器 蓋	54	8	(14.2)		(3.1)				
	"	9	15.2		1.6				
	"	10	(21.0)		2.7				
	"	11	14.6		4.6				
杯	"	12	(11.1)	7.3	2.7	○			
	"	13	(12.8)	(9.4)	3.8				
	"	14	(14.4)	(11.3)	3.4				
	"	15	(14.8)	(11.2)	4.7				
	"	16		10.4					
鉢	"	20	(21.0)						
土師器 杯	"	21	14.7	8.2	4.1				
<b>SX3033</b>									
須恵器 鉢	55	1	(23.8)						
土師器 甕	"	2	(25.8)						
<b>SX3031</b>									
須恵器 蓋	56	1	(9.2)						
	"	2	10.6		1.65				
	"	3	(12.0)		1.9				
	"	4	13.5		1.4				
	"	5	(15.4)						
	"	6	(15.6)		2.7				
	"	7	(15.8)		2.3				
	"	8	(16.4)		2.3				
	"	9	(16.7)		2.7				
	"	10	(16.8)						
	"	11	(17.2)						
	"	12	(18.0)		1.3				
	"	13	(21.4)		2.3				
	杯	"	15	11.3	8.0	2.3	○		
"		16	12.9	8.4	3.6	○			
"		17	14.0	(8.9)	4.1				
"		18	(14.6)	(7.2)	4.1				
"		19	(14.6)	(6.4)	4.7				
"		20	(14.8)	(8.2)	4.7				
"		21	(11.8)	(8.2)	5.2				
"		22	(12.4)	(9.2)	4.2				
"		23	(13.9)	(10.3)	4.7				
"		24	(15.0)	(10.6)	5.7				
57		25	(18.3)	11.1	4.9				
"		26	(12.0)						
"		27	(12.6)		4.4				
皿		"	28	(13.8)	8.5	2.5			
	"	29	(14.0)	(11.4)	1.7				
	"	30	(16.4)	13.9	3.0	○			
	"	31	(18.0)		2.2	○			

器種	挿図 番号	番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部の ナアの有無	板状圧痕 の有無
						ヘラ	氷		
須恵器 皿	57	32	(18.6)	(15.2)	3.0	○			
	#	33	(19.3)		2.7				
	#	34	(19.9)	(16.6)	2.0				
盤	#	35	(31.8)		2.5				
	#	36			19.4				
高杯	#	37	(27.6)						
	#	38	(27.4)						
鉢	58	49	(19.2)						
	#	50	(32.7)						
	#	52	(33.8)						
甕	#	54	(19.6)						
	#	55	(17.8)						
	#	56	(18.8)						
	#	57	(11.2)						
	#	58	(21.0)						
土師器 蓋	59	60	15.3						
杯	#	61	8.3	5.2	4.4				
	#	62	12.3	6.3	2.7				
	#	63	16.0	(7.2)	3.8				
	#	64	16.5	8.7	4.3				
	#	65	(12.4)	7.0	4.0				
	#	66	(13.8)	(7.8)	3.8				
	#	67	(13.2)	(5.4)	2.7				
皿	#	68	(15.2)		2.9				
	#	69	(15.9)	8.7	2.5				
	#	70	(17.4)	13.0	2.0				
	#	71	19.1	15.8	2.7				
	#	72	(20.0)	(15.5)	2.6				
	#	73	23.3	18.6	4.5				
盤	#	74	(24.2)	(16.6)	3.4				
	#	75	(8.8)						
黒色土器A 蓋	#	77	(14.5)						
杯	#	79		5.7					
土師器 高杯	60	80	(29.0)						
塩杵	#	86	11.2		7.5				
	#	87	11.6						
	#	88	(12.0)						
	#	89	(11.4)						
	#	90	(13.5)						
土師器 甕	61	97	(13.2)						
甕	#	101	(22.2)						
釐地層									
須恵器 蓋	63	1	(17.2)						
杯	#	2	14.1	9.4	4.2				
皿	#	3	(15.4)	(12.0)	1.9	○			
土師器 杯	#	5	(12.6)	6.6	4.5				

器種	挿図 番号	番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し ヘラ	離し 米	内底部の ナデの有無	板状圧痕 の有無
土師器 杯	63	6	14.3	7.8	3.6				
<b>黄褐色土層</b>									
須恵器 蓋	"	9	11.6						
	"	10	(11.0)						
杯	"	11	(12.2)	(8.4)	3.7	○			
<b>SE3910 (第133次)</b>									
土師器 杯	70	1	(12.3)	7.6	3.0	○			
	"	2	11.4	6.2	3.6	○			
	"	3	11.7	6.9	3.5	○			
椀	"	4	(12.6)	7.7	4.8				
	"	5	15.3	7.3	5.1				
黒色土器A 椀	"	8	(15.3)						
甕	"	9	(13.0)						
	"	10	12.9						
土師器 甕	71	21	13.2						
	"	22	26.0						
	"	23	25.4						
	"	24	28.0						
<b>SK3915</b>									
土師器 杯	72	1	11.6	7.5	2.4				
	"	2	(15.8)	7.3	4.3				
椀	"	3	13.4	6.9	5.0				
	"	4	(12.6)	7.2	5.8				
黒色土器A 椀	"	7	15.2	8.1	5.6				
<b>SK3920</b>									
須恵器 蓋	"	9	20.6						
杯	"	10	12.1	8.4	3.8				
	"	11	12.4	9.0	3.8				
	"	12	12.6	9.4	4.0				
	"	13	12.9	9.1	3.6				
<b>SK3919</b>									
須恵器 蓋	"	14	13.6						
	"	15	15.9						
杯	"	16	11.6	7.2	5.3				
皿	"	17	(13.8)	10.6	1.5				
蓋	"	18	(26.0)	25.4	1.4				
土師器 皿	"	19	14.0	11.4	2.0				
壺	"	21	11.9						

第2表 観世音寺所蔵 講堂跡・回廊跡出土丸瓦計測一覧

整理 №	出土地点 遺構等	計 測 値											スタンプ	備 考
		A(全長)	B(瓦長)	C(瓦幅)	D(積巾)	E(積巾)	F(瓦厚)	G(瓦厚)	H(積幅)	I(積幅)	J(積幅)	K(厚)		
M-001	観世音寺 所蔵瓦片	34.6	31.3	3.3	16.9	16.9	13.1	10.2	6.0	6.0		2.0		
2		32.3	29.2	3.1	16.2	15.9	12.2	9.1	7.1	6.3	1.1	2.1		
3		31.7	27.7	4.0	16.4	15.7	12.5	9.6	6.0	5.5	1.7	2.3		
4		35.7	31.8	3.9	15.0	16.2	12.2	9.7	6.7	5.4		2.2		
5		37.1	31.8	5.3	16.2	17.8	13.9	10.4	5.8	5.4	2.1	2.7	第38図13	第31図
6		32.3	28.1	4.2	16.3	15.8	12.7	9.4	6.5	5.9	1.5	2.0	第38図21	
7		34.8	30.7	4.1	16.8	16.4	13.3	10.1	6.7	5.2	1.8	2.0		
8		32.6	29.5	3.1	15.8	15.2	11.6	8.9	6.1	5.3		2.1	第38図1	
9		31.9	28.4	3.5	16.3	15.5	12.4		6.3	5.4		2.9		
10		33.0	29.5	3.5	17.0	17.0	13.0		6.3			2.5		
11		(34.5)	(30.8)	3.7	(15.8)	16.3	12.8	8.8	(5.9)	5.2	1.8	2.5	第38図15に同	
12		35.3	31.3	4.0	16.4	16.6	13.3	9.9	7.3	5.1	1.7	2.3		
13		35.5	31.8	3.7	15.2	16.1	12.4	9.1	6.0	5.5	1.4	2.3		
14		31.9	28.7	3.2	15.5	15.1	11.4		6.3	5.3		2.7		
15		33.1	29.3	3.8	15.6	15.8	12.5	9.1	6.4	5.3		2.7	第38図1に同	
16		31.8	28.2	3.6	15.9	15.9	12.3	9.4	6.3	4.9	1.4	2.6		
17		33.2	29.8	3.4	16.7	16.7	12.9	8.4	6.7	6.1	0.7	2.1		
18		32.1	28.8	3.3	16.1	15.2	11.9		6.3	5.4		2.6		
19		28.3	26.8	1.5	13.6	13.7	10.3	8.1	4.7	3.9	1.6	2.0	第39図に同	
20		28.1	26.7	1.4	13.3	13.4	9.9	7.7	4.6	3.9	1.4	2.2	第39図	
21		28.6	27.3	1.3	13.6	13.7	10.1	7.8	4.9	3.9	1.5	2.0	第39図に同	
22		28.1	26.6	1.5	13.1	13.4	10.1	7.7	4.6	3.8	1.4	2.1	#	
23		35.4	31.4	4.0	15.5	16.7	13.5	10.3	6.7	5.3	2.0	2.3		
24		34.7	31.4	3.3	16.3	16.3	13.0	10.3	6.3	5.6	1.7	2.2		
25		29.3	26.0	3.3	15.6	15.6	12.6	7.6	7.0	5.7	0.7	2.0		
26		33.1	29.7	3.4	17.5	17.3	13.7	9.5	7.2	6.0	0.9	2.2		
27		34.6	31.8	2.8	16.5	16.8	13.3	10.3	6.0	4.7	1.3	2.3		
28		35.0	31.2	4.8	15.9	16.4	13.4	9.5	5.8	4.7		2.4	第38図15に同	
29		27.8	26.3	1.5	13.3	13.5	10.1	7.7	4.7	3.7	1.6	2.0	第39図に同	
30		28.1	26.8	1.3	13.2	13.3	9.9	7.3	4.4	4.3		1.9	#	
31		28.4	27.0	1.4	13.2	13.3	9.9	7.7	4.8	4.4	1.4	2.0	#	
32		33.3	29.6	3.7	15.4	15.8	12.0	9.0	7.6	5.8	1.3	2.3	第38図1に同	
33		33.4	30.0	3.4	15.9	15.2	11.5	9.0	6.3	5.2		2.5	#	
34		33.2	29.7	3.5	15.8	15.8	12.4	8.5	5.8	5.1	1.1	2.6	#	
35		33.1	29.3	3.8	15.9	15.7	12.3	8.9	6.7	5.3	1.2	2.6	#	
36		32.2	28.7	3.5	15.5	15.4	11.4	8.8		4.8	0.8	2.4	#	
37		33.0	29.5	3.5	15.7	15.2	11.9	8.4	6.3	4.7	0.7	2.6	#	
38		34.7	31.1	3.6	16.3	16.4	13.7		6.7	5.5		2.5		
39		32.0	28.0	4.0	15.8	16.0	12.9	9.0	6.7	5.0	1.5	2.8		
40		34.3	31.4	2.9	16.9	16.6	13.2		6.1	5.2	2.1	2.6		
41		34.8	31.0	4.8	16.8	17.1	14.4	11.5	5.8	4.8		2.0		
42		32.7	29.8	2.9	16.6	16.6	13.0	8.6	6.4	6.9	0.7	2.0		
43		32.7	29.5	3.2	16.2	16.4	13.3	9.1	6.7	6.0	1.0	2.0		
44		32.3	28.9	3.4	15.9	15.3	11.9		6.1	6.3		2.6		
45		33.4	29.8	3.6	17.0	16.6	13.1	8.2	6.6	6.3	0.7	1.8		
46		32.5	29.4	3.1	16.1	16.0	12.6	8.6	7.1	6.1	1.7	2.1		
47		32.0	28.1	3.9	15.7	15.7	12.4	9.3	6.3	5.4	1.6	2.9		
48		34.6	30.7	3.9	16.6	16.3	12.9	9.9	5.9	5.3	2.1	2.4		
49		32.1	28.5	3.6	16.0	15.9	12.1		6.2	4.9		2.4		
50		32.7	29.1	3.6	15.6	15.4	11.9		6.3	5.7		2.6		

整理 No	出土地点 道庁等	計 測 値											スタンプ	備 考
		A(全長)	B(丸丸長)	C(直線長)	D(隅巾)	E(積巾)	F(直線角)	G(直線角)	H(直線角)	I(直線角)	J(直線角)	K(厚)		
M-51	野見字 野見資料	34.6	31.5	3.1	16.6	16.1	13.0	9.7	46.1	5.3	1.7	2.5		
52		33.1	29.6	3.5	16.8	16.9	12.8	8.3	6.6	6.2	0.8	2.6		
53		33.0	29.8	3.2	16.8	16.6	12.7	8.7	6.6	6.4	1.0	2.3		
54		35.0	31.3	3.7	16.5	16.8	13.4		6.8	5.5		2.3		
55		32.6	29.5	3.1	16.6	16.3	13.1	7.9	6.4	6.2	0.8	2.1		
56		33.7	29.8	3.9	15.7	15.6	12.3	9.1	6.5	5.4	1.2	2.7	第39図1に同	
57		31.8	28.6	3.2	16.0	15.6	11.9	49.4	6.2	5.0	1.1	2.4		
58		28.5	27.1	1.4	13.3	13.3	10.0	7.4	4.8	4.1	1.5	2.0	第39図4に同	
59		30.7	28.9	1.8	15.2	14.4	10.8	9.6	6.3	5.2	1.8	2.5		
60	(29.9)	27.0	2.9	(17.1)	17.0	13.5						2.5		
61		33.7	30.5	3.2	15.7	16.1	13.2	10.9	6.9	5.4	2.7	2.6		
62		34.2	31.5	2.7	16.6	16.8	13.8	9.9	6.2	5.1	2.2	2.2		
63		31.7	28.5	3.2	16.3	15.5	17.5		6.3	5.4		2.8		
64		32.3	29.8	2.5	17.2	17.4	14.1	9.3	6.4	6.2	0.8	2.4		
85		31.3	28.3	3.0	15.9	16.0	12.9	7.3		5.4	0.6	2.1		
96		28.1	26.7	1.4	13.3	13.4	10.0	7.3	4.2	3.8	1.4	2.2	第39図1に同	
67		28.0	26.6	1.4	13.4	13.5	10.1	7.5	4.4	3.8	1.3	2.2	"	
68		28.0	26.6	1.4	13.5	13.5	10.1	7.6	4.5	3.8	1.5	2.0	"	
69		28.1	26.7	1.4	13.3	13.3	10.1	7.7	4.7	3.9	1.4	2.0	"	
71	発掘資料											2.4	第39図6に同	
72												2.5	第41図3	
73			30.2			16.5	12.5			5.4		2.5		
74		33.5	29.3	4.2		16.3	12.3			5.1		3.2		
75		37.3	31.8	5.5	17.3	15.6	12.0	10.8	7.6	6.6		2.4	第35図5	第29図
76		35.0	28.2	5.8	17.6	16.6	13.3	10.4	6.9	6.0	3.0	2.7		
77		33.5	28.8	4.7		15.6	12.0		6.2	5.0		2.4		
78		34.0	30.2	3.8		15.5	13.0	9.1		5.0	2.6	2.4		
79												2.3	第38図12	
80		35.7	30.9	4.8		13.2	10.2			5.2		2.2		
81		34.3	29.7	4.6		15.8	12.3			4.3		2.5		
82		37.4	31.0	6.4	16.6	15.6	12.7		7.7	6.0		2.0		
83		33.4	28.4	5.0	15.1				6.2			2.7		
84		34.5	30.6	3.9		16.1	12.3	8.9		4.5	2.1	2.9		
85		29.0			17.0	15.2	12.0		7.0	5.5		2.2		
86		36.5	31.0	5.5		15.9	12.4	9.9		5.0		2.7		
87		34.1	30.4	3.7		15.1		11.7		4.9		2.9		第30図
88		40.2	32.9	7.3	14.9	16.1			7.2	6.7		1.9		
89		30.7			17.5	17.9	14.1		5.7	5.7		3.3		
90												2.5	第40図A4に同	
91												2.3	第41図7	
92				4.8		16.5	12.6	8.4		6.1	1.1	2.1	第38図3に同	
93						17.3	13.7			5.6		2.6	SKM社	
94		36.9	32.0	4.9		17.9	14.1	10.8		5.4		2.6	第38図13	SKM社
95			31.8			16.0	12.8			5.7		2.4		
96			29.0			16.2	12.4			5.3		2.8		
97		34.2	29.9	4.3		14.7	11.7			4.6		2.7		
99		34.0	29.7	4.3	15.8	16.1	12.4		6.8	4.7		2.9		
100		34.2	30.0	4.2		15.3	11.6	9.1		5.4	1.7	2.5		
101		35.4	30.9	4.5		16.2		7.2	6.2	4.3	2.1	2.7		
102		34.7	30.1	4.6		15.4	12.0	9.0		4.7	2.0	2.5		

整理 №	出土地点 遺構等	計測値											スタンプ	備考	
		A(全長)	B(穴深)	C(深さ)	D(内径)	E(外径)	F(30度角)	G(50度角)	H(深さ)	I(深さ)	J(口深)	K(厚)			
M-103	発掘資料	33.7	30.0	3.7	15.7	15.9	12.1	9.5	6.6	4.7			2.5		
104		35.7	32.4	3.3	15.7				6.4				2.4		SK077出土
105				5.9		15.5	12.9			5.2			2.3		SK077出土
106		33.2	27.8	5.4	16.8	15.4	12.2	10.0	7.2	5.8	3.8		2.0		
107		37.5	31.8	5.7		17.1	14.1	10.5	6.6	5.5	1.6		2.9		
108		36.7	31.8	5.9	15.0	15.7	14.8		5.9	5.6	2.7		2.3		
109		31.5	28.3	3.2									2.2		
110			27.8		12.5								2.0		
111				3.5		16.3	12.7	10.1		5.3	1.7		2.1		
112		34.6	30.3	4.3	15.3	16.0	12.3		6.4	5.4			3.2		
113		35.5	31.1	4.4		15.1	12.1	8.2		4.9	2.6		2.4		
114		34.7	29.0	5.7		15.7	12.3	9.7		5.7	1.8		2.3		
115		36.0	29.7	6.3	16.5	14.8	11.6		7.7	5.4			2.4		
116				2.9									2.3		第40段F
117			28.2			15.8							2.4		SK077出土
118			30.1		16.1	16.2			6.3	4.8			2.8		
119													1.9		第39段3に同
120													2.0		#
121		41.7	35.6	6.1									2.7		
122		35.3	30.5	4.8	15.7	15.8				4.9			3.2		
123			29.7										2.7		
124				5.0									2.2		第39段3に同
125				3.7		15.7	11.5			5.1			2.7		
126		33.3	29.5	3.8	15.8				6.0				2.3		第41段1
127		32.9	29.1	3.8	17.4	16.5	13.2		7.2	5.4			3.2		第38段3 第40段A4 第41段4
128		34.3	31.6	2.7	16.4	16.6	12.8		7.4	5.5			2.4		
129		33.5	28.9	4.6		15.2	12.0	9.2		5.2	4.0		1.7		
130													2.2		第39段12に同
131		36.3	32.1	4.2	16.4	16.2	12.6		6.7	4.8			3.1		
132		34.3	29.9	4.4	16.0	15.7	12.3		5.9	5.3			2.8		
133		34.0	29.5	3.5	14.9	15.6	11.6	8.7	6.2	5.1	3.0		2.6		
134				3.7									1.7		
135		33.8	29.7	4.1	15.9	15.9	12.1		6.7	5.2			3.1		
136		34.0	30.1	3.9	15.4	15.2	11.8		6.2	5.2			2.0		
137			29.2			15.1	12.0			4.6			2.4		
138				4.0		16.6	13.6	8.0		5.1	1.4		2.7		SK077出土
139		33.9	29.9	4.0	15.5	15.2	11.5	9.1	6.0	5.2	2.7		2.3		
140		35.4	29.9	5.5		15.7	12.8	10.9		5.2	3.6		2.3		第35段6
141		33.9	30.0	3.9	15.6	15.3	11.7		5.6	4.8			2.7		
142		36.0	31.8	4.2		16.8	13.0			4.9			3.0		
143		35.5	30.0	5.5		15.5		12.9		6.1			2.0		
144		34.8	30.3	4.5		16.3	12.7	10.4		5.0	2.5		2.8		
145		36.9	32.2	4.7		15.6	12.6			5.2			2.0		
146		33.8	29.8	5.0	15.4	15.0	11.5	9.2	6.3	4.8			2.6		
147				3.9		15.8	11.8	9.3		5.5			3.0		

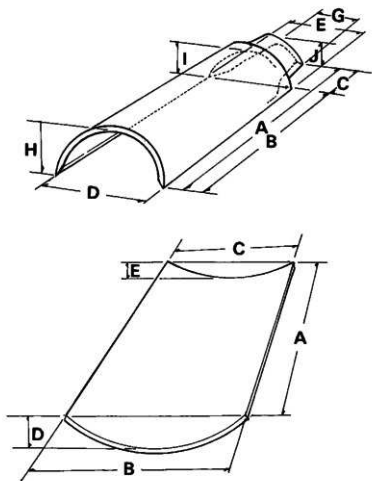


第3表 観世音寺所蔵 講堂跡・因摩跡出土平瓦計測一覧

整理 №	出土地点 遺構等	計 測 値						スタンプ	書目	点切	備 考
		A(全長)	B(位置幅)	C(後縁幅)	D(位置間)	E(後縁間)	F(厚)				
H-001	観世音寺 階層裏側	32.7	30.5	28.6	3.3	3.3	2.2	第38図26	ナシ	ナシ	
2		32.7	31.3	29.1	3.1	3.3	2.4	第38図26	〃	〃	
3		32.6	30.9	29.1	3.0	3.1	2.3	〃	〃	〃	
4		34.8	31.4	28.5	2.9	3.3	2.2	〃	〃	〃	
5		35.0	31.3	29.2	3.2	4.2	2.4	〃	〃	〃	
6		33.3	29.8	28.5	3.3	3.3	2.4	第38図7	〃	〃	
7		35.2	30.2	27.8	4.8	5.3	2.2	〃	〃	〃	
8		35.4	31.2	28.9	3.3	3.6	2.4	〃	〃	〃	
9		31.3	30.1	28.5	3.2	3.0	2.2	〃	〃	〃	
10		30.8	27.9	27.4	2.9	2.8	1.9	第38図24	〃	〃	
11		32.7	31.1	29.4	3.8	3.9	2.1	第38図25	〃	〃	
12		32.7	31.3	29.3	4.0	3.9	2.2	第38図23	〃	〃	
13		32.2	30.4	28.8	3.8	3.8	2.4	第38図22	〃	〃	
14		33.4	29.3	28.3	2.8	3.7	2.1	第38図6	〃	〃	
15		33.7	30.4	28.7	3.2	3.1	2.3	〃	〃	〃	
16		34.8	29.8	28.6	4.3	4.2	2.6	〃	〃	〃	
17		35.4	30.7	29.1	3.4	4.2	2.2	〃	〃	〃	
18		33.5	30.8	28.1	3.4	3.2	2.3	〃	〃	〃	
19		33.1	31.0	29.1	3.3	3.7	2.5	〃	〃	〃	
20		31.4	31.0	28.0	2.4	3.4	2.3	第38図26	〃	〃	
21		32.8	31.4	29.4	3.0	3.0	2.4	第38図26	〃	〃	
22		32.7	30.7	29.0	3.2	3.2	2.5	〃	〃	〃	
23		35.1	31.4	29.3	3.6	3.6	2.6	〃	〃	〃	
24		33.9	30.7	28.6	3.2	3.1	2.5	〃	〃	〃	
25		35.2	30.7	29.3	2.7	2.3	2.6	第38図25	〃	〃	
26		34.5	30.7	28.4	3.8	3.8	2.0	部分アリ	〃	〃	
27		31.9	30.6	29.1	2.8	3.5	2.3	ナシ	〃	〃	
28		34.7	30.6	29.3	3.0	3.0	2.4	〃	〃	〃	
29		34.7	31.1	28.8	2.8	3.4	2.4	〃	〃	〃	
30		35.0	30.7	28.3	2.9	4.0	2.1	〃	〃	〃	
31		31.7	30.7	30.5	2.5	3.1	2.2	〃	〃	〃	
32		35.4	31.0	29.3	3.2	3.1	2.5	〃	〃	〃	
33		32.7	31.5	29.7	3.5	3.2	2.4	第38図26	〃	〃	
34		34.9	30.5	28.6	3.2	3.8	2.5	〃	〃	〃	
35		35.1	30.7	28.9	3.3	3.4	2.3	第38図15	〃	〃	第34図
36		34.8	30.5	30.5	3.6	3.6	2.4	〃	〃	〃	
37		35.1	30.9	29.4	3.9	3.5	2.2	〃	〃	〃	
38		33.6	30.0	28.0	3.2	3.3	2.3	〃	〃	〃	
39		33.0	31.3	29.5	3.0	3.0	2.3	第38図22	〃	〃	
40		35.0	30.9	28.8	3.5	3.5	2.4	〃	〃	〃	
41		33.8	30.4	28.0	3.0	3.4	2.5	〃	〃	〃	
42		31.8	30.0	29.1	3.5	2.8	2.5	〃	〃	〃	
43		33.7	30.3	28.2	3.3	3.0	2.2	〃	〃	〃	
44		35.5	30.6	30.3	4.0	4.1	2.4	〃	〃	〃	
45		33.0	31.6	29.5	3.9	3.5	2.4	〃	〃	〃	
46		33.1	31.0	29.9	3.2	3.3	2.3	第38図26	〃	〃	
47		32.3	30.7	29.3	4.2	4.0	2.2	〃	〃	〃	
48		33.2	28.6	28.8	2.8	3.1	2.1	第38図8	〃	〃	
49		31.8	30.6	28.6	2.8	3.0	2.7	〃	〃	〃	
50		32.8	31.3	31.1	2.8	3.0	2.3	第38図22	〃	〃	

整理 No	出土地点 遺跡等	計 測 値						スタンプ	毒目	米切	備 考
		A(全長)	B(広さ幅)	C(後縁幅)	D(広さ幅)	E(後縁幅)	F(深)				
H-51	野宮宮宇 所屬資料	33.3	30.5	28.3	3.2	3.5	2.5		ナシ	ナシ	
52		32.1	30.5	29.5	2.8	3.2	2.6	第33図5に同	ナシ	ナシ	
53		31.9	30.2	≈29.1	3.3	3.4	2.4	ナシ	ナシ	ナシ	
54		34.8	30.8	28.9	3.6	4.3	2.5		ナシ	ナシ	
55		32.7	31.0	29.3	3.5	3.3	2.2	第33図5に同	ナシ	ナシ	
56		34.9	30.8	29.0	3.0	3.3	2.5		ナシ	ナシ	
57		33.2	29.0	28.0	2.7	3.4	1.9	第33図6に同	ナシ	ナシ	
58		33.0	29.4	—	2.7	≈3.5	2.2	ナシ	ナシ	ナシ	
59		34.6	30.3	28.5	4.2	3.4	2.4		部分アリ	ナシ	
60		33.2	29.8	29.1	4.8	4.2	2.5		ナシ	ナシ	
61		35.3	31.3	29.2	3.5	3.4	2.4		ナシ	ナシ	
62		29.7	26.6	25.5	2.9	2.1	2.2		ナシ	ナシ	
63		32.2	30.3	28.9	3.9	4.2	2.9		ナシ	ナシ	
64		34.9	31.2	29.0	3.4	3.1	2.3		ナシ	ナシ	
65		35.8	30.9	29.6	3.8	3.7	2.3		ナシ	ナシ	
66		35.2	31.4	29.5	3.6	3.5	2.3		ナシ	ナシ	
67		33.1	30.9	29.5	4.5	4.3	2.3		ナシ	ナシ	
68		34.9	31.0	28.8	3.7	3.7	2.5		ナシ	ナシ	
69		33.5	31.0	29.5	4.5	3.7	2.2		ナシ	ナシ	
70		31.5	29.1	28.1	3.5	3.3	2.2		ナシ	ナシ	
71		35.3	31.3	29.1	3.6	3.2	2.1		ナシ	ナシ	
72		32.0	30.5	29.0	2.8	3.3	2.4		ナシ	ナシ	
73		31.8	30.7	28.9	3.3	3.4	2.3		ナシ	ナシ	
74		34.7	30.8	28.4	2.8	4.8	3.0		ナシ	ナシ	
75		33.0	29.6	28.7	2.8	2.8	2.2	第33図6に同	ナシ	ナシ	
76		32.4	29.8	—	3.0	3.6	2.4		ナシ	ナシ	
81	発掘資料	—	—	—	—	—	—	第40図B	ナシ	ナシ	
82		—	—	—	—	—	2.3	第40図A2	ナシ	ナシ	
83		—	—	—	—	—	2.3	第40図A3	ナシ	ナシ	
84		—	—	—	—	—	2.3	第40図A3	ナシ	ナシ	
85		35.1	27.5	≈25.6	4.5	3.5	2.3		ナシ	アリ	
86		33.9	—	—	—	—	2.2		ナシ	ナシ	
87		34.8	28.1	≈27.9	4.9	5.1	2.4		アリ	ナシ	
88		37.2	—	—	—	—	2.7		ナシ	アリ	
89		35.3	—	—	—	—	2.6		ナシ	ナシ	
90		31.2	—	—	—	—	2.4		ナシ	ナシ	
91		36.8	29.0	—	5.5	—	2.3		アリ	アリ	SK3777出土
92		34.2	—	—	—	—	2.3		ナシ	ナシ	
93		—	—	24.0	—	3.6	1.9		ナシ	ナシ	
94		34.1	27.8	—	3.8	—	2.3		ナシ	ナシ	
95		35.6	—	28.9	—	4.2	2.3		ナシ	ナシ	SK3777出土
96		37.0	—	26.2	—	4.6	2.7		アリ	ナシ	第35図3
97		33.6	—	—	—	—	2.8		ナシ	ナシ	
98		29.8	—	—	—	—	2.3		ナシ	ナシ	
99		34.5	28.1	24.6	4.0	3.3	2.5		ナシ	ナシ	
100		34.2	≈30.2	28.1	4.1	4.7	2.2	第40図C 第41図6	ナシ	ナシ	
101		34.4	≈26.7	25.1	2.8	3.3	2.5		ナシ	ナシ	
102		34.0	—	23.4	—	4.9	2.3		アリ	アリ	第35図4 第32図 SK3777出土
103		34.8	30.8	—	3.4	—	2.3		ナシ	ナシ	
104		35.3	—	29.3	—	3.6	2.4		ナシ	ナシ	

駅名	出土地点	計測値						スタンプ	布目	糸切	備考
		No	道幅等	A(全長)	B(広幅幅)	C(狭幅幅)	D(広幅幅)				
H-105	発掘資料	36.2	-	24.6	5.5	4.2	2.2		ナシ	ナシ	第35図2 第33図
106		35.0	-	-	-	-	2.8		#	#	
107		37.6	-	-	-	-	2.6		アリ	#	
108		32.7	-	26.7	-	-	2.7		#	#	
109		38.0	-	-	-	-	2.5		ナシ	#	
110		33.2	-	-	-	-	2.3		#	#	
111		36.2	27.7	25.3	4.2	-	2.8		#	アリ	
112		30.3	-	29.9	-	3.2	2.5		アリ	#	
113		35.2	-	26.4	-	3.5	3.1		ナシ	ナシ	
114		33.4	27.0	25.1	5.0	3.5	2.6		#	#	
115		-	28.6	-	4.3	-	2.3		#	#	
116		33.3	27.7	24.2	4.5	3.8	2.2		#	#	
117		35.4	-	-	-	-	2.6		#	#	
118		35.8	-	-	-	-	2.1	第38図5	#	#	
119		31.9	-	-	-	-	2.3		#	#	
120		32.1	-	-	-	-	2.1		#	#	
121		-	-	27.0	-	3.8	2.2	第41図5	#	#	
122		33.4	27.2	-	4.0	-	2.7		#	アリ	
123		34.2	29.1	26.0	4.2	3.3	2.6		#	#	
124		-	-	24.6	-	4.0	2.6		アリ	ナシ	第35図1
125		36.5	-	-	-	-	2.7		#	#	
126		37.0	26.1	23.5	3.4	3.0	2.7		ナシ	#	
127		-	-	-	-	-	2.3	第38図1に異	#	#	
128		35.4	-	-	-	-	2.3	第38図15に異	#	#	
129		-	-	-	-	-	2.3		#	#	
130		37.1	31.9	-	5.3	-	2.9		ナシ	#	
131		35.8	-	-	-	-	2.2		アリ	#	
132		37.2	-	24.5	-	3.5	3.4		ナシ	アリ	

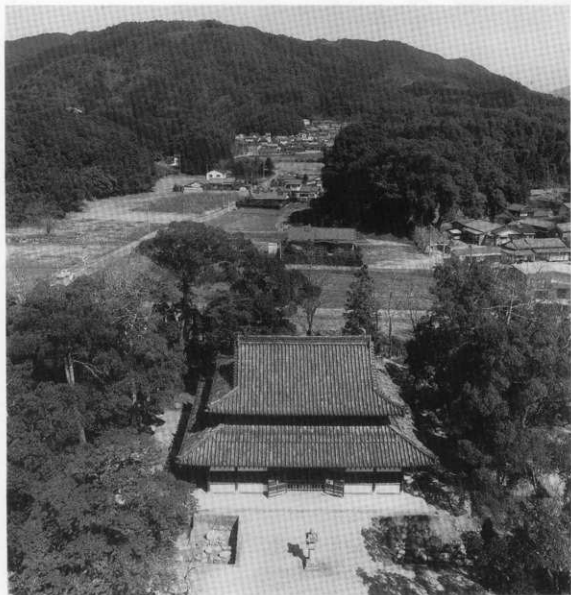


丸瓦・平瓦の計測点（丸瓦Fは丸瓦玉縁部の接合点の幅、丸瓦K・平瓦Fは中央部の厚さ）

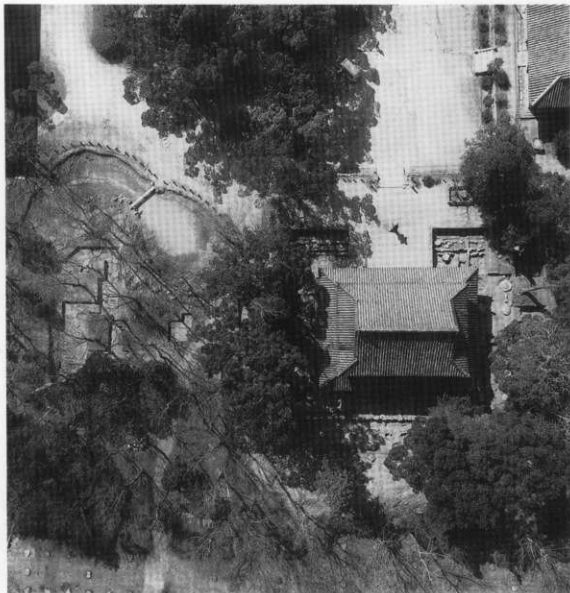
# 圖 版



觀世音寺伽藍古圖



観世音寺本堂を中心にして 正面から(空中写真)



第126次調査区全景(空中写真)





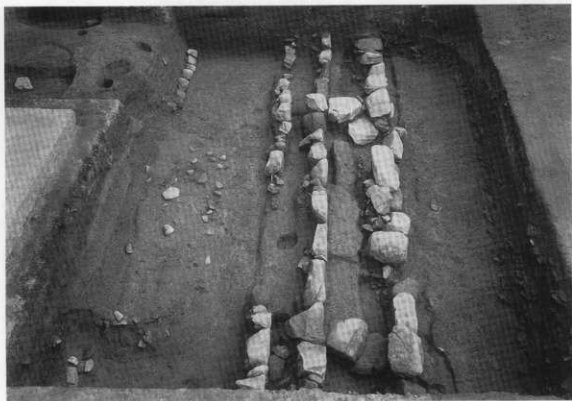
第126次調査 講堂跡調査区全景 背面から(空中写真)



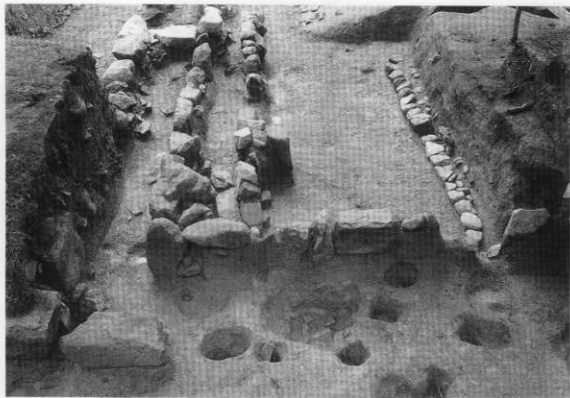
第126次調査 講堂跡調査区全景 正面から(空中写真)



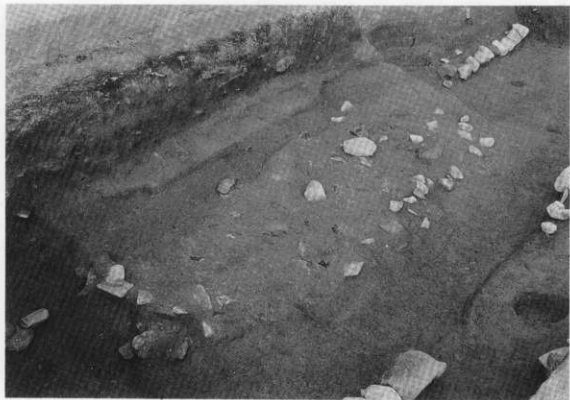
講堂跡SB3800東側部分(南から)



講堂跡SB3800東側前面部(西から)



講堂跡SB3800東側前面部(東から)



講堂跡SB3800正面東側階段(南西から)



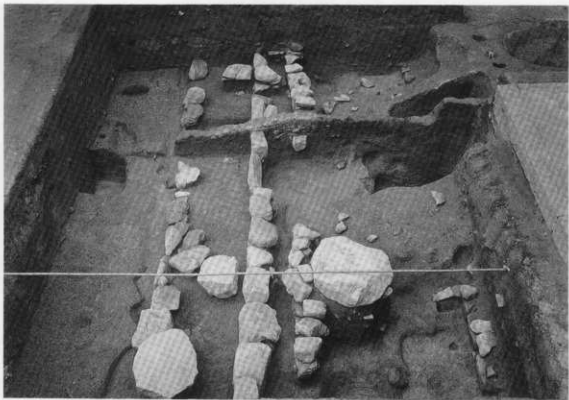
講堂跡SB3800東側部分(北から)



講堂跡SB3800東側部分(東から)



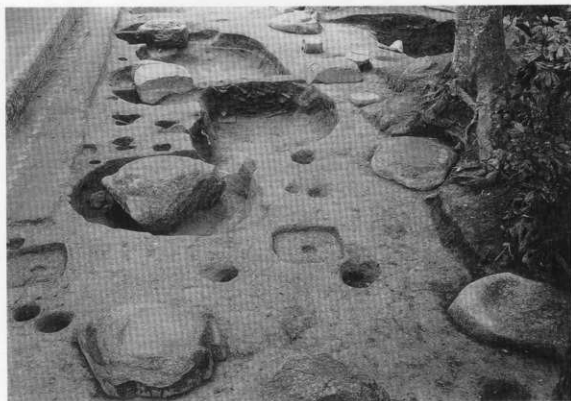
講堂跡SB3800西側部分(南から)



講堂跡SB3800西側前面部(東から)



講堂跡SB3800西側部分(北から)



講堂跡SB3800西側部分近景(北から)



講堂跡SB3800背面部(北から)



講堂跡SB3800背面部(北西から)

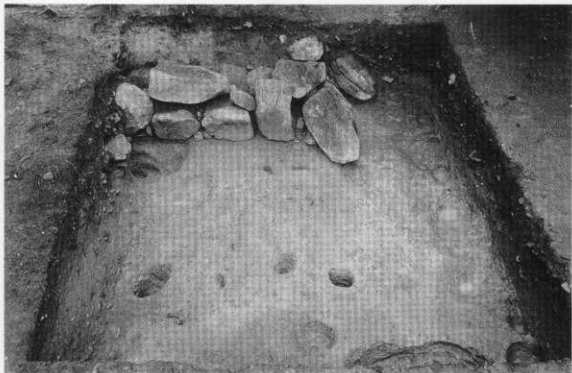


講堂跡SB3800背面部(北東から)



講堂跡SB3800背面部(東から)





講堂跡SB3800背面北西隅部(北から)



講堂跡SB3800基壇西側断面(北東から)



北面回廊跡SC3730 講堂との取り付け部(南から)



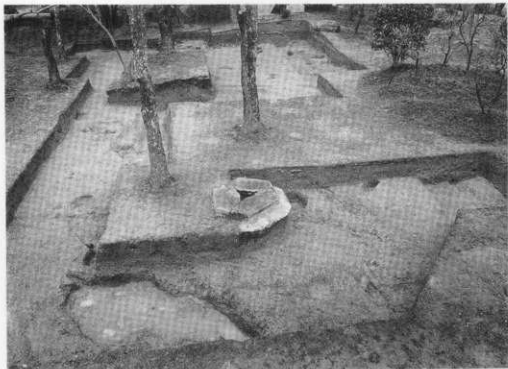
北面回廊跡SC3730 講堂との取り付け部(東から)



講堂跡SB3800A基壇西側西南部(西から)



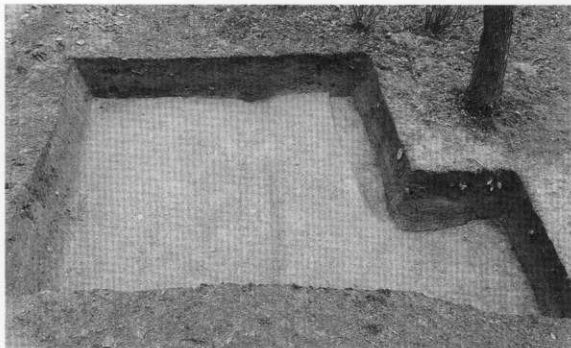
講堂跡SB3800A西南部基壇化粧近景(西から)



(上) 回廊跡SC3720・3730  
東北隅部全景(南から)

(下) 東面回廊SC3720と雨落ち溝  
SD3715(南から)





北面回廊SC3730と雨落ち溝SD3745(西から)



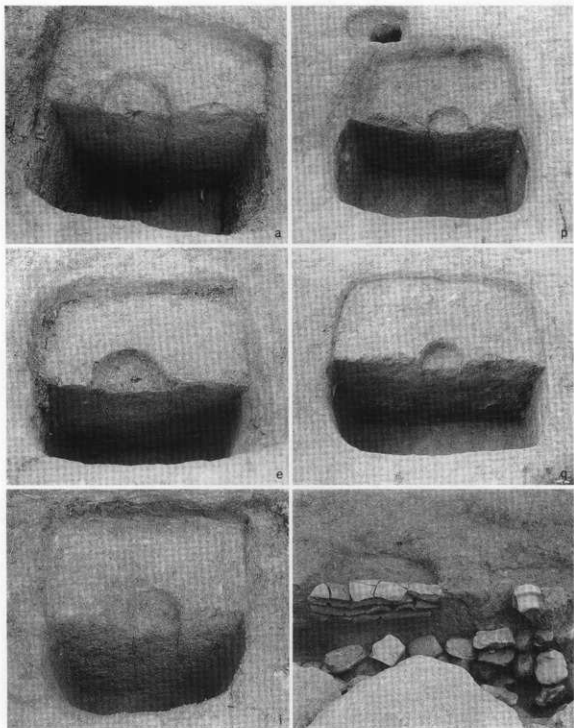
回廊西北隅調査区全景(北から)



土壙SK3770(東から)



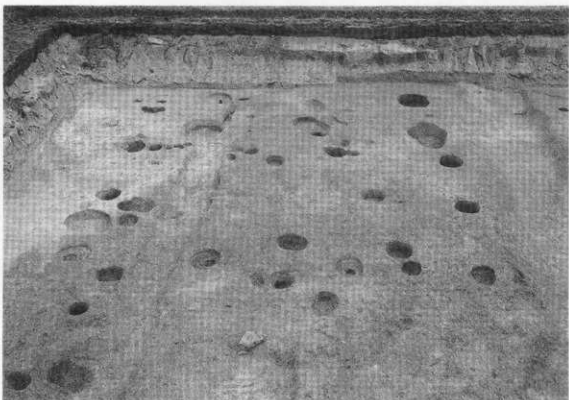
土壙SK3777(北から)



講堂跡SB3800第I期足場穴柱掘形



第129次調査区全景(西から)



掘立柱建物SB3815・3820(北から)





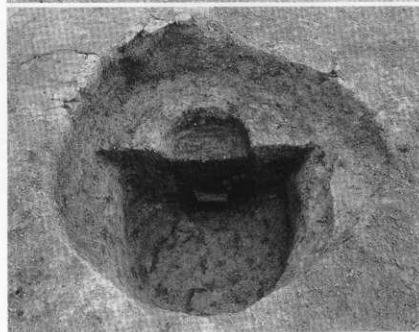
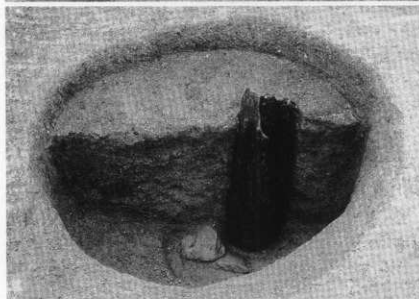
掘立柱建物SB3820(西から)



掘立柱建物SB2005(南から)



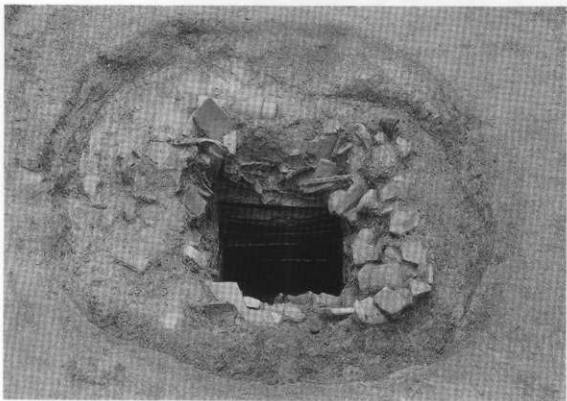
掘立柱建物SB2005  
(北から)



掘立柱建物SB2005柱掘形



第133次調査区全景(南から)



井戸SE3910(東から)



井戸SE3910(西から)



土壇SK3915(南から)



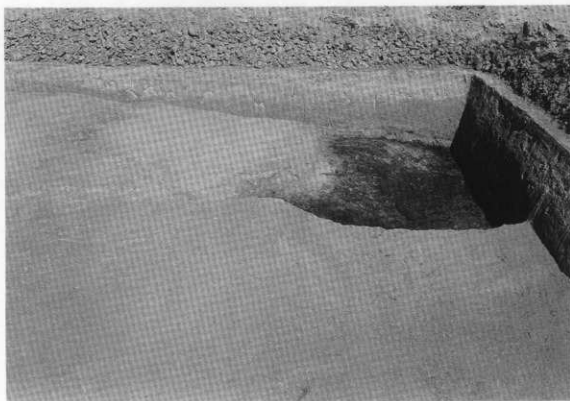
第134次調査区全景(北から)



溝SD3930(西から)



第136次調査区全景(西から)



第136次調査区東北部の谷(南から)



13



6



5

6

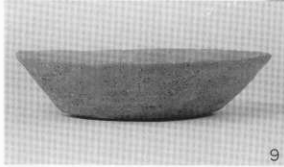
7



3



13



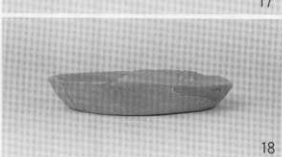
9



17



10



18



1



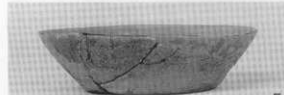
2



3



4



5



8



10



11



12

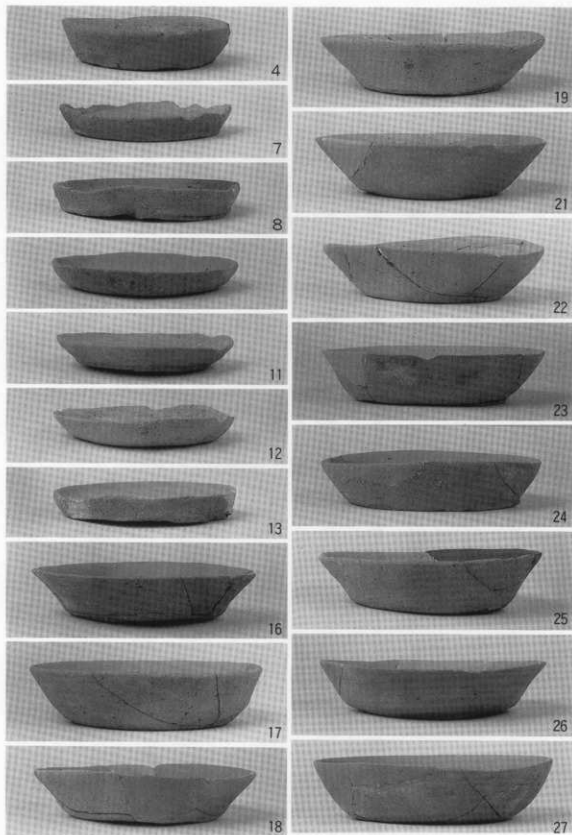


a

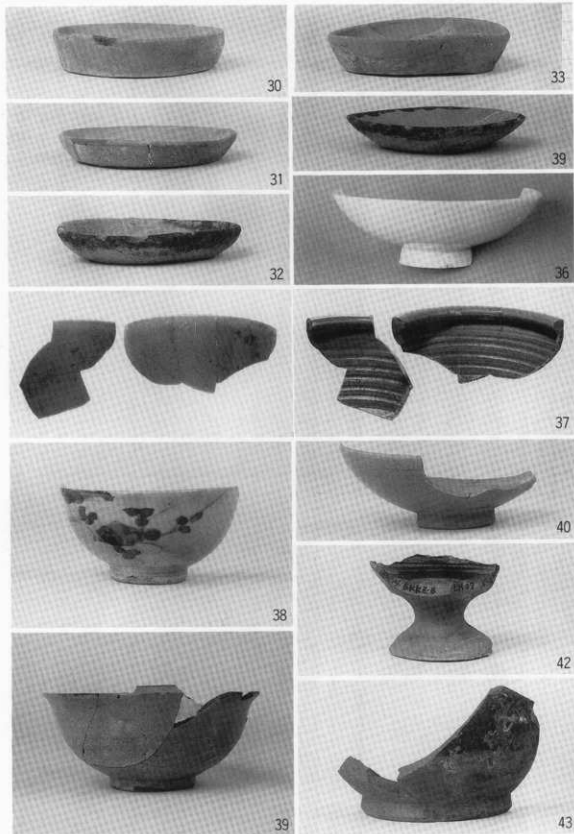


b

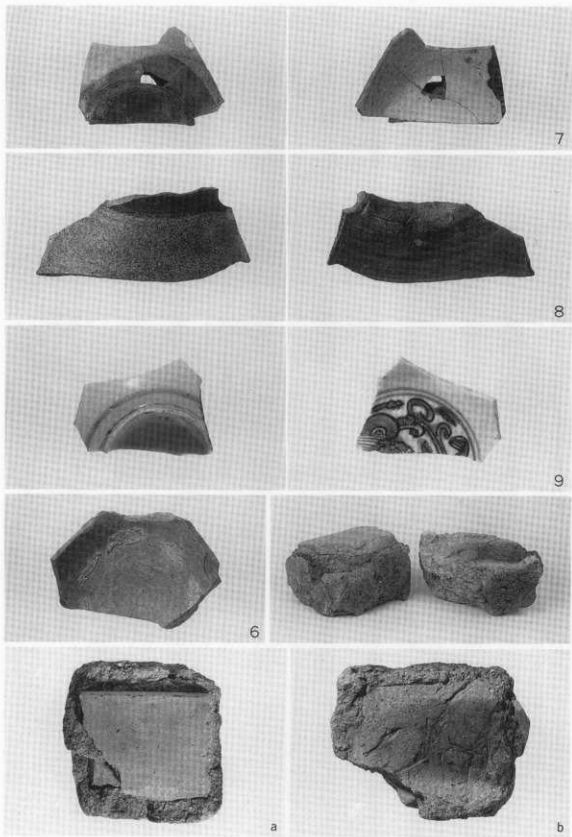




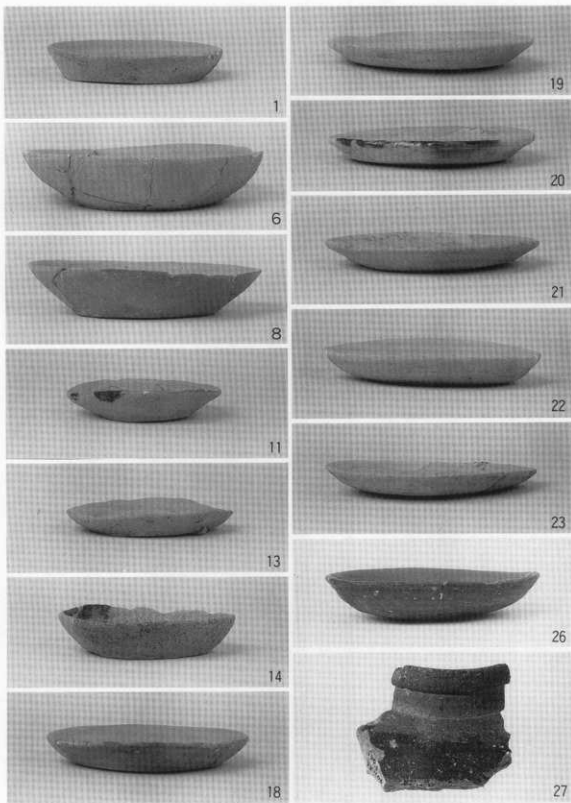
第126次調査 SK3775出土土器



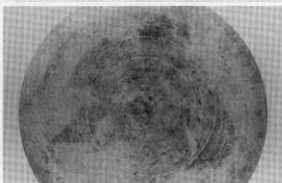
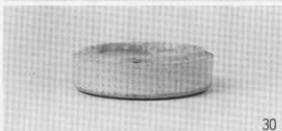
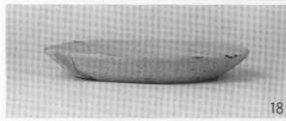
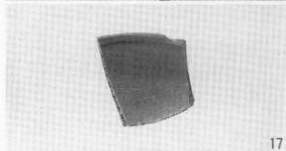
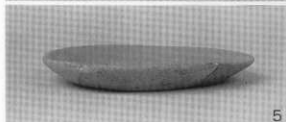
第126次調査 SK3777出土土器・陶磁器



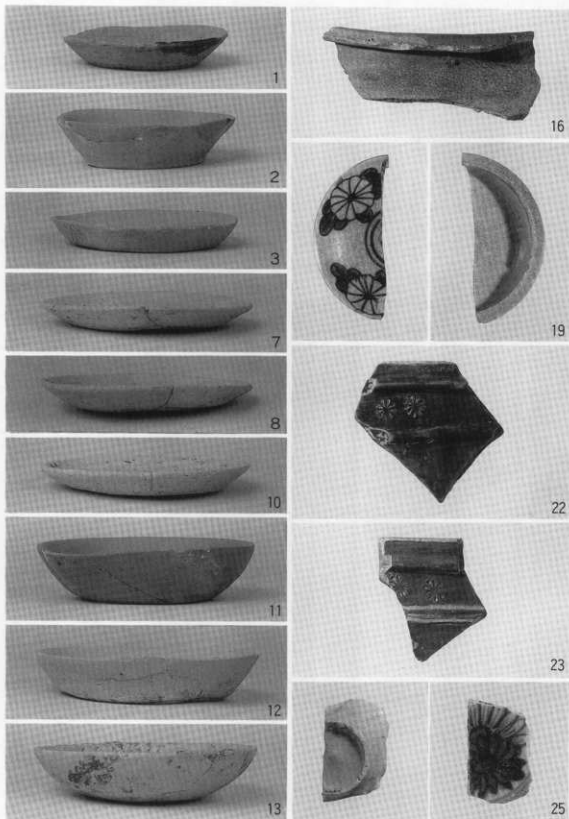
第126次調査 SK3777、その他の遺構・層位出土土器・炉壁



第126次調査 SK3791、SX3741・3771・3788・3794出土土器・陶磁器



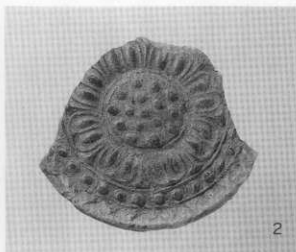
第126次調査 茶褐色砂層、黑色土層、瓦整地層、褐色土層土器、陶磁器



第126次調査 暗褐色土層、黄褐色土層、茶褐色土層出土土器、陶磁器



1



2



3



5



4



6

第126次調査 講堂跡・回廊跡出土軒丸瓦(1)



第126次調査 講堂跡・回廊跡出土軒九瓦(2)





第126次調査 講堂跡・回廊跡出土軒丸瓦(3)



16



17



18



19



20



21



22

第126次調査 講堂跡・回廊跡出土軒丸瓦(4)



第125次調査 講堂跡・回廊跡出土軒丸瓦(5)



31



32



33



34



35



36



37



38



39



40



41



42



43



45



44

第126次調査 講堂跡・回廊跡出土軒丸瓦(7)



1



2



3



4

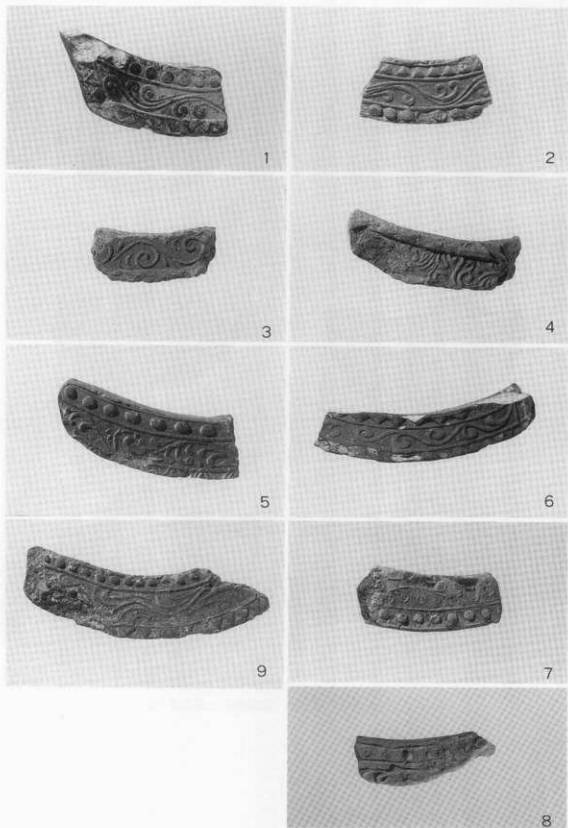


5

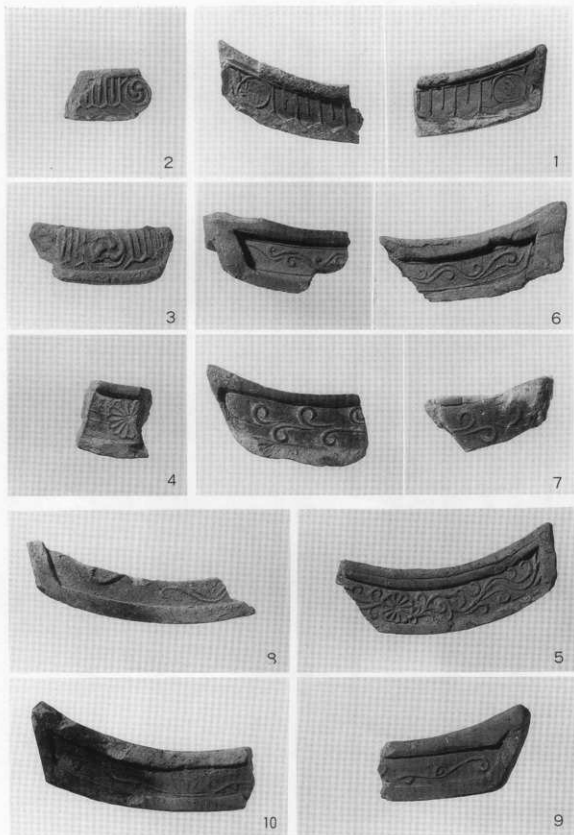


6

第126次調査 講堂跡・回廊跡出土軒丸瓦(8)

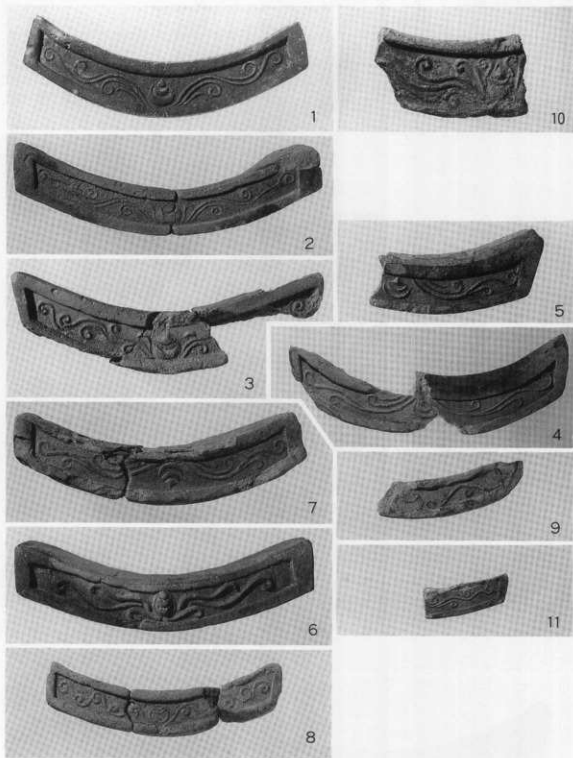


第126次調査 講堂跡・回廊跡出土軒平瓦(1)

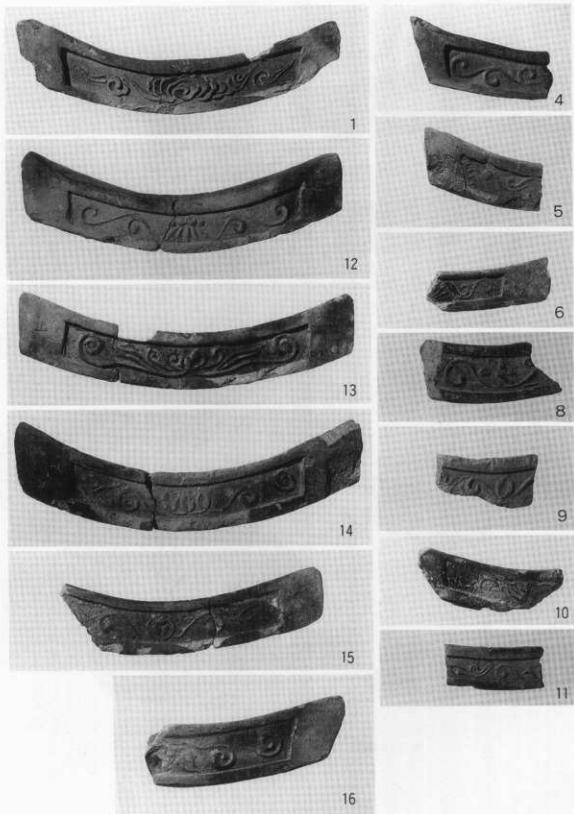


第126次調査 講堂跡・回廊跡出土軒平瓦(2)

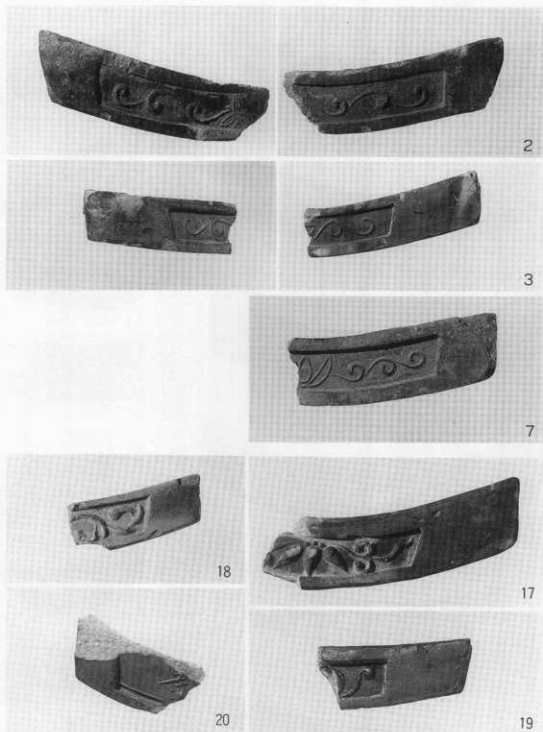




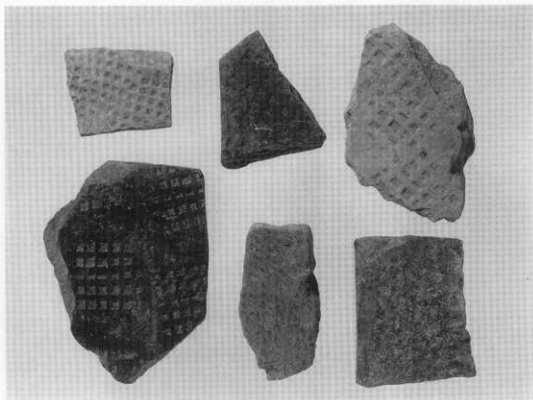
第126次調査 講堂跡・回廊跡出土軒平瓦(3)



第126次調査 講堂跡・回廊跡出土軒平瓦(4)



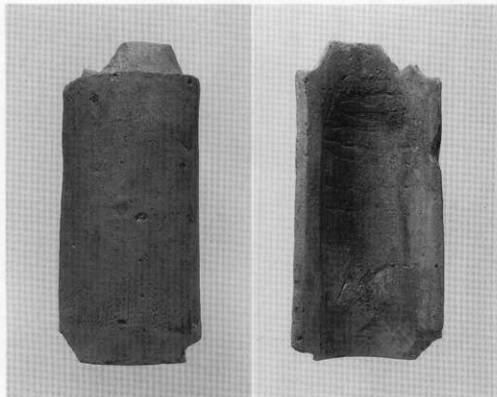
第126次調査 講堂跡・回廊跡出土軒平瓦(5)



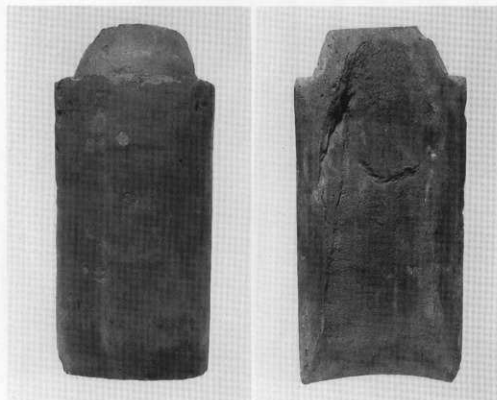
第126次調査 講堂跡基壇版築土中出土瓦片



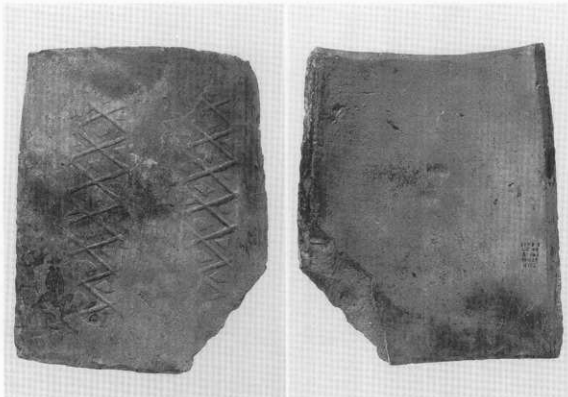
第126次調査 講堂跡出土丸瓦M075



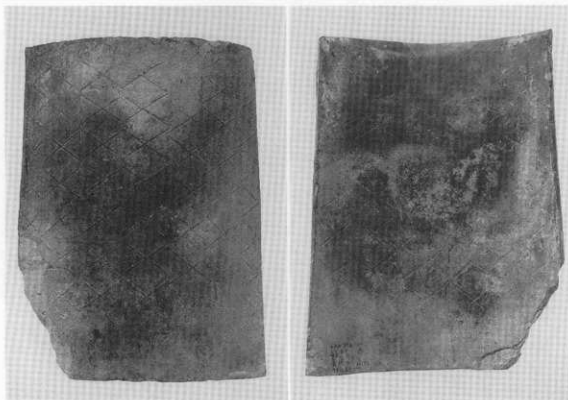
第126次調査 講堂跡出土丸瓦M087



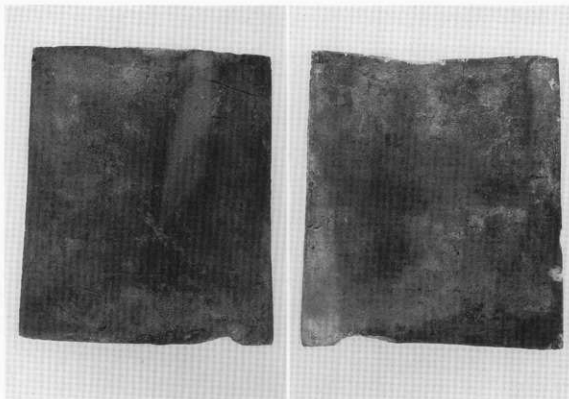
観世音寺所蔵丸瓦M005



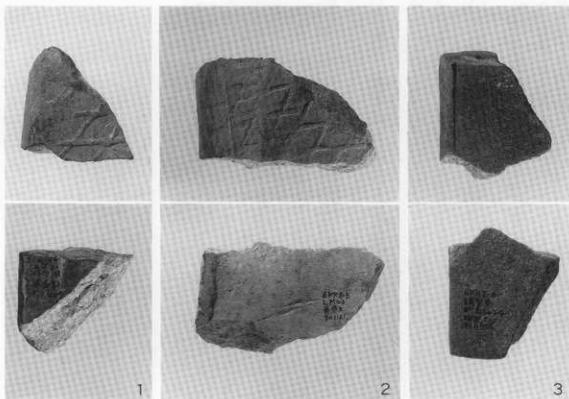
第126次調査 講堂跡出土平瓦H102



第126次調査 講堂跡出土平瓦H105



観世音寺所蔵平瓦H035



第126次調査 講堂跡出土平瓦一枚作り関連資料



4



5



21



23



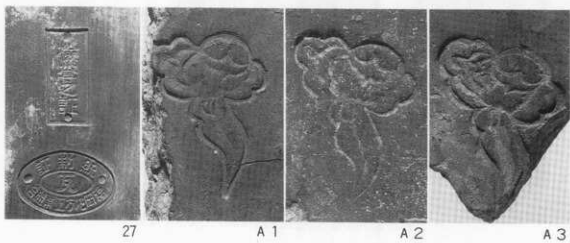
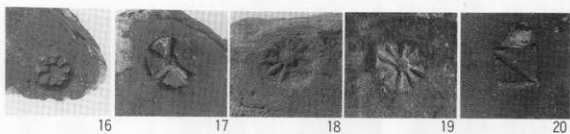
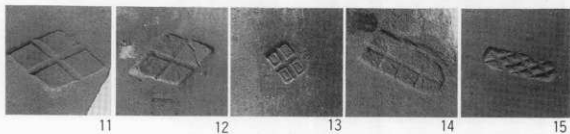
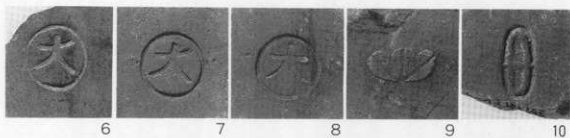
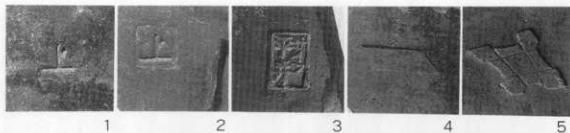
24



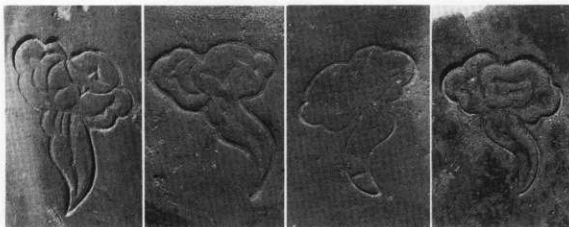
25

観世音寺所蔵、講堂跡・回廊跡出土文字瓦など





観世音寺所蔵、講堂跡・回廊跡出土丸瓦・平瓦刻印(1)



A 4

B

C

D



E

F

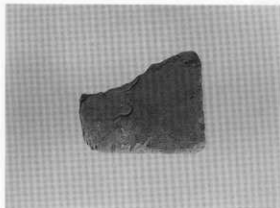
観世音寺所蔵、講堂跡・回廊跡  
出土丸瓦・平瓦刻印(2)



1

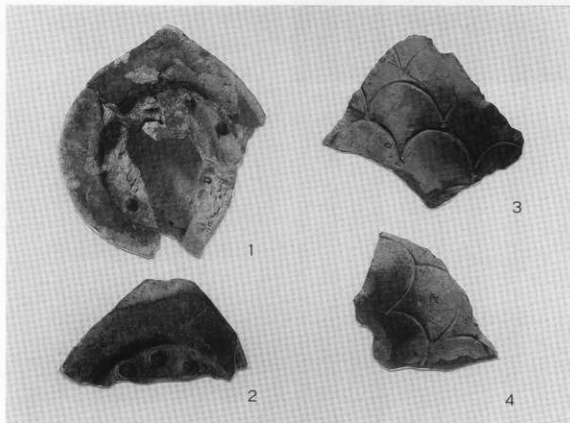
2

第126次調査 講堂跡出土雲文軒平瓦にみられる刻印



第126次調査 講堂跡出土軒平瓦にみられる刻印

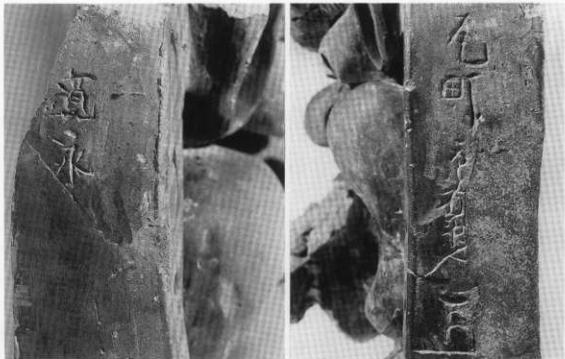
第126次調査 軒平瓦凹面に見られる布目端



第126次調査 講堂跡・回廊跡出土道具瓦



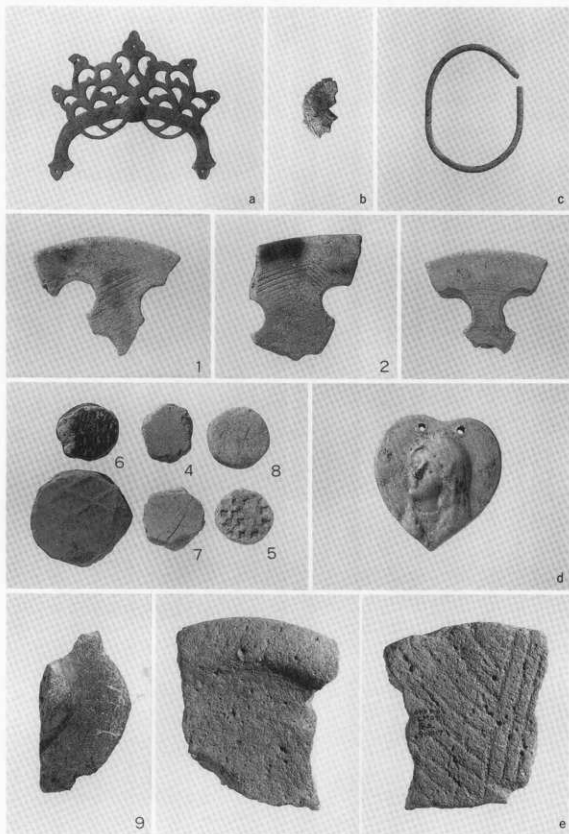
第126次調査 SK3777出土鬼瓦



第126次調査 SK3777出土鬼瓦の銘文

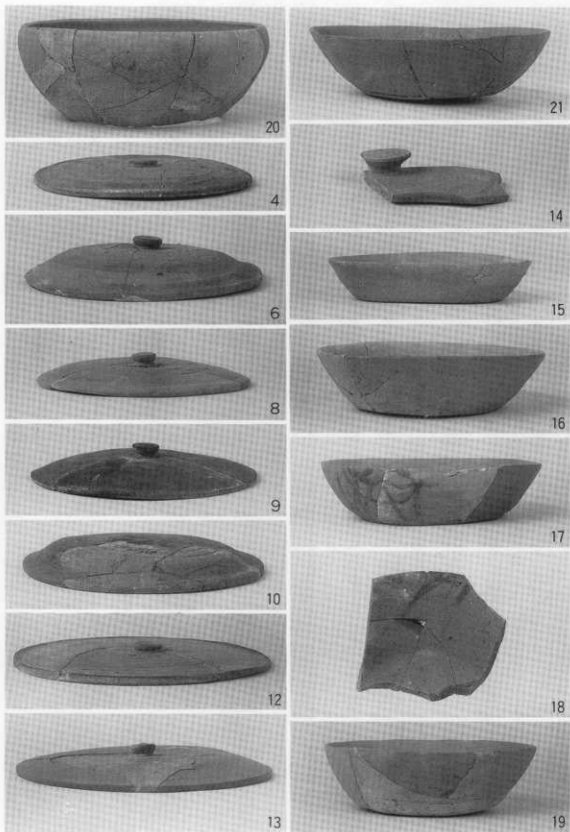


第126次調査 講堂跡出土文様埴



第126次調査 各遺構・層位出土銅製品・土製品・石製品





第129次調査 SX3830・3838出土土器(1)





79



21



22



24



26



49



28



30



32



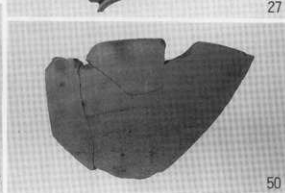
34



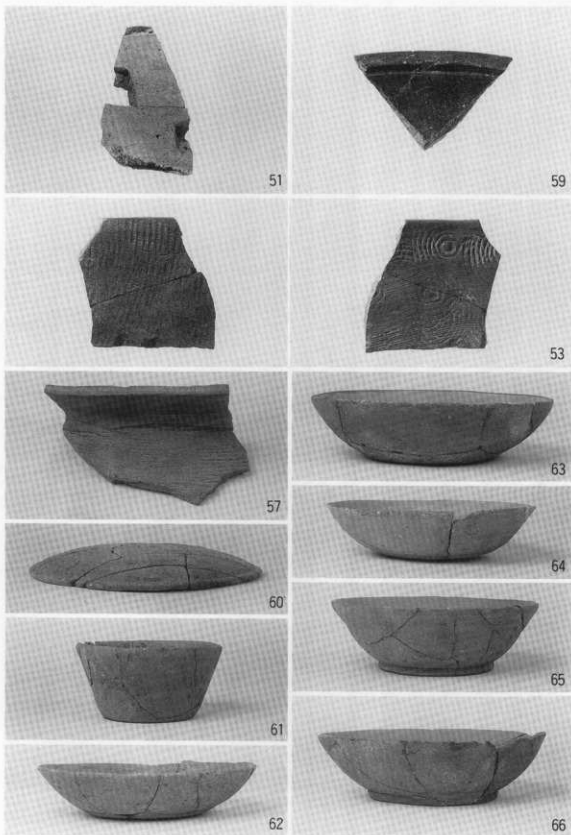
35



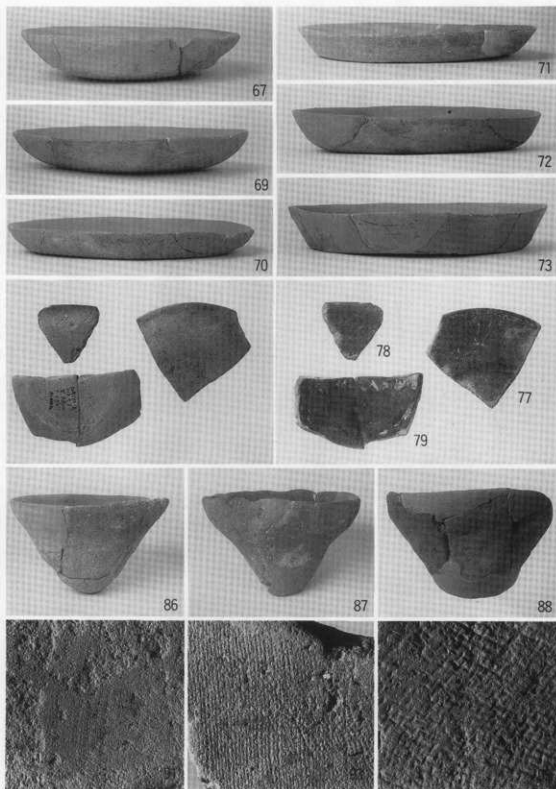
27

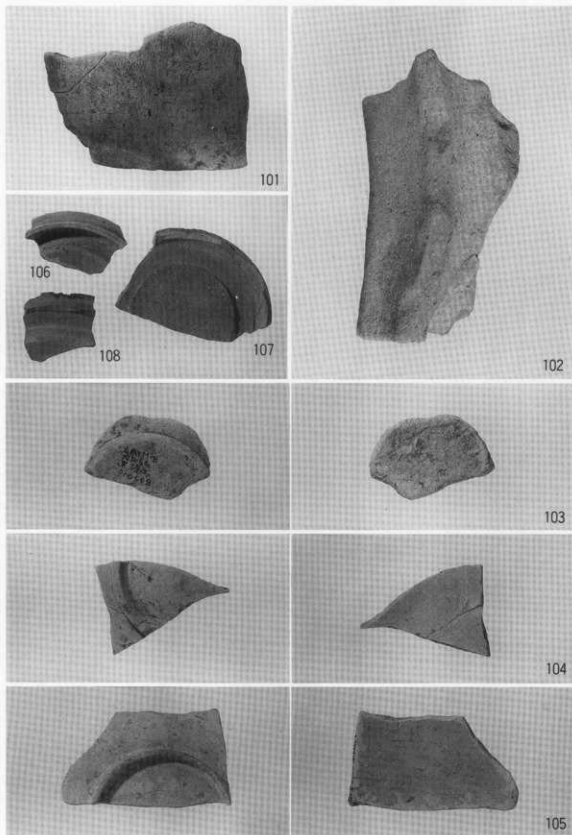


50

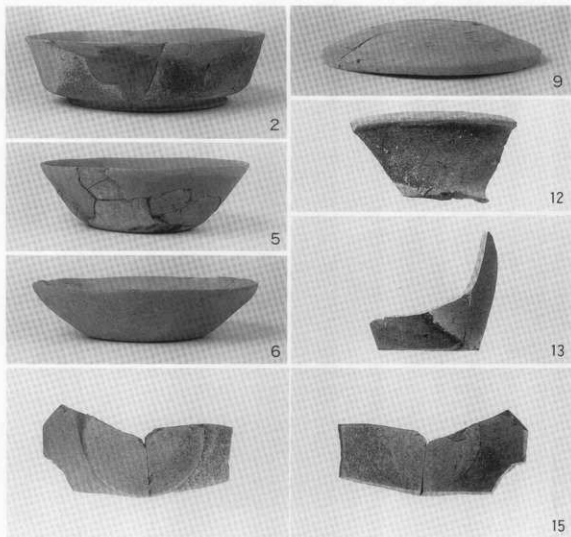


第129次調査 SX3838出土土器(3)

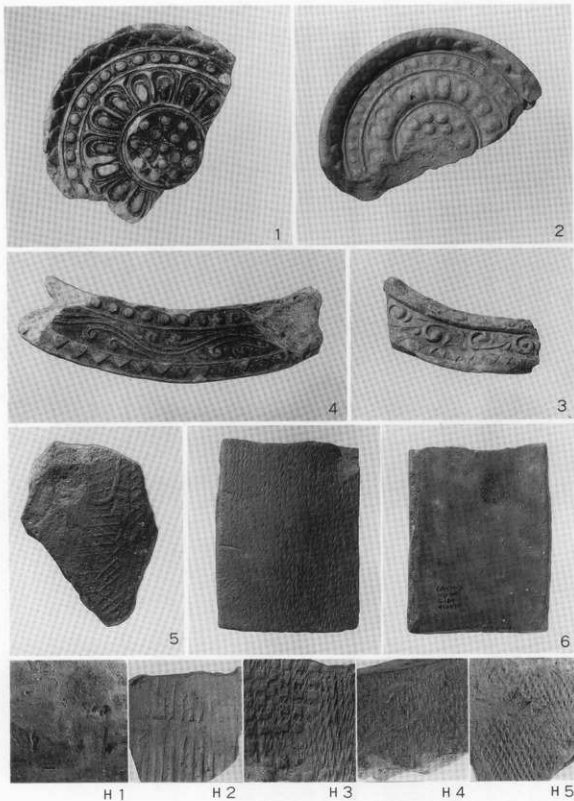




第129次調査 SX3838出土土器・陶器・硯・竈(5)



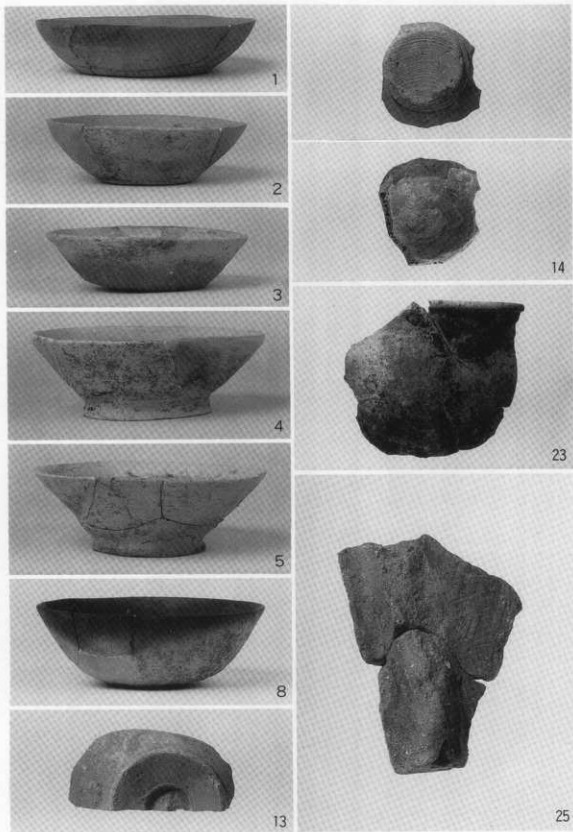
第129次調査 各層位出土土器・陶磁器



第129次調査 出土瓦類

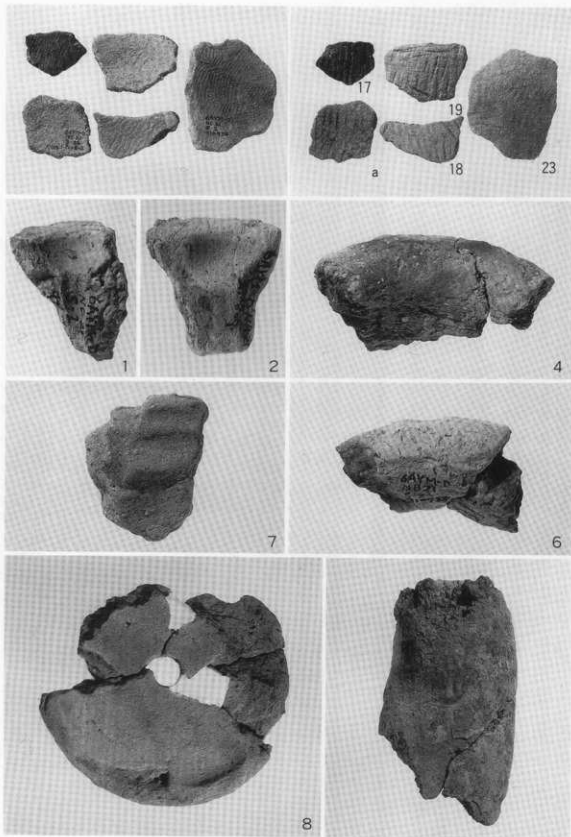


第131次調査 出土瓦類

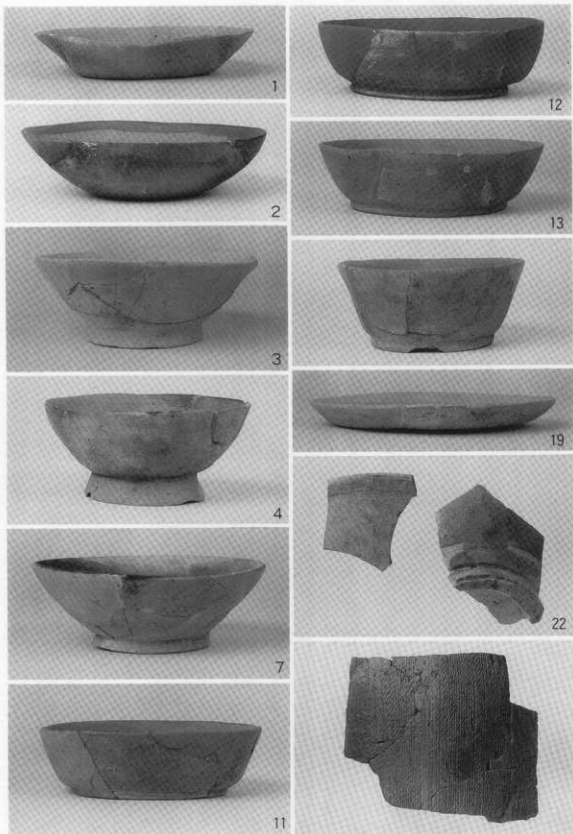


第133次調査 SE3910出土土器・陶磁器・竈

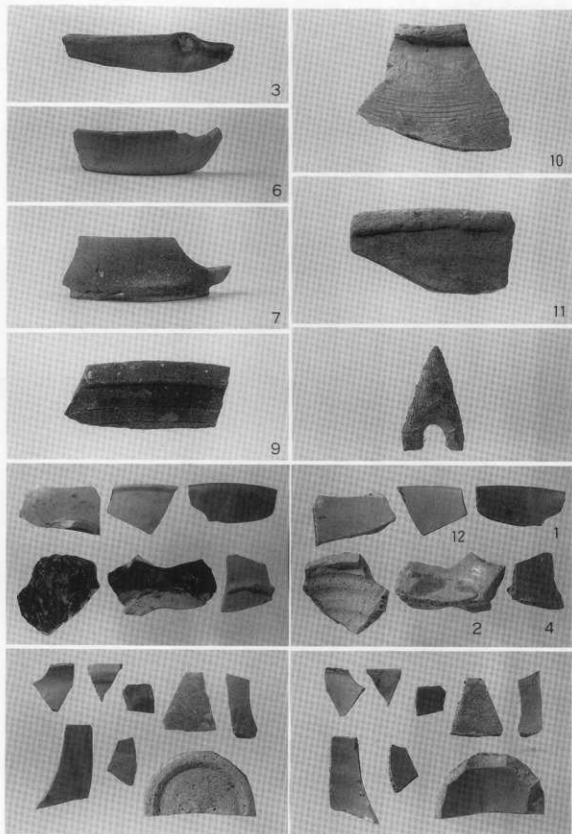




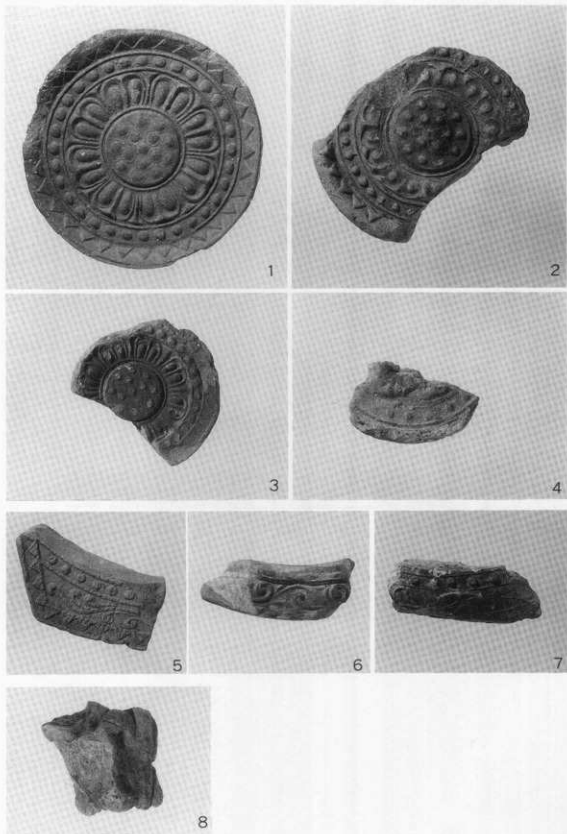
第133次調査 SE3910、SK3915、SX3919出土土器・土製品



第133次調査 SK3915・3920 SX3919出土土器・陶磁器・平瓦



第134次調査 SD3930・3931、SX3928、層位出土土器



第134次調査 出土瓦類

大宰府史跡

平成3年度発掘調査概報

平成4年3月

発行 九州歴史資料館  
太宰府市石坂4丁目7番1号

印刷 赤坂印刷株式会社  
福岡市中央区大手門1丁目8-34